太宰府市の文化財　第59集

# 太宰府条坊跡XIX

－第51・55次調査－

2002

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財　第59集

# 大宰府条坊跡XIX

－第51・55次調査－

2002年

太宰府市教育委員会

# 序

本書は昭和59・60年度に太宰府市が調査した大宰府条坊跡の発掘調査報告書です。

調査地点は太宰府市役所の北側、道路を挟んで真向かいの住宅地にあたります。この一角は字名を「御所ノ内（ごしょのうち）」と言い、早くから歴史的に重要な遺構が眠っているのではないかとして注目を集めていた地点であります。

はたして調査の結果、これを裏付けるかのような成果があり、第51次調査ではわずかな調査面積にもかかわらず大量の輸入陶磁器が出土し、この付近が中世大宰府における中心的な位置を占めていたことが判明いたしました。また第55次調査では奈良時代まで遡る遺構が検出され、この付近にも大宰府に関する何らかの遺構が展開していることを予想させてくれました。

調査からすでに18年という永い歳月が経過してしまいましたが、ようやく資料化が実現し、報告書の形としてまとめることができました。

調査に協力していただいた方々に感謝し、広く活用していただくことを願うばかりです。

平成14年2月

太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

# 例言

1、本書は太宰府市教育委員会が昭和59・60年度に調査を実施した、大宰府条坊跡第51次調査と同第55次調査の2地点を収録した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2、本書に掲載される遺構番号は以下の要領で理解される。

51　SK　000

調査次数　遺構種別　遺構番号

3、遺構実測の基準点は国土調査法第II座標系を用いている。したがって本書に記載される方位（図・文とも）はすべて座標北（G.N.）を表す。なお測点移動には山本信夫、岡部大治の協力を得た。

4、遺構の実測（1／20）は両地点とも鎧り方測量によって狭川真一が行い、遺構の写真撮影も狭川が行った。

5、出土遺物の実測は、松隈里恵子、今岡一恵、福井円、森田レイ子、宮崎亮一、中島恒次郎、狭川、図版の浄書はすべて狭川が行った。また遺物の写真撮影は狭川が行い、デジタル化についてはシステム・レコに依頼した。

6、本書に使用した土師器、須恵器の分類は『大宰府条坊跡』（太宰府市の文化財第5集）、陶磁器については『大宰府条坊跡XV　－陶磁器分類編－』（太宰府市の文化財第49集）による。また基本的な調査及び記録の方法は『佐野地区遺跡群I』（太宰府市の文化財第14集）を参照されたい。

7、整理及び報告書の作成は、平成11年度まで随時直営で実施していたが、平成12年度に本格的作業を行うにあたり、作業全般を（株）海援社に委託した。

8、本書の執筆及び編集は城戸康利が監修し、狭川真一が担当した。

# 目次

I. はじめに ―――― 1
II. 調査の概要
　第51次調査 ―――― 4
　（1）調査経過 ―――― 4
　（2）層序 ―――― 4
　（3）検出遺構 ―――― 6
　（4）出土遺物 ―――― 12
　（5）小結 ―――― 48
　第55次調査 ―――― 50
　（1）調査経過 ―――― 50
　（2）層序 ―――― 51
　（3）検出遺構 ―――― 51
　（4）出土遺物 ―――― 53
　（5）小結 ―――― 67
III. 総括 ―――― 69

# I. はじめに

大宰府条坊跡は南北2.2km、東西2.4kmという広大な範囲を周知の遺跡として認識するもので、一部は隣接する筑紫野市にまで及んでいる。

当該遺跡は早くには福岡県教育委員会、九州歴史資料館等の手で調査が実施されていたが、昭和54年度からは太宰府市教育委員会が中心となって遺跡の実態解明に力を注いできた。近年では筑紫野市教育委員会でも調査の蓄積がなされ、平成12年度現在ですでに220次を越えるに至っている。

これらはバブル期の狂気的な開発ラッシュに対応することによって拍車がかかったわけだが、その裏側で出土遺物の整理作業は後回しとなり、かなり多くの件数を積み残すという憂うべき事態が続いていた。しかし太宰府市文化ふれあい館の設置により、整理空間と作業補助者の人員確保がある程度なされたことにより徐々に整理が進行しつつある。そのような中、整理報告の方針として蓄積された条坊跡の報告を調査次数順ではなく、ある一定のエリアでまとめて報告するという方向が打ち出され、90年代半ば以来、事務処理上独立する必要があるものを除いてこの方針のもとで整理・報告作業が進められてきた。例えば『大宰府条坊跡VII』では大字通古賀字鶴畑で行った第44次、65次、81次、89次の4地点を報告し、平安期条坊の1区画のモデルを提示した。また『大宰府条坊跡X』では第43次、59次、64次、68次、73次、76次、91次、93次、94次、117次、121次、142次調査という12件もの報告をまとめたがいずれも大宰府条坊中軸線周辺に位置する地点であり、大宰府朱雀大路の解明に多大な情報を提供することとなった。さらに『大宰府条坊跡XIV』では大宰府の西市があったと考えられている現在の都府楼団地周辺で行った第77次、120次、154次、177次、194次、206次調査をまとめて掲載し、条坊南辺地区の様相が具体的に示されつつある。本書に掲載した第51次と第55次も近接した位

Fig.1　調査地位置図（1／25,000、●：上が条55次、下が条51次）

置にあり、いずれも字御所ノ内にあるという点でここにまとめて報告する機会を得た。ただ同一のエリアには第52次、第140次をはじめ少なくとも5件以上の未報告地点を残している（Fig.2）。これらをふくめて報告することは時間的、予算的にも問題が多く、今回は整理が進んでいるこの2地点をまず報告することとした。なお、各々の調査体制は以下のとおりである。

第51次調査（昭和59／1984年度）

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 教育長 | 陶山直次郎 |
| | | 藤　寿人（60年3月14日～） |
| 庶務 | 社会教育課長 | 西山義則（～59年9月30日） |
| | | 花田勝彦（59年10月1日～） |
| | 文化財係長 | 黒板　力 |
| | 主事 | 岡部大治 |
| 調査 | 技師 | 山本信夫 |
| | | 狭川真一（調査担当） |

第55次調査（昭和60／1985年度）

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 教育長 | 藤　寿人 |
| 庶務 | 社会教育課長 | 花田勝彦 |
| | 文化財係長 | 黒板　力 |
| | 主事 | 岡部大治 |
| 調査 | 技師 | 山本信夫 |
| | | 狭川真一（調査担当） |

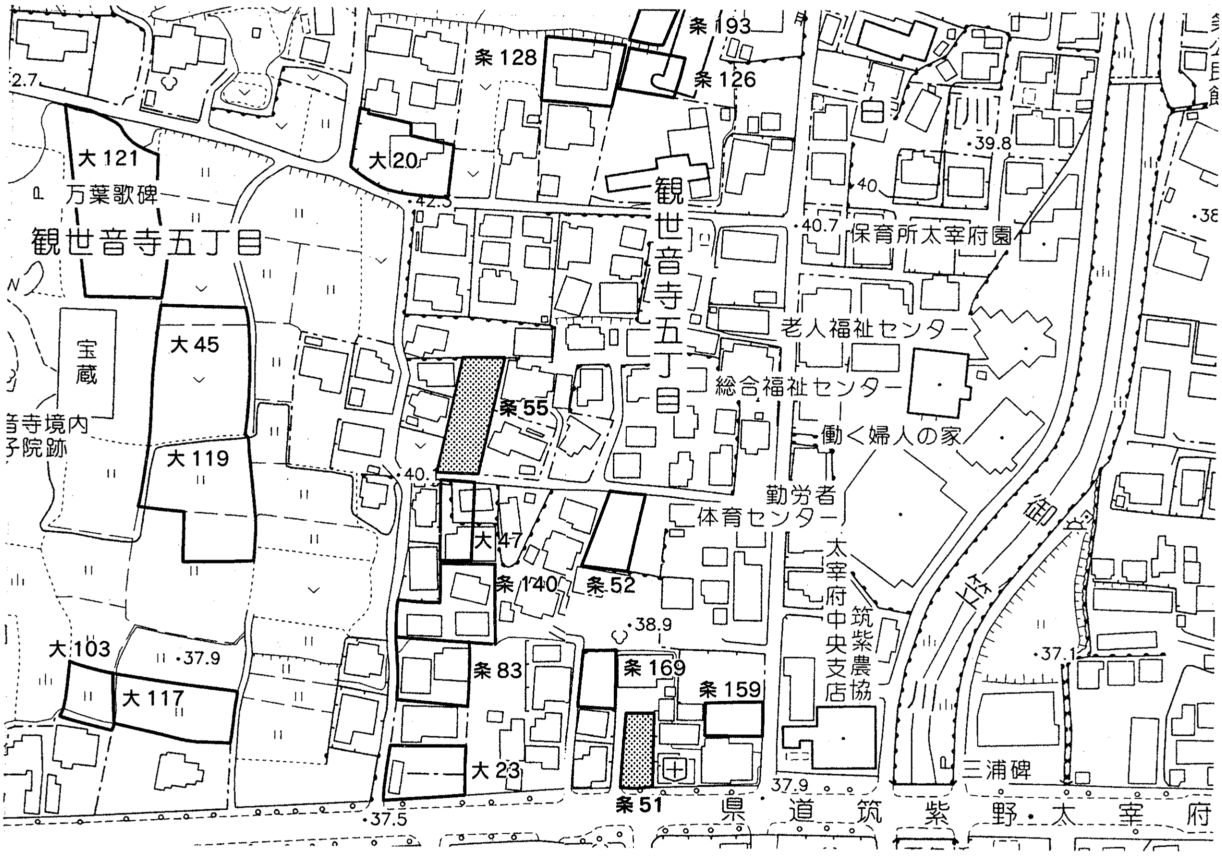



Fig.2　御所ノ内周辺の調査地点（1／2,500、大○○は大宰府史跡、条は大宰府条坊跡を示す）

整理作業（平成12／2000年度）

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 教育長 | 長野治己（～12月24日） |
| | | 關　敏治（12月25日） |
| 庶務 | 教育部長 | 白石純一 |
| | 文化財課長 | 木村和美 |
| | 文化財保護係長 | 和田敏信 |
| | 文化財調査係長 | 山本信夫（～10月23日） |
| | | 神原　稔（11月1日～） |
| | 主任主事 | 藤井泰人　野寄美希 |
| | 嘱　　託 | 鈴木弘江 |
| 調査 | 技術主査 | 城戸康利（監修担当） |
| | 主任技師 | 山村信榮　中島恒次郎　井上信正　高橋　学　宮崎亮一 |
| | 技師（嘱託） | 下川可容子　森田レイ子　佐藤道文 |

# II. 調査の概要

## 第51次調査

（1）調査経過

調査地は太宰府市大字観世音寺字御所ノ内77－12～14（現在は観世音寺五丁目1-6）に所在し、太宰府市役所の真向かい（道路を隔てた北側）に位置する。

昭和59年度の前半に当該地に病院建設の計画があるという情報が社会教育課（当時）にもたらされ、その位置が字御所ノ内として早くから重要地点として注目されていたことと、近接地が九州歴史資料館によって昭和53年度に調査（大宰府史跡第47次調査）され重要な所見を得ていたこと等から試掘調査は実施せず、すぐ地権者（富田貴子氏）と協議を行い、その段階で作業を実施していた大宰府条坊跡第50次調査が終了したのちに調査に入ることで合意を得た。

調査は昭和60年2月27日から3月25日まで実施し、狹川真一が担当した。調査対象面積は324m²、調査面積は45m²（上下2面を遺構検出しさらに一部で断ち割りを行っているため、実質の調査面積はこの数値の2倍強）である。

（2）層序（Fig.3～5、CD-0023～0042）

調査できた遺構面は2面（実際は5面程度存在したらしいが、時間と費用の制約、その他の条件から2面のみの調査にとどまった）だが、その上下には複数の堆積土（整地土）が確認され、それぞれに多数の遺物を包含していた。これらを単純に前後（上下）関係で説明することは難しいが、まず北側の壁面周辺で確認した土層を整理し、これらに南側での堆積状況を加えつつ説明してゆきたい。

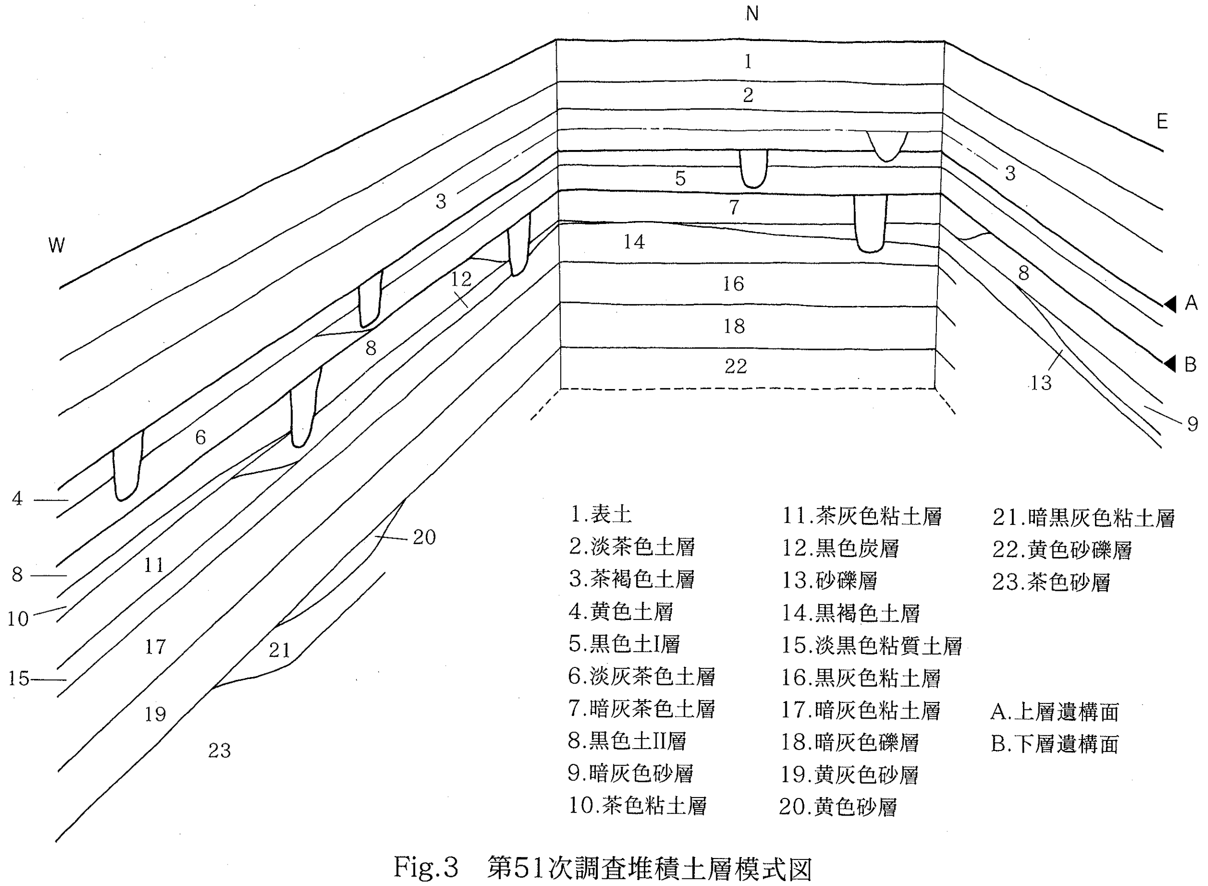
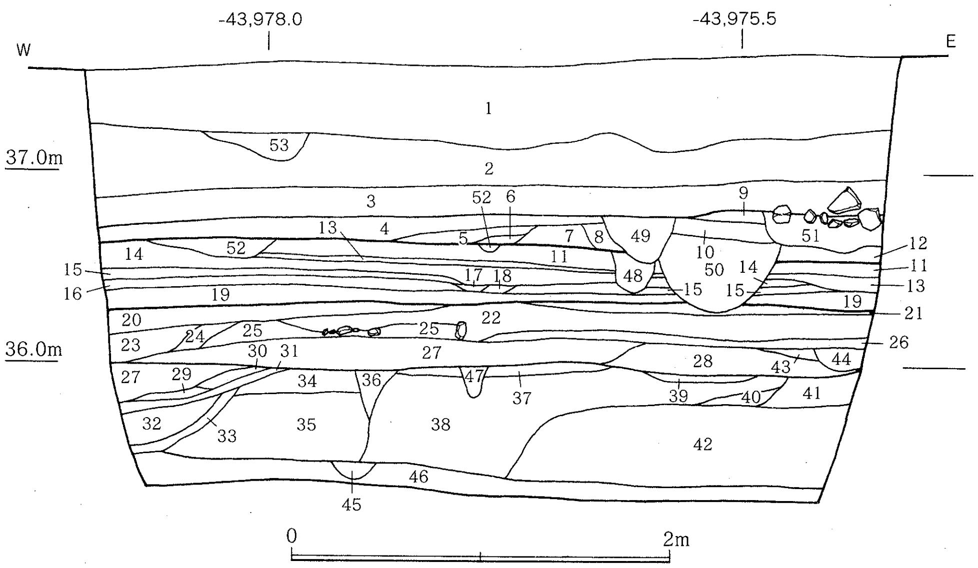



Fig.3　第51次調査堆積土層模式図




土層名一覧

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 表土（近現代盛土） | 28 | 淡黒灰色土 |
| 2 | 淡茶色土 | 29 | 黒褐色粘質土 |
| 3 | 茶褐色土 | 30 | 黒褐色粘質土（黄色ブロック混） |
| 4 | 暗茶褐色土 | 31 | 茶灰色砂土 |
| 5 | 黄灰色砂質土 | 32 | 灰褐色土 |
| 6 | 黄灰色砂質土（焼土混） | 33 | 暗灰色砂土 |
| 7 | 暗茶褐色土（炭混） | 34 | 明黒灰色土 |
| 8 | 暗茶褐色土（炭多量混） | 35 | 暗灰色粘土 |
| 9 | 黄褐色土（炭混） | 36 | 灰茶色粘土 |
| 10 | 暗茶褐色土（焼土混） | 37 | 黄色粘土 |
| 11 | 黄色土 | 38 | 黒灰色粘土 |
| 12 | 暗茶褐色土（黄色ブロック混） | 39 | 茶灰色砂質土 |
| 13 | 黒色土（きわめて薄い） | 40 | 茶灰色砂質土 |
| 14 | 黄色土 | 41 | 淡灰色粘土 |
| 15 | 黒色土（焼土混） | 42 | 暗黒灰色粘土 |
| 16 | 黄色土 | 43 | 黄灰色土 |
| 17 | 黄色粘質土 | 44 | 明茶灰色粘土 |
| 18 | 暗茶褐色土（黄色ブロック混） | 45 | 暗黒灰色粘土 |
| 19 | 黄白色砂 | 46 | 茶色砂 |
| 20 | 暗灰茶色土 | 47 | 茶灰色砂質土 |
| 21 | 暗灰茶色土（51SX100） | 48 | 淡茶色土（黄色ブロック混） |
| 22 | 淡灰茶色土（51SX100） | 49 | 淡茶色土（礫混） |
| 23 | 茶灰色砂土 | 50 | 淡茶色土（褐色ブロック・炭混） |
| 24 | 黄色粘土 | 51 | 暗灰茶色土 |
| 25 | 黄色粘土（礫混） | 52 | 淡茶褐色土 |
| 26 | 灰褐色砂土 | 53 | 暗茶色土（礫混） |
| 27 | 黒褐色土 | | |

遺物取上層位名との対比

| | | 土層番号 |
|---|---|---|
| 表土 | …… | 1 |
| 淡茶色土 | …… | 2·9 |
| 茶褐色土 | …… | 3·4·10(5～8·51) |
| 黄色土 | …… | 11 |
| 黒色土I層 | …… | 13～18 |
| 黒色土II層 | …… | この面該当なし |
| 暗灰茶色土 | …… | 20～22 |
| 黒色炭層 | …… | この面該当なし |
| 砂礫層 | …… | 23～26 |
| 黒褐色土 | …… | 27·28（43·44） |
| 黒灰色粘土 | …… | この面該当なし |
| 暗灰色礫層 | …… | この面該当なし |
| 黄色砂礫層 | …… | この面該当なし |
| | | |
| 最上層遺構 | …… | 49·50 |
| 上層遺構 | …… | 48·52 |
| 下層遺構 | …… | この面該当なし |
| 最下層遺構 | …… | 45 |

Fig.4　第51次調査北壁土層観察図（1／40）

表土は厚さ0.3～0.5mで近現代の盛土である。それを除去すると淡茶色土層となりその下位に茶褐色土層がある。詳細に観察した結果、この茶褐色土層は上下に二分でき、その間に遺構面が1つ存在したようであるが、調査は行えていない。したがって茶褐色土層出土遺物中には上下の層及びそれに挟まれる遺構内の遺物が混在していることになる。また、この層から切り込む遺構には当然のことながら深めのものも含まれており、上層遺構面で検出された遺構中にはこの上位から切り込む遺構も混じっていることを確認しておかなければならない。

この茶褐色土層を除去すると今回調査した上層遺構面が検出される。遺構は黄色土層上面から切り込んでおり、複雑な堆積層のわりには識別は安易な部類であった。この遺構を形成する堆積土は明ら

かに意識した整地土で、黒色と黄色の土を交互に積んだ丁寧なものである。したがって黄色土層の下位には黒色土I層がくる。ただし土層図にみるような細かな分層作業は掘削ではかなり困難であることと、場所によって黒色土と黄色土が逆転している部分もあり、この点でも一連の作業による整地であることは認識できるであろう。

さてこの下層には暗灰茶色土層が厚く堆積し、その上が下層遺構面と認識される。しかしこの暗灰茶色土層は北端部分にのみみられるだけで、調査区北端から3mほど南にくだると観察できなくなる。その位置ではこれにかわって再び厚めの黒色土層（先のものと区別するために黒色土II層とする）が堆積する。厳密には黄色土層も薄めながら存在し、上層遺構面を形成する整地土と類似した様相を呈している。これも下層遺構面を形成する土層と認識して差し支えない。したがって暗灰茶色土層、黒色土II層は色調は異なるものの同一整地と認識できると考える（調査区東側の一部で黒色土II層の下位に暗灰色砂層が観察されたが、同じ整地と認識している）。なお、黒色土I層及びII層からは多量の土器が出土しているのに対して、黄色土層からは少量しか出土しておらず、このことも黄色土層がある程度意識された整地であることを物語るものと言える。

これら一連の整地の下層にはまず北側から東側では砂礫層、西側から南側ではそれとほぼ同一レベルで黒色炭層、茶色粘土層、茶灰色粘土層が確認できる。それ以下は土層観察のみに留まる狭いトレンチによる確認であり、さらに下位がかなり複雑に入り乱れているところを人工層位的（ある程度は観察しながら作業しているが）に調査したこともあって、詳細な土層図と掘削に伴う仮称の土層名とはほとんど合致してこない。ただ上下関係は確実におさえており参考にはなろう。

まず黒褐色土層（南側では淡黒色粘質土層としたが同一と判断。前後関係は不明）、その下位に黒灰色粘土層（南側では暗灰色粘土層としたが同一と判断。前後関係は不明）、暗灰色礫層（南側では黄灰色砂層としたが同一と判断。前後関係は不明）となる。さらに北側では黄色砂礫層が下位に見えていた。また南側では黄色砂層、暗黒灰色粘土層の堆積が一部にあり、その下に茶色砂層が確認できた。この茶色砂層は全体に広がりをみせており、この上面から切り込む遺構もわずかだが確認できたため一つの遺構面を形成していたと考えられる。しかし今回は全体を調査することはできなかった。ただこの茶色砂層もいわゆる地山ではなく堆積地盤であり、御笠川の古い氾濫に伴う堆積地盤である可能性が高い。

以上の観察結果を模式図に示せばFig.3のようになる。また北面と西面の土層観察図はFig.4・5のとおりである。ここで付け加えるならば、西壁の観察結果からみると調査区南端部分は土層が乱れており、2面あった整地面も明確には続かない。平面的な調査でも認識がきわめて難しく、南端部の2mほどは遺構が確認できなかった。狭いトレンチのためその理由を明確にはできないが、この付近から南は、当時の宅地域から外に位置していた可能性も考えておく必要があろう。この部分については周辺での調査機会を待って再確認する必要がある。

(3) 検出遺構

**ア）上層遺構**（Fig.6、CD-0001～0003）

**土抗**

**51SK015**（CD-0004・0005）　調査区の東端隅部分で検出された浅い土抗で、東と南が調査区外にあり全容は不明ながら隅丸方形を呈していたと思われる。現状の規模は南北0.8m以上、東西0.5m以上で、床面は中程がくぼんでおり、その部分での深さは遺構検出面から約0.1mである。埋土中から龍泉窯系青磁坏と皿がほぼ完全なままいずれも伏せた状態で並ぶように出土したが、人為的なものかどうかは不明である。

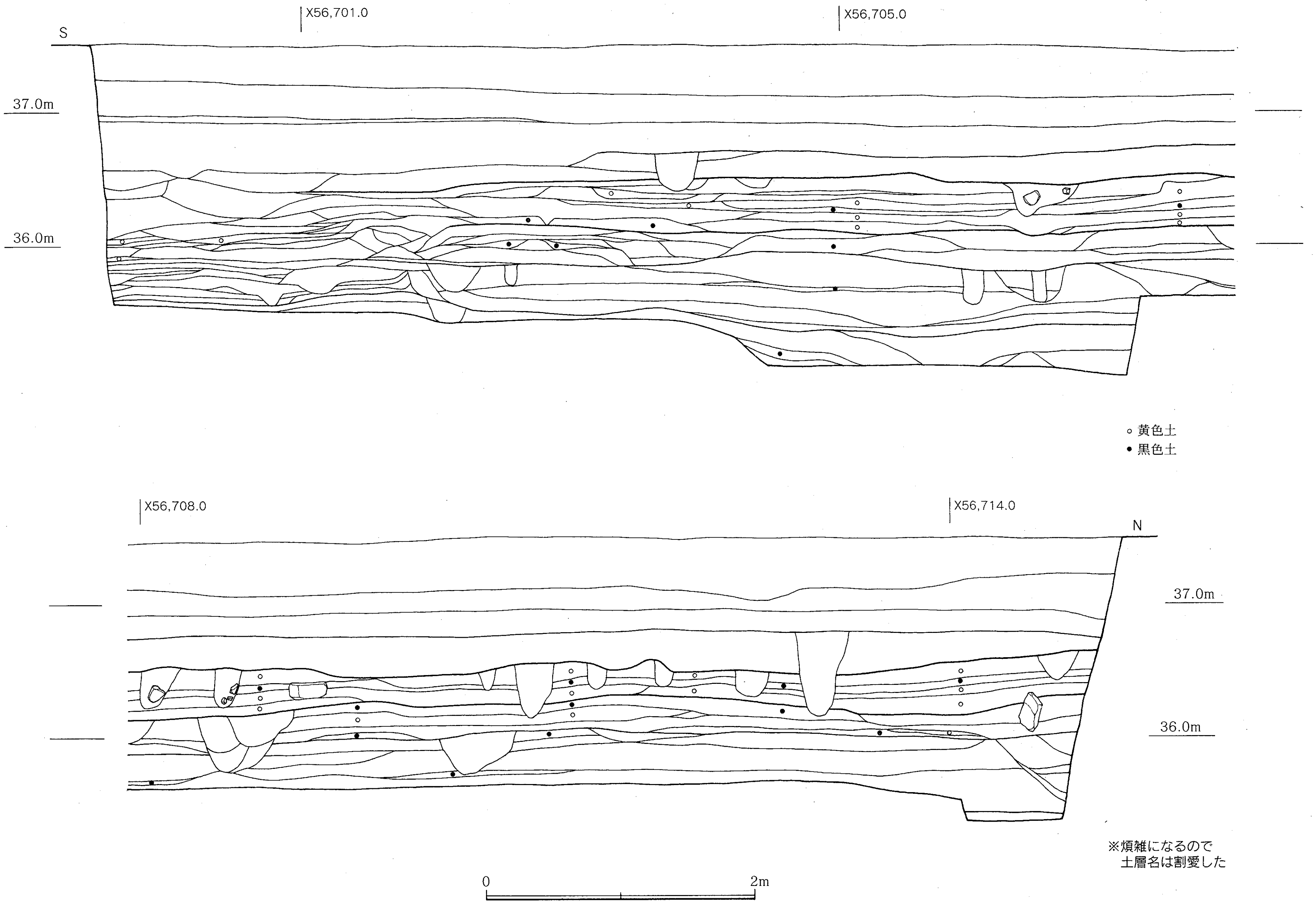



Fig.5　第51次調査西壁土層観察図（1／40）

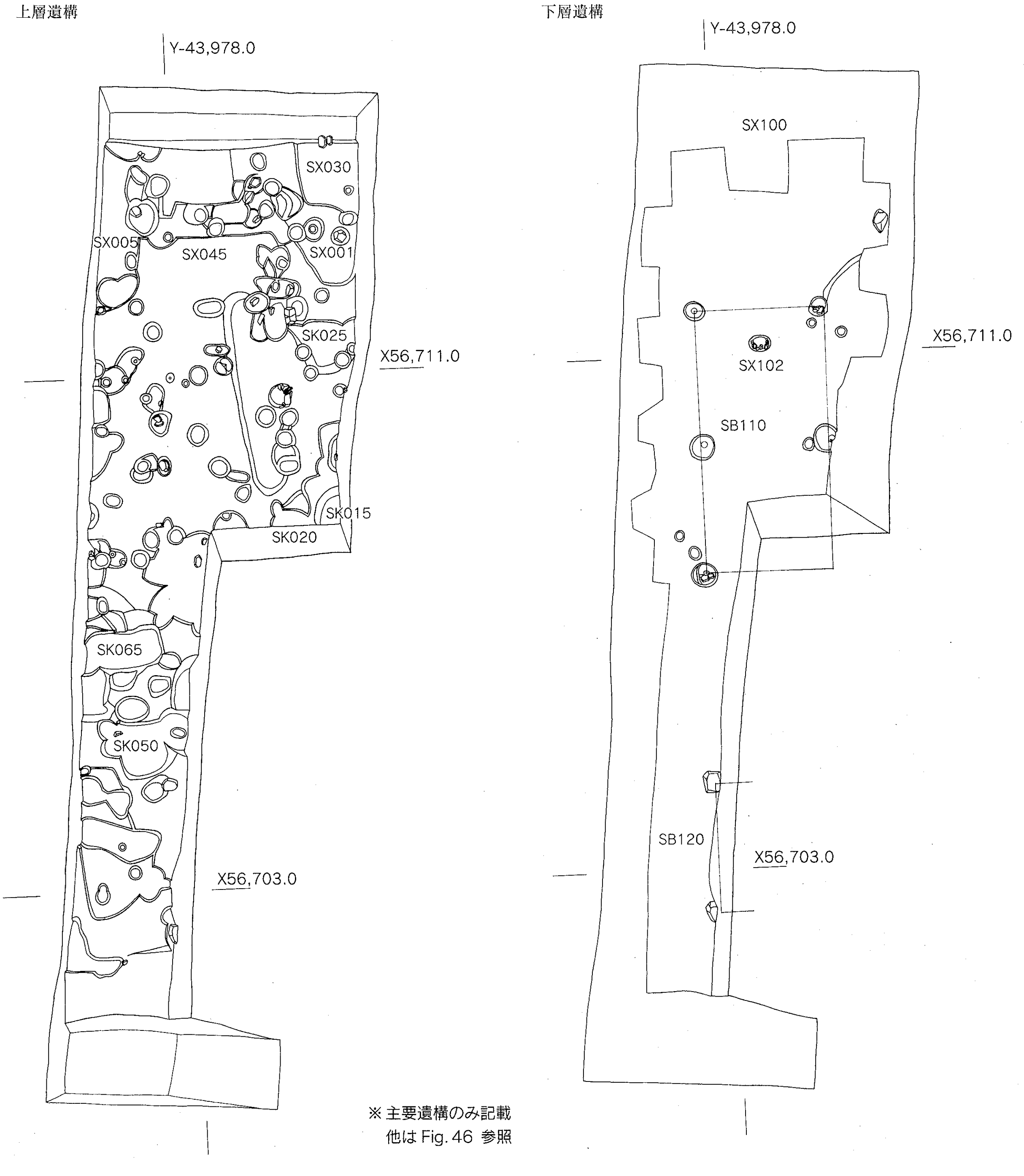



Fig.6　第51次調査遺構配置図（1／100）

**51SK020**　51SK015の西側にあって、それに切られる形で検出された不定型な浅い土抗である。現状の規模は南北0.5m以上、東西0.6m以上で、南側は調査区外にある。深さは5cmほどである。

**51SK025**　南北0.85m、東西1.1m以上の不定形な土抗で、深さは約5cmと浅い。

**51SK050**　調査区中程に位置するもので、検出段階ではプランが乱れ判然としなかったが、わずかに掘り下げた段階で略方形の土抗が確認され、これが本体と見なされた。土抗の規模は南北、東西軸ともに0.9mで、深さは約0.2mである。

**51SK065**　51SK050の北側にある土抗で南北1.3m、東西1.0mの不整形プランで検出されたが、土抗の主体をなす部分は東西方向の長円形を呈する部分であり、この部分のみでは南北（幅）0.65m

となる。深さは検出面から約0.2mを測る。

**その他の遺構**

**51SX001**　調査区東北隅で検出した浅い窪み状遺構で、南北2.2m以上、東西1.4m以上の不定形なプランを有し、深さは5～8cm程度と浅い。埋土を除去すると複数の遺構が検出された。堆積土の一部の可能性が高い。

**51SX005**　調査区西北隅で検出した浅い窪み状遺構で、南北1.5m、東西0.9m以上の不定形なプランを有している。深さは5cm前後と浅く、また北側のS-3、南側のS-4とは埋土が異なるものの掘削後は一連の形状を示しており、これらすべてで上面の堆積土の一部分と捉えられる。埋土除去後には多数の遺構が確認された。

**51SX010**　51SX005埋土を除去した段階で検出されたもので、南北1.1m、東西0.5mの不整長円形を呈する。わずかに埋土を除去すると後述する51SX011・012等が検出され、これらの上面に被っている堆積土の一部と判断された。

**51SX011**　51SX010埋土を除去した段階で検出された略円形を呈するピットで、径0.5～0.6m、深さ約0.45mを測る。

**51SX012**　51SX010埋土を除去した段階で検出された不定形なピットで、長さ0.6、幅0.3m、深さ約0.15mを測る。

**51SX021**　径0.3m、深さ約0.4mで略円形を呈するピットである。

**51SX022**　0.4×0.35m、深さ約0.15mの不定形なピットである。

**51SX029**　やや歪な円形だが径0.35mを測るピットである。深さは0.35mを測る。51SX005・010埋土を除去した段階で検出された。

**51SX030**　南北1.0m以上、東西1.1m以上で、深さは5cm前後と浅い。遺構の2方を調査区外におくが、隅丸方形のプランを呈していたとみられる。51SX001埋土除去後に検出された。

**51SX032**　径0.3m、深さ0.1mの略円形ピットで、礎盤として20cm弱の石を据える。

**51SX033**　0.5×0.4mの不整円形を呈するピットで、深さは深い部分で約0.2mを測る。51SX001埋土除去後に検出された。

**51SX035**　径0.4m前後、深さ0.25mを測る円形のピットで、東側に偏って根巻き状に10～20cm大の石を配置する。

**51SX036**　0.2×0.3mの楕円形を呈するピットで、深さは約0.3mである。51SX001埋土除去後に検出された。

**51SX037**　径0.3mを測るほぼ円形を呈するピットで、底部にピットの直径にほぼ合致する石を礎盤として据える。石上面までの深さは約0.3mである。

**51SX043**　51SK015に切られる浅い窪み状遺構で、南北0.8m以上、東西0.3m以上、深さ約5cmを測る。遺構の一部が深くなるが調査区外に延びており、詳細は不明である。

**51SX045**　東西（長さ）1.8m、南北（幅）0.5mで、深さは5cm以下と浅い溝状を呈する窪み状遺構である。埋土を除去すると複数のピットが確認された。

**51SX043**　調査区中程で検出したピット群である。

**51SX052**　径0.3m、深さ0.3mのピットである。

**51SX055**　径0.25m、深さ約0.3mのピットである。

**51SX066**　0.25×0.3m、深さ約0.1mの楕円形ピットで、底部に0.2mほどの石を据え礎盤とする。

**51SX074**　径0.2m、深さ約0.2mのピットである。

**51SX075**　0.2×0.25mのピットで、深さは約0.2mである。

**51SX076**　径約0.3mのピットだが、東半分は調査区外にある。深さは現状で約8cmである。

**51SX081**　径0.25m、深さ約0.35mのピットである。51SX045埋土除去後に検出された。

**51SX088**　調査区北端で検出された窪み状遺構で、整地の一部分の可能性がある。

**51SX089**　調査区南端で検出された不定形な窪み状遺構で、南北0.85m、東西0.85m以上で、深さは約5cm程度と浅い。

**イ）下層遺構**（Fig.6、CD-0006）

**掘立柱建物**

**51SB110**（Fig.7、CD-0007～0011）　南北2間、東西1間分を検出したが、東西方向については東・西ともにさらに延びている可能性がある。トレンチ狭小により全体像の把握は難しい。柱堀方は略円形で径0.35～0.45m、深さは遺構検出面から0.2～0.3mである。柱はその痕跡から径10cm程度の円形で、堀方dやeでは柱下部に礎盤状の石が置かれ、aでは堀方南側に寄せて根巻風に石が差し込まれている。堀方の埋土は柱を据えた後、下位に暗茶灰色土、上位に黄茶色土が観察される。ただ堀方cでは最下部に黄色土が置かれ、その上面から鉄器が出土した。意識的なものかどうかは判断し難い。柱間は東西方向が2.04m、南北方向が2.11m・2.00mで、主軸はN−0°33′−Wとほぼ真南北に近い。

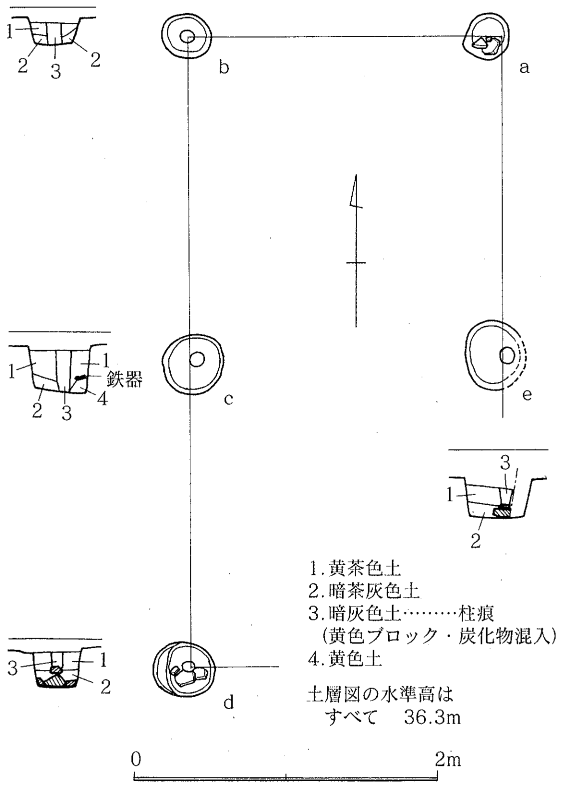



Fig.7　51SB110実測図・柱穴土層観察図（1／50）

**礎石建物**

**51SB120**　南北1間分のみを検出したが、51SB110の西側柱列と柱筋が揃うようであり、わずかな痕跡だが建物と認識した。礎石は全貌の判明する北側のもので0.25×0.4m、厚さ約0.1mで、両者とも上面は平坦で、そのレベル差は2cm程度である。礎石の心々間距離はおよそ2.05mで、先の51SB110の柱間に近い。

**その他の遺構**

**51SX102**　51SB110柱穴aとbの中間付近に存在する0.35×0.25mで楕円形を呈するピットで、深さ約0.2mを測る。遺構内の南側に偏って5～10cm程の礫があり、柱の根巻としたようでこれも柱穴と考えられるが、調査区が狭く他に関連する柱穴は検出できていない。埋土中から銅銭（Fig.31-28）が出土した。

**土器集中地点**

**51SX100**（CD-0012～0014）　下層遺構の存在とそれまでの深さや堆積状況等を確認するため、調査区北端部で上層遺構面に幅約0.8mのトレンチを設定し掘り下げをおこなった。その作業途中、暗灰茶色土層を掘り下げる段階で多数の陶磁器が顔を見せ始め、掘り下げに伴ってかなりまとまった状態で存在していることが明らかとなってきた。そこで堆積層中ではあったが遺構と同様に或る程度の一括性を認定できると判断し、これらの一群を51SX100（現場ではS-100）として取り上げた。したがって遺物取り上げに際しての便宜的な番号であったが、そのまま生かして報告した。なお51SX100

にはさらに51SX100暗灰茶色土層、51SX100黒色土II層に分けて取り上げを行った部分もあるが、いずれも同一層内で多少の識別が可能であった分を分けて捉えたにすぎず、基本的には同一層内出土と捉えても問題はない。

**51SX150**　51SX100と同様に堆積層中における出土土器の一群を指す便宜的な番号である。これは下層遺構のベースとなる暗灰茶色土層、黒色土II層、暗灰色砂層の3層とみられる堆積土を諸事情から重機で掘削したもので、大量の土器や陶磁器を採集した。位置は調査区東北に位置する調査区外の一角である。各層別に分離不能な状況であったが、上記の3層以外は含まれないと判断されるところから排土や表土とはせず、遺構と同様に仮番号を与えて遺物取り上げを実施した。報告に際しても整理、保管の都合上その番号を踏襲した。

(4) 出土遺物

(A) 土器・陶磁器

**ア）上層遺構出土土器**

**土抗出土土器**

**51SK015出土土器**（Fig.8、CD-0043～0050）

**土師器**

小皿a（1・2）　口径7.9・8.5cm、器高1.2・1.3cm、底径5.1・5.8cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**龍泉窯系青磁**

坏（3）　完存品。口径12.2cm、器高3.1cm、高台径5.4cmを測るもので、口縁部を大きく外側

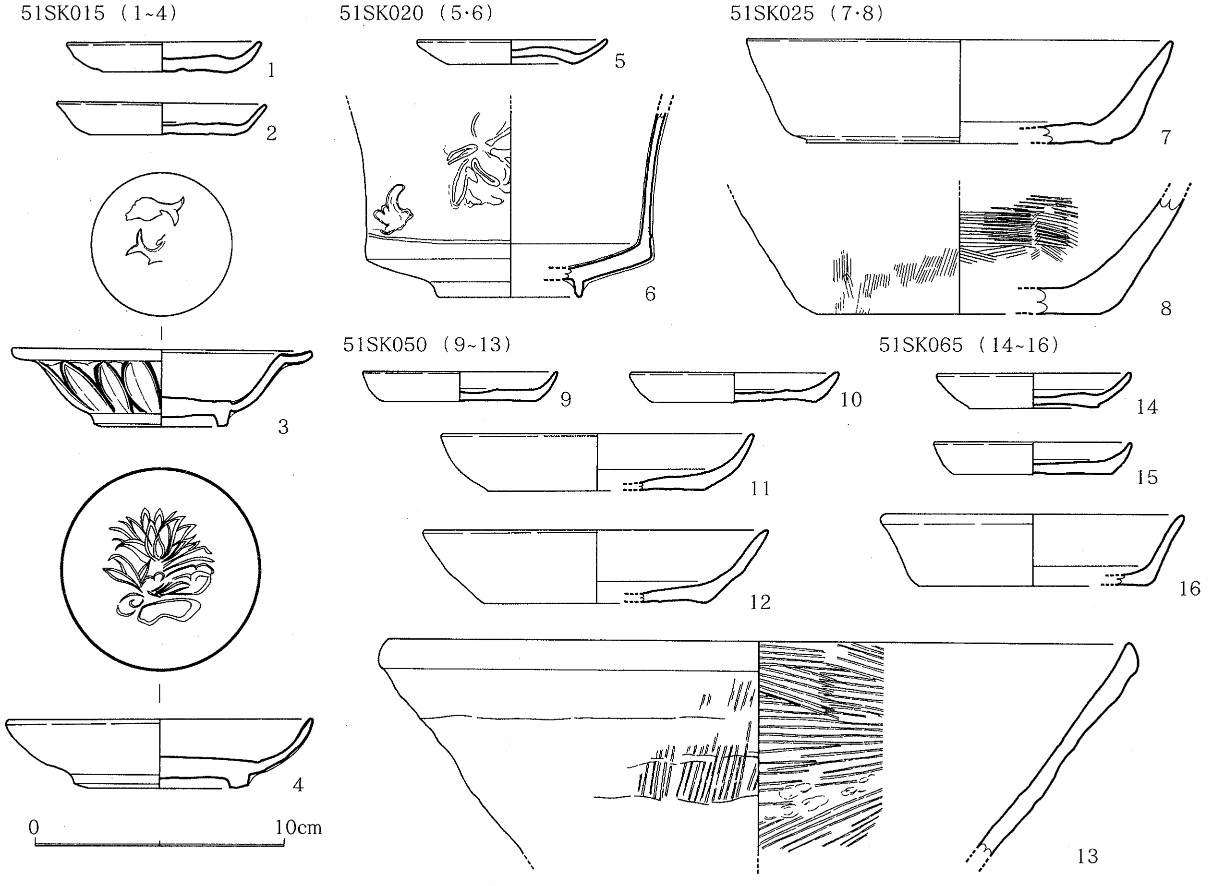



Fig.8　土抗出土土器実測図（1／3）

に折り返す。体部外面には16葉の蓮弁文（弁央の稜線は不明瞭だが輪郭線が二重になるもので、内側のものは細線で表現される。割付は正確でなく、弁の幅や向きも不揃いである）が施され、内面見込みには双魚文のスタンプ（陽刻）がみえるが不鮮明である。釉は畳付から高台内側にない他は全面に施され、透明感のあるやや黄色味を帯びた淡緑色に発色し、厚めにかかる。光沢あり。貫入なし。Ⅳ類。

皿（4）　口縁の一部を欠失するだけの完存品である。口径12.4cm、器高2.7cm、高台径7.1cmを測る。見込みに花文のスタンプ（陰刻）があるが下半部が不鮮明である。釉は高台内側と畳付の一部を除いて全面に施され、やや透明度が低いものの淡緑灰色に発色し光沢もある。貫入が内外面ともにみられるほか、外面には掛かり斑がある。胎土は白灰色で精良だが、空隙がある。Ⅳ類。

**51SK020出土土器**（Fig.8、CD-0051～0053）

**土師器**

小皿a（5）　口径7.6cm、器高1.0cm、底径5.0cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**龍泉窯系青磁**

香炉（6）　残存する体部の最大径12.8cm、高台径5.8cmを測る。体部外面に花文とみられる陽刻のスタンプがあるが、釉が厚くかかるため不鮮明になっている。釉は畳付を掻き取るほかは全面にかかり、やや青色味を帯びた淡緑色に発色し、厚めにかかるほか貫入が多数みられるためか透明度は低い。Ⅲ類。

**51SK025出土土器**（Fig.8、CD-0054・0055）

**土師器**

大坏a（7）　口径17.2cm、器高4.1cm、底径12.2cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**瓦質土器**

鉢（8）　底部径11.4cm。外面はわずかにハケ目がみえる他は指オサエにより粗い調整を加える。底部は未調整らしい。内面は横方向のハケ目で外面より粗めである。内面底部は使用によって平滑になるが、砂粒が剥落しクレーター状を呈している。

**51SK050出土土器**（Fig.8、CD-0056～0059）

**土師器**

小皿a（9・10）　口径7.8・8.4cm、器高1.2cm、底径6.0・6.7cmで、底部は糸切りされ、9には板状圧痕が残る。

坏a（11・12）　口径12.6・14.0cm、器高2.3・2.9cm、底径8.8・9.0cmで、底部は糸切りされ、11には板状圧痕が残る。

**瓦質土器**

鉢（13）　口径30.5cmに復元できる。外面は凹凸が著しいが一部に縦方向のハケ目が見え、他の部位は横方向のナデである。内面は横方向を基調にしたハケ目で、器面は砂粒の剥落によってクレーター状を呈している。

**51SK065出土土器**（Fig.8、CD-0060・0061）

**土師器**

小皿a（14・15）　口径7.8・8.0cm、器高1.4・1.3cm、底径5.2・6.4cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（16）　口径12.2cm、器高2.85cm、底径9.2cmで、底部は糸切りされる。

**その他の遺構出土土器**

**51SX001出土土器**（Fig.9、CD-0062・0063）

**土師器**

小皿a（1～3）　口径7.45～8.3cm、器高1.1～1.3cm、底径5.6～6.0cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（4・5）　口径12.0・12.2cm、器高2.5・2.8cm、底径7.2・8.7cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**陶器**

皿（6）　底径4.6cmで、内面及び外面の上位に施釉される。釉は明緑灰色に発色する透明なものだが、表面はざらつき光沢はない。胎土は淡灰色で白色粒子を含み、小気泡も目立つやや粗めのものである。器形は龍泉窯系青磁皿I-1-a類に似る。

**51SX005出土土器**（Fig.9）

**土師器**

小皿a（13）　口径7.8cm、器高1.0cm、底径5.4cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**51SX010出土土器**（Fig.9、CD-0064・0065）

**土師器**

小皿a（7～9）　口径7.6～7.8cm、器高1.0～1.1cm、底径5.8～6.0cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

小皿b（10）　口径6.4cm、器高1.6cm、底径4.6cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（11）　口径13.4cm、器高2.85cm、底径8.2cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

火舎（12）　口径12.0cmの椀型に復元したが、口縁端部は横ナデの方向に対してやや傾いて切り込まれており、別の部位の可能性もある。内面は横方向のナデ、外面はミガキとみられる。

**51SX011出土土器**（Fig.9）

**土師器**

小皿a（14）　口径8.0cm、器高1.35cm、底径5.6cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**51SX012出土土器**（Fig.9、CD-0066・0067）

**白磁**

皿（15）　口径10.8cm、器高2.2cm、底径7.8cmで、口縁端部の釉を掻き取るほかは全面に且つ厚めに施釉される。IX-1-b類。

**51SX021出土土器**（Fig.9）

**土師器**

小皿b（16）　口径6.5cm、器高2.0cm、底径3.7cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（17）　口径13.8cm、器高3.1cm、底径9.2cmで、底部は糸切りされる。

**51SX022出土土器**（Fig.9）

**土師器**

小皿a（18）　口径7.6cm、器高1.0cm、底径6.3cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

小皿b（19）　口径6.5cm、器高1.55cm、底径4.6cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（20）　口径11.8cm、器高2.8cm、底径7.2cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**51SX029出土土器**（Fig.9、CD-0068・0069）

**陶器**

瓶（21）　胴部の破片で、外面には波状文を施す。釉は外面にのみ薄くかかり、緑灰色に発色する透明度の高いもので、細かな貫入がみられる。内面は横ナデである。瀬戸とみられる。

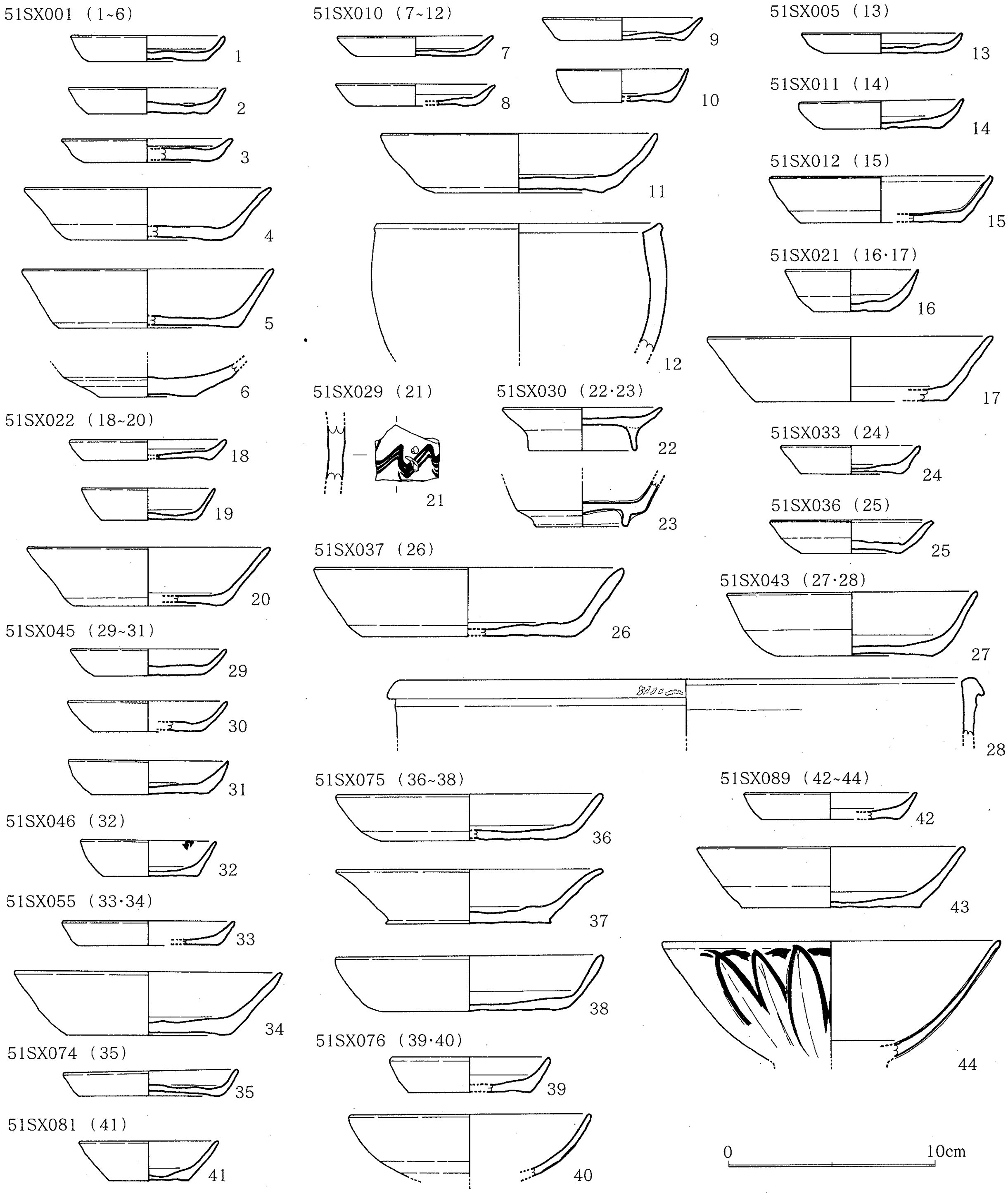



Fig.9　その他の遺構出土土器実測図（1／3）

**51SX030出土土器**（Fig.9、CD-0070・0071）

**土師器**

小皿c（22）　口径7.8cm、器高2.1cm（うち高台高1.1cm）、高台径5.2cmで、底部は糸切りされる。

**龍泉窯系青磁**

坏（23）　高台径4.4cm。内外面とも無紋で、釉は緑灰色に発色するやや透明度の低いもので、全面に厚くかかり、高台畳付付近のみ掻き取る。畳付は使用によりかなり摩耗している。III'-1類。

**51SX033出土土器**（Fig.9）

**土師器**

小皿a（24）　口径6.8cm、器高1.35cm、底径4.8cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**51SX036出土土器**（Fig.9、CD-0072・0073）

**白磁**

皿（25）　口径8.0cm、器高1.6cm、底径4.8cm。口縁端部の釉を掻き取るほかは全面に施釉されるが、外面底部の釉はハケでナデたような形跡がある。IX-1-a類。

**51SX037出土土器**（Fig.9）

**土師器**

坏a（26）　口径15.0cm、器高3.3cm、底径10.3cmで、底部は糸切りされる。板状圧痕は確認できない。

**51SX043出土土器**（Fig.9、CD-0074・0075）

**土師器**

坏a（27）　口径12.2cm、器高3.05cm、底径7.6cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**陶器**

盤（28）　口径29.0cmに復元できる。釉は内面の上位以下にみられ、薄い緑灰色に発色し鈍い光沢を放つ。口縁部付近は釉をふき取ったようで、濁灰白色を呈している。外面は露胎で横ナデで仕上げられるがわずかに釉が飛散する。胎土はやや大粒の茶褐色粒や白色粒を含む粗めのもので、小気泡も目立つ。口縁端部外面寄りに目跡がある。II類。

**51SX045出土土器**（Fig.9）

**土師器**

小皿a（29～31）　口径7.6～7.8cm、器高1.3～1.6cm、底径5.3～5.7cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**51SX046出土土器**（Fig.9）

**土師器**

小皿b（32）　口径6.6cm、器高1.75cm、底径4.5cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。口縁端部に油煙が付着している。

**51SX055出土土器**（Fig.9）

**土師器**

小皿a（33）　口径8.4cm、器高1.2cm、底径6.8cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（34）　口径13.0cm、器高3.05cm、底径8.0cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**51SX074出土土器**（Fig.9）

**土師器**

小皿a（35）　口径8.5cm、器高1.2cm、底径6.8cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**51SX075出土土器**（Fig.9）

**土師器**

坏a（36～38）　口径13.0cm、器高2.2～2.6cm、底径8.0～9.4cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**51SX076出土土器**（Fig.9、CD-0076・0077）

**土師器**

小皿a（39）　口径7.8cm、器高1.7cm、底径6.0cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**龍泉窯系青磁**

小椀（40）　口径11.8cm。釉は残存部全面に施され、透明感のある明緑色に発色し、光沢がある。I類。

**51SX081出土土器**（Fig.9）

**土師器**

小皿b（41）　口径6.8cm、器高1.9cm、底径3.8cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**51SX089出土土器**（Fig.9、CD-0078・0079）

**土師器**

小皿a（42）　口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.7cmで、底部は糸切りされる。

坏a（43）　口径13.0cm、器高2.95cm、底径8.7cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**龍泉窯系青磁**

椀（44）　口径16.4cm。外面には鎬蓮弁文を配し、釉は残存部の全面に厚めにかかり、明緑色を呈す。II-b類。

**イ）下層遺構出土土器**

**掘立柱建物出土土器**

**51SB110出土土器**（Fig.10、CD-0080・0081）

**土師器**

小皿a（1）　口径8.2cm、器高1.1cm、底径6.0cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。柱堀方c出土。

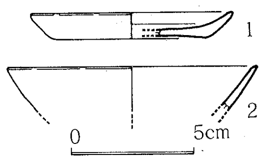


Fig.10　51SB110出土土器実測図（1／3）

**龍泉窯系青磁**

小椀（2）　口径10.2cm。残存部の全面に残る釉は暗緑灰色に発色し、透明度は低く鈍い光沢を放つ。胎土は淡灰茶色で精良、硬質である。I類。柱堀方a出土。

**土器集中地点出土土器**

**51SX100出土土器**（Fig.11・12、CD-0082～0115）

**土師器**

小皿a（1～37）　口径7.4～9.6cm、器高0.9～1.5cm、底径5.5～7.5cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が観察される（1・3・4・9・15・18・32・34・36には観察されない）。なお37は口縁端部の一箇所を外側から指先もしくは棒状の製品を用いて押圧し、端部をつまみ上げるような形状に作る。

坏a（38～60）　口径11.8～13.2cm、器高2.2～3.3cm、底径7.0～9.9cmで、底部は糸切りされ、すべての資料に板状圧痕が観察される。

鍋（61）　口径25.6cm、器高10.1cmで、底部中央を失っているがほぼ全容は把握できる。調整は口縁部周辺がヨコナデ、体部外面下位は平行叩きの後ナデ、内面は条痕を残す強めのナデである。胎土は砂粒を含む粗めのものである。

脚（62）　高さ3.0cmの脚部で鉢様の製品に付くものとみられる。剥離部分には径1.5cm前後、高さ0.8cmほどの突起が作り出されており、それを容器底部に押し込み、周囲を粘土で補足して製作したことが窺われる。残存部の表面はナデで仕上げられる。

**瓦質土器**

鉢（63）　口径19.3cm、器高7.5cm、底径9.1cm。口縁端部を内側から指（ちょうど親指大）によって押し出し、片口とする。調整は口縁部付近がヨコナデ、体部外面が指圧で凹凸が著しいまま残される。内面は細かなハケ目が横方向に観察される。底部外面は平坦に押圧されたのち横方向にハケ

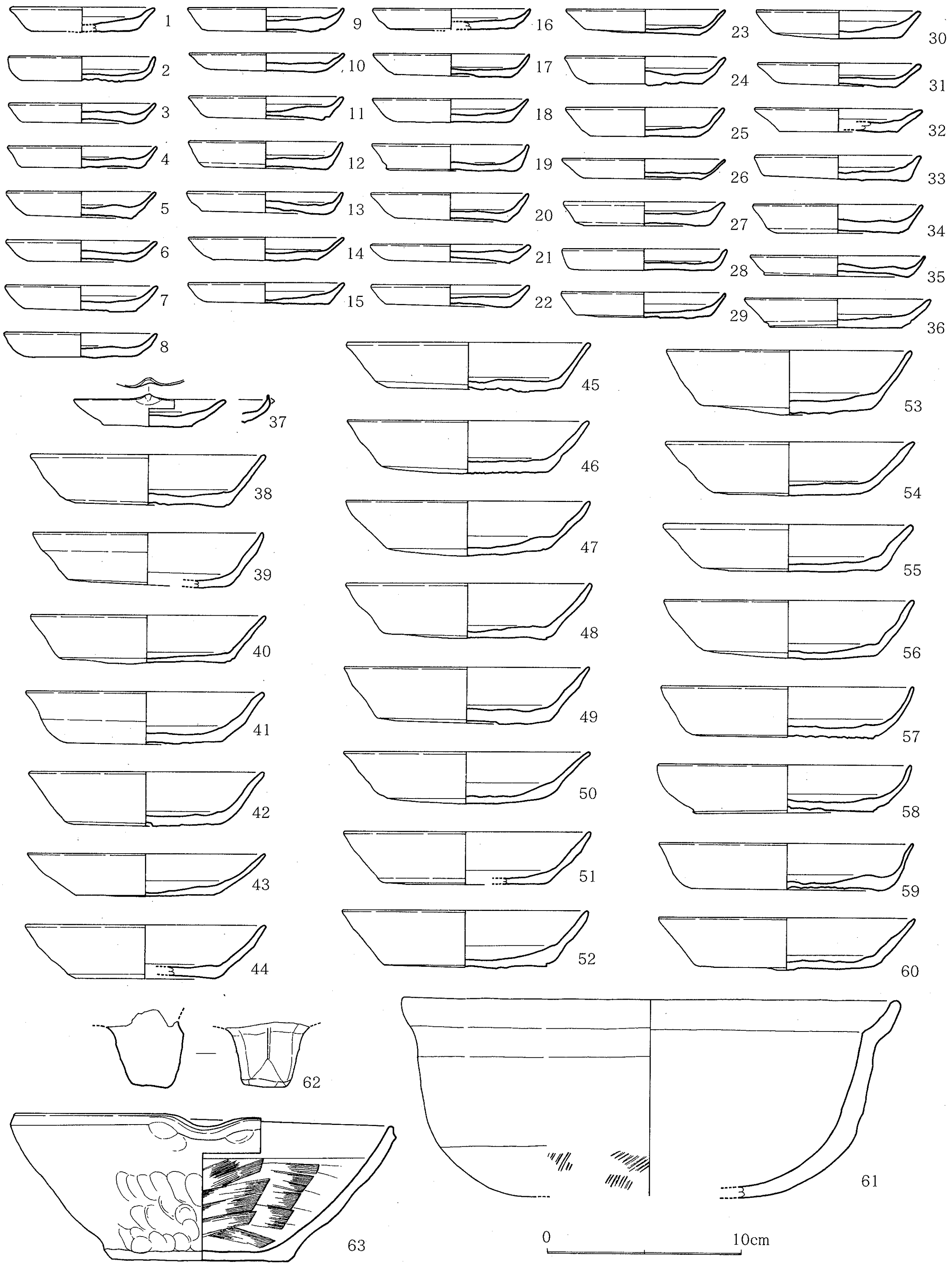



Fig.11　51SX100出土土器実測図1（1／3）

目を入れるが、底部と体部の境目付近は斜めに削られ面取りされている。胎土はやや大粒の砂粒を含む粗めのものである。

**須恵質土器**

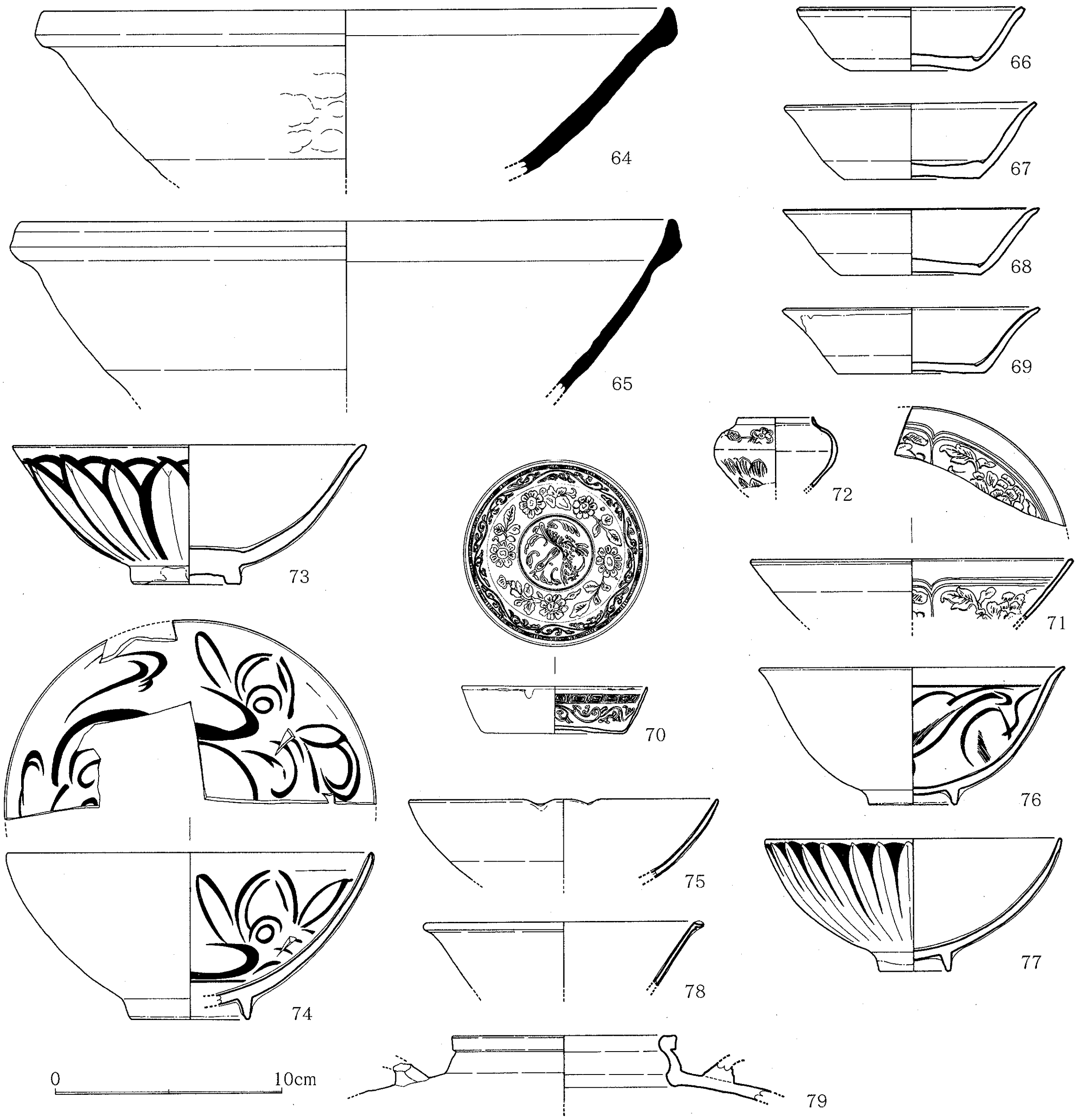



Fig.12　51SX100出土土器実測図2（1／3）

鉢（64・65）　64は口径26.8cm。口縁部周辺はヨコナデ、外面は指圧の後ヨコナデ、内面はナデで仕上げられるが使用による摩耗で砂粒が剥落し、クレーター状を呈している。還元良好で硬質。65は口径28.9cm。64とほぼ同様の調整だが、内面上位にヨコナデが観察されかなり平滑になっている。還元良好で硬質。

**白磁**

皿（66～70）　66は口径10.2cm、器高2.8cm、底径5.2cmで、口縁端部の釉を掻き取る。釉は水色味を帯びた灰白色に発色する透明釉で、全面に施釉されるが、外面底部はハケで撫でた程度に薄くかかっている。IX-1-b類。67～69は口径11.2～11.4cm、器高2.9～3.2cm、底径6.0～6.6cmで、口縁端部の釉を掻き取る。釉は緑色味を帯びた灰白色に発色する透明釉が全面にかけられるが、外面底部はハケで撫でた程度に薄くかかっている。特に67はほとんど釉が観察できない。IX-1-c類。70は口径9.9cm、器高2.5cm、底径7.8cmで、内面全体にわたり見事な陽刻文様がある。文様は見込み

中央部に径4cmの円をおき中に鳥文をあしらい、円の周囲には5単位の草花文が巡る。体部内側下半は左から右に流れる偏行唐草文で7単位（14反転）に割り付けられる。その上位には28個の雷文が巡り、その上下のラインはつながって圏線となる。釉は口縁端部を掻き取るほかは全面に施され、見込みの外周でやや厚めだが他は均質にかけられる。釉は淡い空色味を帯びた透明なものだが、素地が透け暗白色を呈し、光沢がある。胎土は肌理細かく精良で、白色を呈している。内面は型によりほぼ全面を成形するものとみられ、外面も丁寧なヨコナデとみられる。ただ外面底部中央の径4cmほどの範囲を若干彫りくぼめており、その部分のみ手作業の雰囲気を伝えている。なお、口縁端部で釉を掻き取った部分に黒灰色の付着物が観察され、内外面ともに存在しほぼ掻き取った範囲に収まっている。分析の結果、鉛（Pb）と錫（Sn）が検出されたことから、この合金を縁飾りとして口縁部に巻いたものと考えられる。X-b類。

分析には北野信彦氏（くらしき作陽大学）、井上美智子氏（元興寺文化財研究所）のお手を煩わせた。記して感謝いたします。

椀（71）　口径14.4cm。内面全体に型による陽刻文様がある。文様は体部上位に2条の横線を配し、それが数ヶ所で下位へと折れ曲がり界線となり、それに区画された内側に草花文をあしらうが、残存資料が小片のため単位まで復原できない。口縁端部の釉を掻き取るほかは全面に施釉され、釉は水色味を帯びた灰白色に発色する透明なもので、光沢がある。胎土は灰白色で精良なものである。X-1-b類。

小壺（72）　口径3.4cm、胴部最大径5.5cm、体部外面には陽刻文様がある。文様は上下二段にあり、上位のものは肩部全体に横に流れるような草花文を数単位配し、下半部には二段の蓮華文（受花状）を表現する。いずれも型によるもので、壺自体の形状をした型に彫り込まれていたものと思われる。内面はヨコナデである。釉はやや緑色味を帯びた灰白色に発色するもので、外面はガラス質で光沢があるが、内面はやや鈍く白色味が強い。また口縁端部から内側にかけてを意識的に掻き取っているほか、外面の下位近くにはかからない。胎土は白灰色で精良なものである。X類。

**龍泉窯系青磁**

椀（73～77）　73は口径15.7cm、器高6.1cm、高台径4.9cmで、外面に蓮弁文をあしらう。釉は淡緑灰色に発色する透明度のやや低いものだが、厚めにかかり、ガラス質で光沢がある。高台畳付以下にはかからない。II-b類。74は口径16.1cm、器高7.3cm、高台径5.2cm。内面にヘラ様工具による花文があるが、かなり大振りなもので2単位で構成されるものとみられる。釉は高台畳付端部を除いて全面に観察され、淡緑白色に発色し、ガラス質で光沢がある。かなり厚めにかけられ、貫入が全面に目立ち、文様を不鮮明にしている。III-1-B類だが、口縁部はほぼ直立するタイプである。75は口径13.8cmに復原でき、口縁端部に輪花がみられるほかは内外面ともに無文である。釉は残存部の全面に施され、淡緑灰白色のやさしい色に発色する透明なもので、かなり厚めに掛けられるが貫入は認められない。胎土は灰白色の精良なものである。III-1-A-b類。76は口径13.6cm、器高6.0cm、高台径4.0cmで、内面全体にヘラを主体としクシ目を補助的に入れる文様が配される。釉は淡緑灰色に発色する透明なもので、高台畳付周辺を意識的に掻き取る他は全面にしかも厚めにかかり、ガラス質で光沢がある。III-1-b類だが、口縁部が外反するタイプである。77は口径13.2cm、器高5.85cm、底径3.2cmで、外面に細身の蓮弁文をあしらう。釉は淡緑灰色に発色し、高台畳付周辺のみ意識的に掻き取る他は、全面に厚めにかけられる。外面の口縁部付近以外は白濁化して透明度を失っており、文様もきわめて不鮮明である。胎土は白茶色で小さな気泡がある程度の精良なもので、高台畳付の露胎部分のみ赤茶色を呈している。III-2-c類。

坏（78）　口径12.4cm。口縁端部を外側へ折り曲げ、上面をわずかに盆状にくぼませる。外面の屈曲部直下にみられる帯状突起に見えるものは全面には存在しない。釉は淡緑灰色に発色する透明なもので、残存部全体で厚めにかかり特に口縁上端部で厚く、ガラス質を呈して光沢を放つ。粗い貫入が全体に認められる。III-1類。

**陶器**

四耳壺（79）　口径10.0cm。無釉で表面は橙色気味の明茶灰色で、胎土は同色で白色砂粒が目立つやや粗めのものである。残存部の表面はヨコナデで、耳部分はナデで貼り付ける。

**51SX100暗灰茶色土層出土土器**（Fig.13、CD-0116～0119）

**土師器**

小皿a（1～5）　口径8.5～8.8cm、器高1.0～1.4cm、底径5.4～7.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（6～10）　口径12.0～13.0cm、器高2.1～2.5cm、底径7.0～9.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**瓦質土器**

鉢（11）　口径27.4cm。口縁部付近はヨコナデ、外面は指圧の後粗いナデ、内面の多くはナデだが使用による風化で判別しにくい。

**陶器**

鉢（12）　口縁端部には目跡が残り、釉は観察しにくい。体部に観察される釉は暗茶黄色の不透明なもので、内面では細かな茶灰色の斑が飛散し、光沢はほとんどない。胎土は灰茶色で、白色砂粒

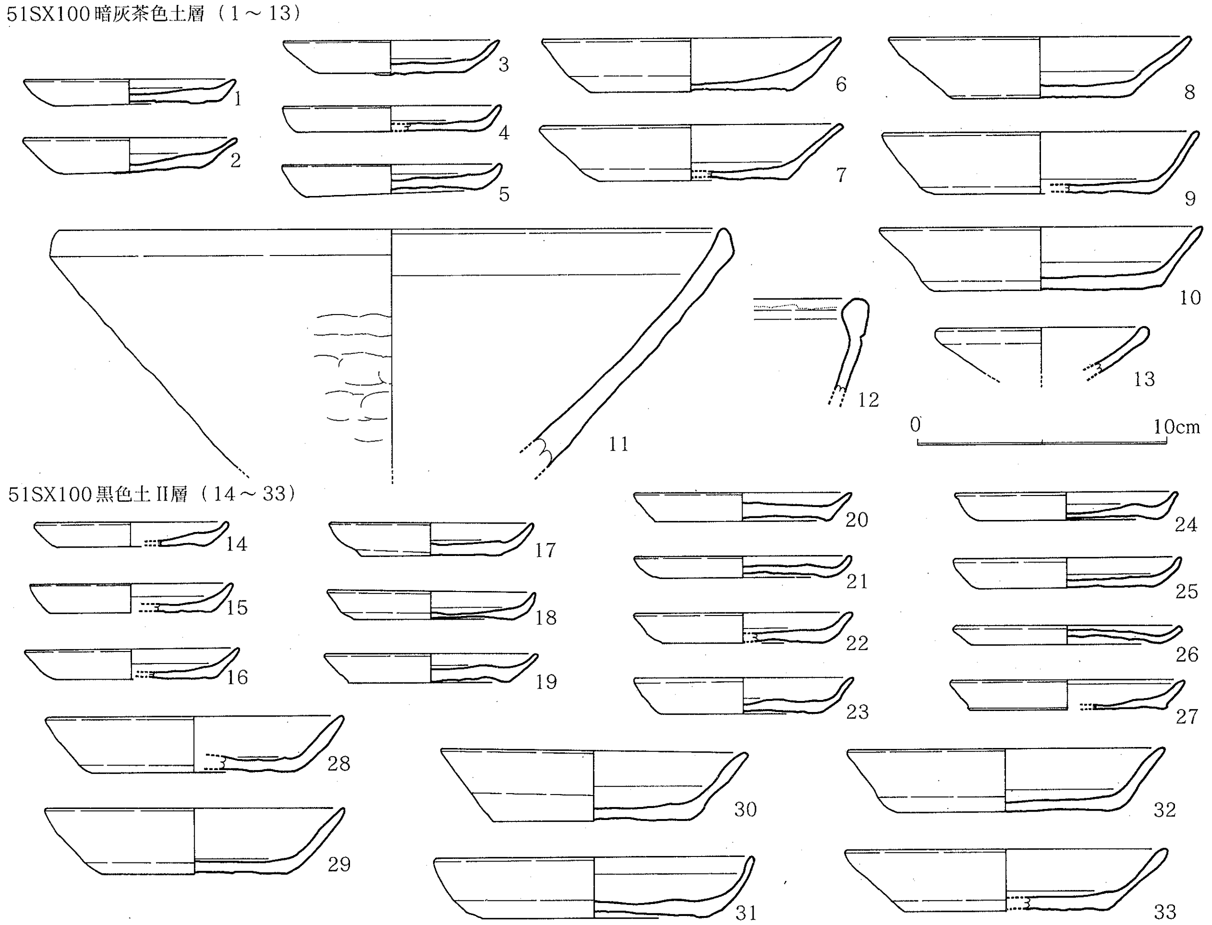



Fig.13　51SX100各層出土土器実測図（1／3）

や灰褐色小粒を若干含む程度の精良なものである。B群。

小皿（13）　口径8.6cm。口縁端部がわずかに肥大化する。釉は残存部の全面に薄くかけられ、暗茶色に発色する不透明なものである。外面では暗白色の斑が目立つ。胎土は暗茶灰色で暗紫小粒及び白色小粒を若干含んでいる。B群。

**51SX100黒色土II層出土土器**（Fig.13）

**土師器**

小皿a（14～27）　口径7.8～9.4cm、器高0.75～1.45cm、底径5.6～7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（28～33）　口径12.0～13.0cm、器高2.2～2.8cm、底径7.4～9.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。32の底部を締める板材は凹凸が少なく、糸切り痕が平滑に押しつぶされている。

**51SX150出土土器**（Fig.14・15、CD-0120～0153）

**土師器**

小皿a（1～12）　口径7.8～8.8cm、器高1.05～1.35cm、底径5.8～7.2cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（13～23）　口径11.9～13.6cm、器高2.3～3.0cm、底径7.8～9.0cmで、底部は糸切りされ、17以外には板状圧痕が残る。

**須恵質土器**

鉢（24～28）　24は復元口径23.0cm。外面から口縁部付近の内面まではヨコナデ調整され、体部内面はナデとみられ使用による摩耗が進む。玉縁状口縁の外側は暗灰色に変色している。25は復元口径24.8cm（小片のため数値やや不安）。口縁部外面は自然釉が付着し、灰茶色を呈し、鈍い光沢がある。26は口径27.2cm、器高10.25cm、底径10.2cmで、底部は糸切りされ板状圧痕が残る。調整は外面から口縁部内面まではヨコナデ、体部内面はナデで下半部は使用により劣化し、砂粒が剥落してクレーター状を呈している。焼成はやや甘めだが還元は良好である。全体は明灰色を呈するが、口縁端部外面のみ黒灰色を呈している。27は復元口径28.0cm。体部内面は粗いナデで凹凸が目立つ。口縁端部外面は自然釉が付着し、茶灰色を呈し、鈍い光沢がある。28は復元口径30.0cm。わずかだが片口部分が残存する。調整は他の資料と同様で、口縁端部外面は自然釉が付着し、暗緑灰色を呈する。5点とも東播系とみられる。

**瓦質土器**

鉢（29～31）　29は復元口径22.6cmで、口縁部付近のみヨコナデ、体部外面は粗いナデで凹凸が顕著、内面は横方向のナデである。明灰白色で焼成はやや甘く軟質である。30は口径24.8cm、31は口径25.6cmで片口部分がわずかに残存している。両者とも内面は横及び斜め方向のハケ目、口縁部付近はヨコナデで、内面下半部で摩耗が進む。外面は指圧痕と粗いナデで仕上げる。両者は口縁部の形状も近似するため同一個体の可能性が高い。

**白磁**

皿（32・33）　32は口径8.6cm、器高1.6cm、底径5.6cmで、口縁端部の釉を掻き取る他は全面に施釉される。ただ外面底部の釉はハケで撫でたような形跡をみせる。また掻き取り部分には黒褐色の付着物があり、漆を巻いたとみられる。IX-1-a類。33は口径15.2cm、器高3.1cm、底径5.8cmで、口縁端部の釉を掻き取る他は全面に施釉され、32同様外面底部の釉はハケで撫でたような形跡をみせる。IX-1-c類。

**龍泉窯系青磁**

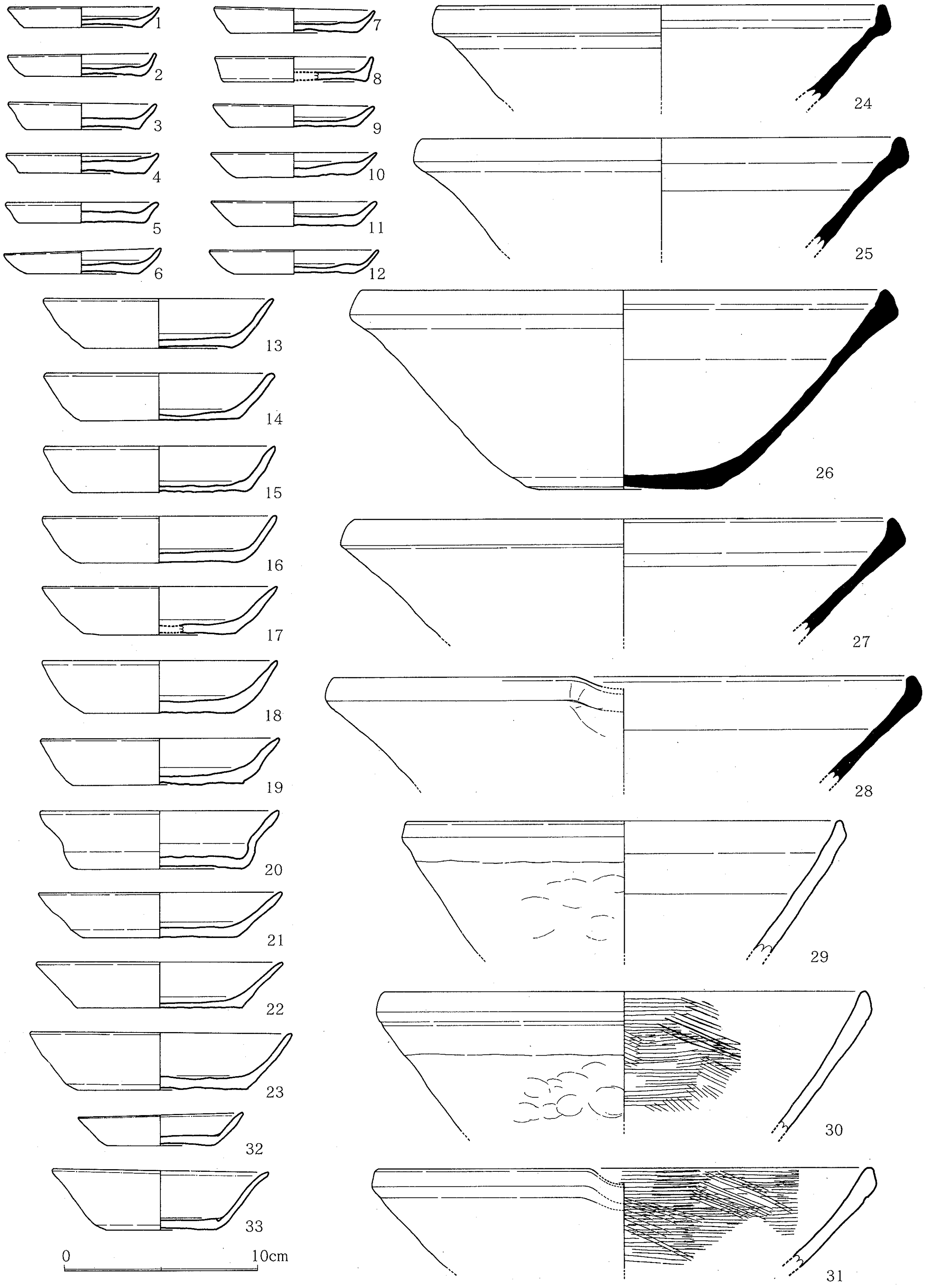



Fig.14　51SX150出土土器実測図1（1／3）

椀（34～38）　34は口径15.2cmで、外面に鎬蓮弁文を配すが釉が厚く文様は不鮮明。釉は残存部の全面にかかり、淡緑茶色に発色する。II-b類。35は口径16.4cmで、外面に鎬蓮弁文を配す。釉

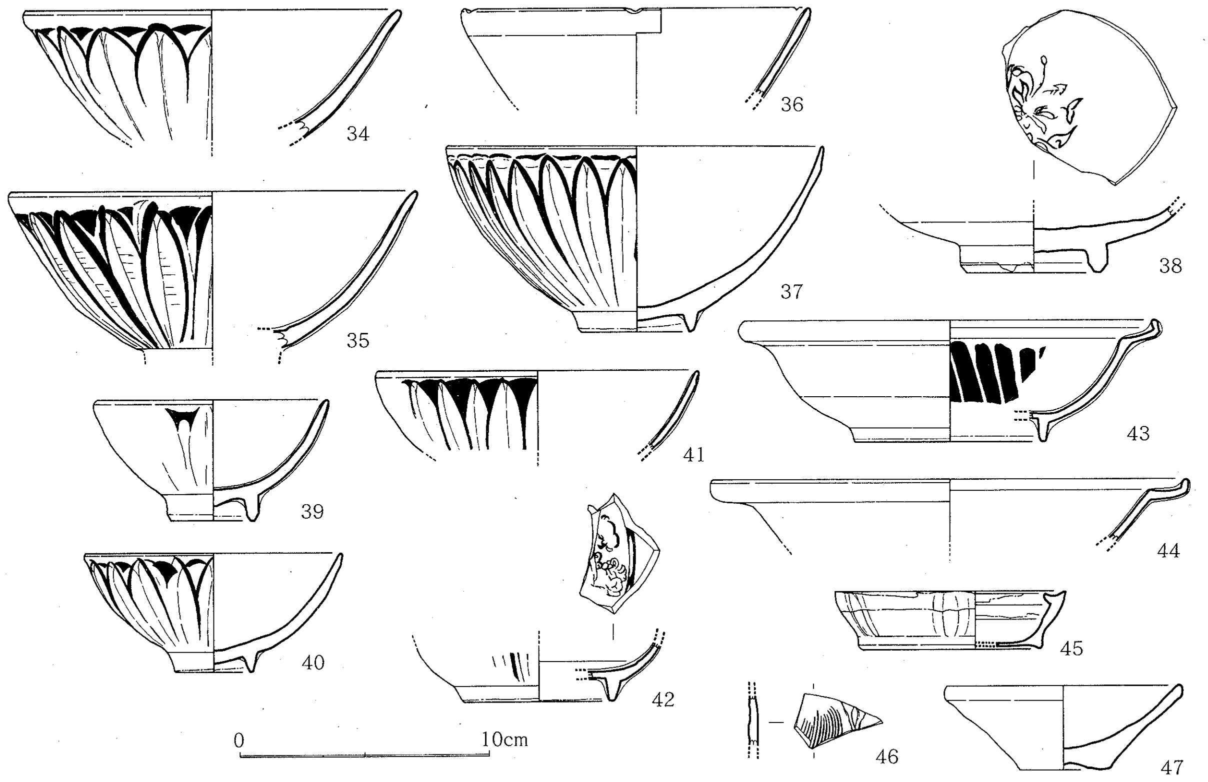



Fig.15　51SX150出土土器実測図2（1／3）

は残存部の全面に厚めにかかり、淡緑色に発色する。II-b類。36は口径14.0cmに復元できるもので、口縁端部に輪花を刻む。輪花はその残存状況から6箇所に存在したとみられる。釉は残存部の全面に厚めにかかり、暗緑色に発色し光沢がある。貫入が多数みられ、透明度が損なわれる。胎土は灰茶色でやや軟質気味であり、小気泡がみられる。III-1-A-b類。37は口径15.1cm、器高7.3cm、高台径4.4cmで、外面に細身の蓮弁文を配する。釉は淡緑色に発色するやや透明度の低いものが全面に且つ厚めにかかるが、高台畳付部分は掻き取っている。また畳付は茶褐色を呈しているものの使用による摩耗も進んでいる。III-2-c類。38は高台の外端を面取りするもので、その径5.4cmを測り、見込みに花紋のスタンプ（陰刻）を押捺する。釉は内面と外面は高台部外面までかかり、淡緑灰色に発色する透明なものだが、焼成時に砂粒状の不純物を多く混在させたようで器面は安定しない。露胎部分は暗灰色で、胎土は灰白色で精良、硬質である。IV-イ類。

小椀（39～41）　39は口径10.4cm、器高4.8cm、高台径3.4cmを測る。外面には蓮弁文を配するが、釉がかなり厚めにかかって透明感を失うため文様は不鮮明である。高台畳付の釉を掻き取るほかは全面に施され、淡緑色に発色し光沢がある。全面に貫入が観察される。III-2-c類。40は完存品で、口径10.4cm、器高4.7cm、高台径3.2cmを測る。外面には蓮弁文を配し、釉は淡緑色に発色するものを厚めにかける。高台畳付部分は釉を掻き取り、暗褐色を呈している。III-2-c類。41は口径13.0cmと他よりやや大きめに復元できるため椀とするのが妥当かも知れない。外面は蓮弁文を配するが、厚めの釉で文様は不鮮明である。釉は淡緑灰色に発色し、光沢がある。III-2-c類。

坏（42）　高台径6.0cmで、外面には蓮弁文を配したようである。見込みには花紋とみられるスタンプ（陰刻）が押捺される。いずれも釉が厚くかかり、透明度が落ちて不鮮明である。釉は明緑色に発色するもので、高台畳付のみ掻き取っており、さらに使用による摩耗が進行している。III-4-c類。

大坏（43・44）　43は復元口径17.0cm、器高4.8cm、高台径9.6cmを測る。口縁部は大きく外側

に折り曲げて開き、端部を小さくつまみ上げる。体部内面には幅広のヘラで縦方向に削り込み文様とする。釉は高台畳付部分のみ掻き取り、淡緑白色に発色するが厚めにかかるため透明度は落ちる。釉の厚い部分には貫入が目立つ。III-3-b類。44は口径19.2cmに復元できるもので、内外面とも文様はない。釉は明緑白色に発色するものが厚めにかかり、透明度は低い。内外面ともに貫入が著しい。III-3-a類。

**青白磁**

合子（45）　身の部分で、口径9.2cm、器高2.3cm、底径7.4cmを測る。口縁部には内側に返りがあって受け部とし、内面は全体はヨコナデで仕上げる。外面は底部まで型による成形とみられ、推定6箇所に劃花文をいれる。体部のごく一部をナデにより仕上げるほかは型を外した状況のままとみられる。釉は外面の上半部と内面の下半部にみられ、明青白色に発色し光沢がある。

壺類（46）　外面は陽刻のスタンプ文とその間にクシ目による施文があり、内面はヨコナデで仕上げられる。釉は内外面ともにみられ、明青白色に発色する透明なもので、外面はやや厚めにかかる。

**陶器**

小皿（47）　口径9.6cm、器高3.35cm、底径3.6cmを測る。底部はヘラ切りによって切り離され、やや抉り込まれている。釉は外面の中程以下にかかっていたようだが判然としない。内面には黒褐色の付着物がある。胎土は暗茶褐色粒や白色粒を含むやや粗めのものだが、硬質でよくしまっている。B群〔D'1ab〕。

**ウ）各層位出土土器**

**淡茶色土層出土土器**（Fig.16、CD-0154・0155）

**土師器**

小皿a（1・2）　口径7.4・8.2cm、器高1.5・1.4cm、底径5.4・6.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

火舎（3）　体部外面上位に三巴文が連続して押捺されるが、間隔は不揃いである。胎土は砂粒を多く含む粗いものである。

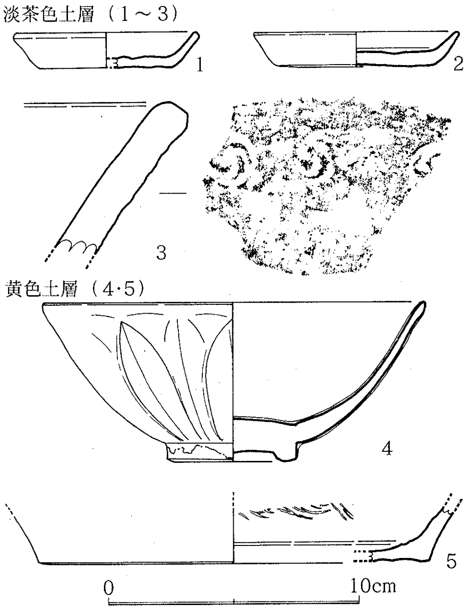



Fig.16　淡茶色土層・黄色土層出土土器実測図（1／3）

**茶褐色土層出土土器**（Fig.17、CD-0159～0166）

**土師器**

小皿a（1～22）　口径7.6～9.2cm、器高0.95～1.9cm、底径5.0～7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残るが、10・11・19・22は明確には観察できない。

小皿b（23・24）　24は口径7.0cm、器高2.2cm、底径4.5cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。23は小片で復原口径はやや小さく想定したが、24の資料に近似しており同一個体の可能性も残る。

坏a（25～30）　口径11.6～13.0cm、器高2.4～2.9cm、底径7.8～9.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**瓦質土器**

鉢（31）　内面上位に横方向のハケ目が残り、下位は使用によって摩滅が進行する。

火舎（32～34）　32は平坦な資料で一箇所に径1cm程度の穿孔がみえる。内面はナデ、外面は板状の圧痕がみえる。七輪の中敷きか。33は底径19.6cmで、団子状の脚が3箇所に付く。体部下位に高さ7cmほどの切り込みがあり、通気口の存在を示唆する。調整は外面が丁寧で平滑なナデとみられ、内面は横方向のハケ目である。内面上位に突帯状のものがあり指オサエによって貼り付けられ、部分

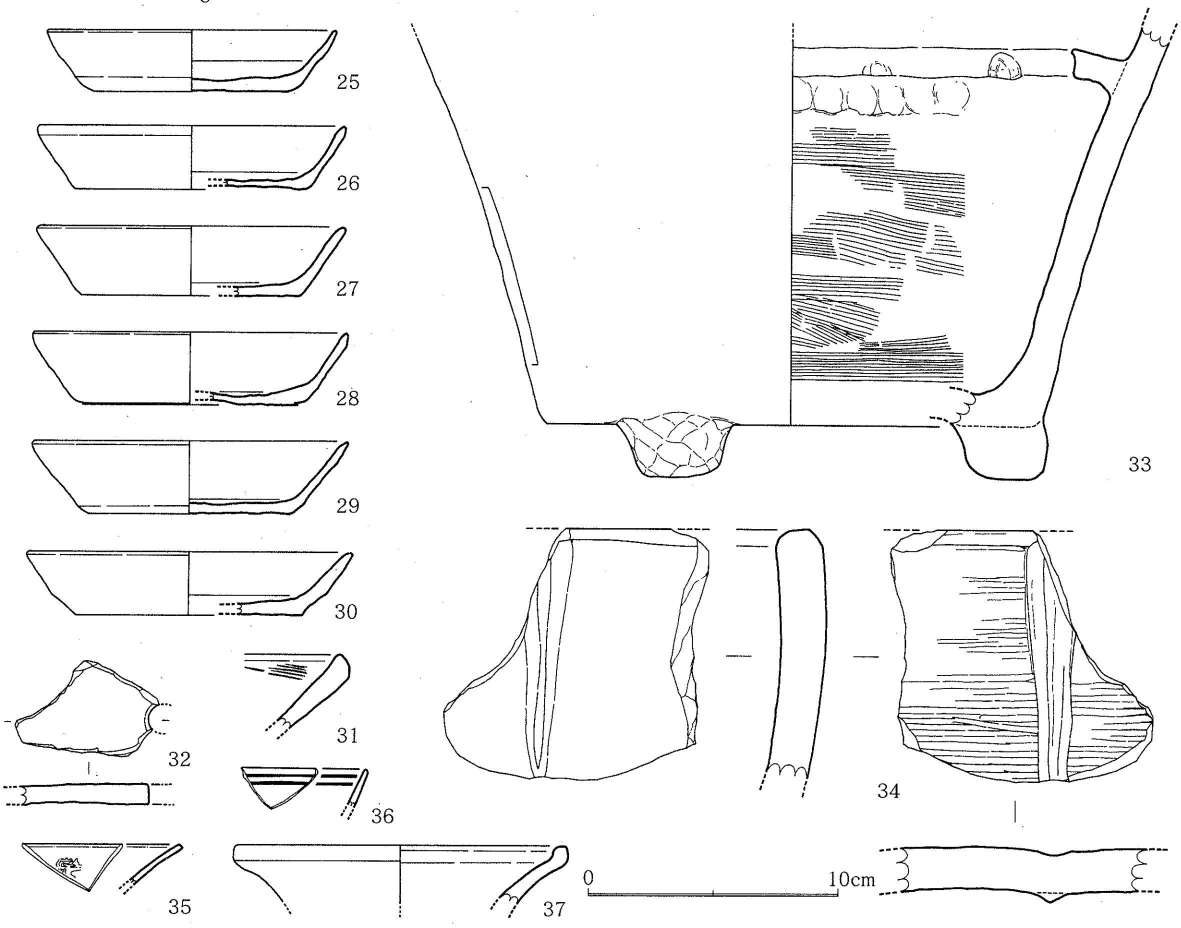



Fig.17　茶褐色土層出土土器実測図（1／3）

的に穿孔の痕跡がみられることから、中敷きもしくはそれを受ける突帯の可能性がある。七輪として報告すべき資料だろう。34は大型で平面径が花弁状を呈していたと推定される資料の口縁部片で、外面は丁寧なヘラミガキが観察され、幅2cm程の縦筋を入れる。それに対応して内面には同規模で縦方向に粘土帯を貼り付ける。内面の調整は粗めのケズリとナデである。

**青白磁**

椀（35）　口縁端部の釉を掻き取る。釉は淡灰白色に発色する透明度の低いもので、内面に陽刻のスタンプ文があるがほとんど見えず、文様の種類については不明とせざるを得ない。なお小片ながら強引に復原すれば口径17.2cmという数値は得られる。

**染付**

椀（36）　口縁部の内面に2条の横線を呉須で描く（暗青灰色）。釉は暗白灰色に発色し、光沢がある。明代のものか。

**陶器**

瓶（37）　口径13.4cmに復原されるもので、釉は淡緑灰色に発色し、貫入が目立つものだが光沢はある。本体からの剥落が著しい。口縁部内側の屈曲部は特に釉が厚くたまる。同一個体とみられる破片が4片あり、体部の資料では内面に釉はかからない。

**黄色土層出土土器**（Fig.16、CD-0156～0158）

**龍泉窯系青磁**

椀（4）　口径15.3cm、器高6.3cm、高台径5.2cm。外面は鎬蓮弁文で、高台畳付以内には施釉されない。II-b類。

**陶器**

壺（5）　底径15.6cm。内外面ともに施釉され、暗緑色に発色し一部で白濁化する部分があり、透明度は落ちているが、光沢はある。内面の残存部上位に同心円と思われる当て具の痕跡が連続して並んでいる。高麗か。

**黒色土I層出土土器**（Fig.18、CD-0167～0174）

**土師器**

小皿a（1～24）　口径6.8～9.0cm、器高0.85～1.45cm、底径5.0～7.6cm。底部は糸切りされ、7以外の資料に板状圧痕が残る。

坏a（25～50）　口径11.4～12.8cm、器高2.1～3.0cm、底径7.2～9.6cm。底部は糸切りされ、36以外に板状圧痕が残る。また48の口縁部付近には煤の付着がみられる。

**瓦質土器**

火舎（51・52）　51は底径33.2cmで逆台形状を呈する脚が付く。体部外面はヨコナデ、底部の内外面はともにナデ、体部内面は押圧ののち横方向のナデである。脚はナデにより貼り付ける。52は口縁部の破片でかなり大きな口径になるらしい。調整は残存部の範囲内でヨコナデである。

**須恵質土器**

鉢（53）　口径26.6cm。体部上位及び口縁部周辺はヨコナデ、体部外面は粗いナデで仕上げる。体部内面はナデだが、使用による摩滅で平滑化するとともに砂粒の剥落が著しくクレーター状を呈している。東播系。

**龍泉窯系青磁**

瓶（54・55）　54は口径6.0cm。ラッパ状に開く口縁部の先端は上方に強くつまみ上げる。釉は残存部の全面に認められ、淡緑灰色に発色する透明度の低いもので、かなり厚めに掛かる。表面には粗い貫入がある。III類。55は頸部の資料とみられ、直径3.8～4.2cm程度で、外面の一箇所に把手が剥離した痕跡がある。釉は淡緑灰色に発色する透明度の低いもので、内外面ともに厚めに掛けられ、表面には粗い貫入も認められる。III類。

香炉（56）　体部の一部で、破片の中程での内径が約11.4cmである。外面にはスタンプによると思われる施文があり、いずれも幅5mm内外で帯状の突帯が平行して並んでいるような文様構成である。釉は淡緑灰色に発色し、かなり厚めにかかることも手伝って透明度は低い。特に外面で厚い傾向にある。二次的な火熱を受けたためか表面に気泡が発生している部分がある。III類またはIV類。

**陶器**

耳壺（57）　口径7.7cmで、口縁部先端をわずかにつまみ上げるが欠損が著しい。釉は残存部の全面に掛かり、黄色味を帯びた茶緑色に発色するが光沢はない。胎土は暗褐色で暗白色粒子を若干含む程度の精良なものである。XIII類。

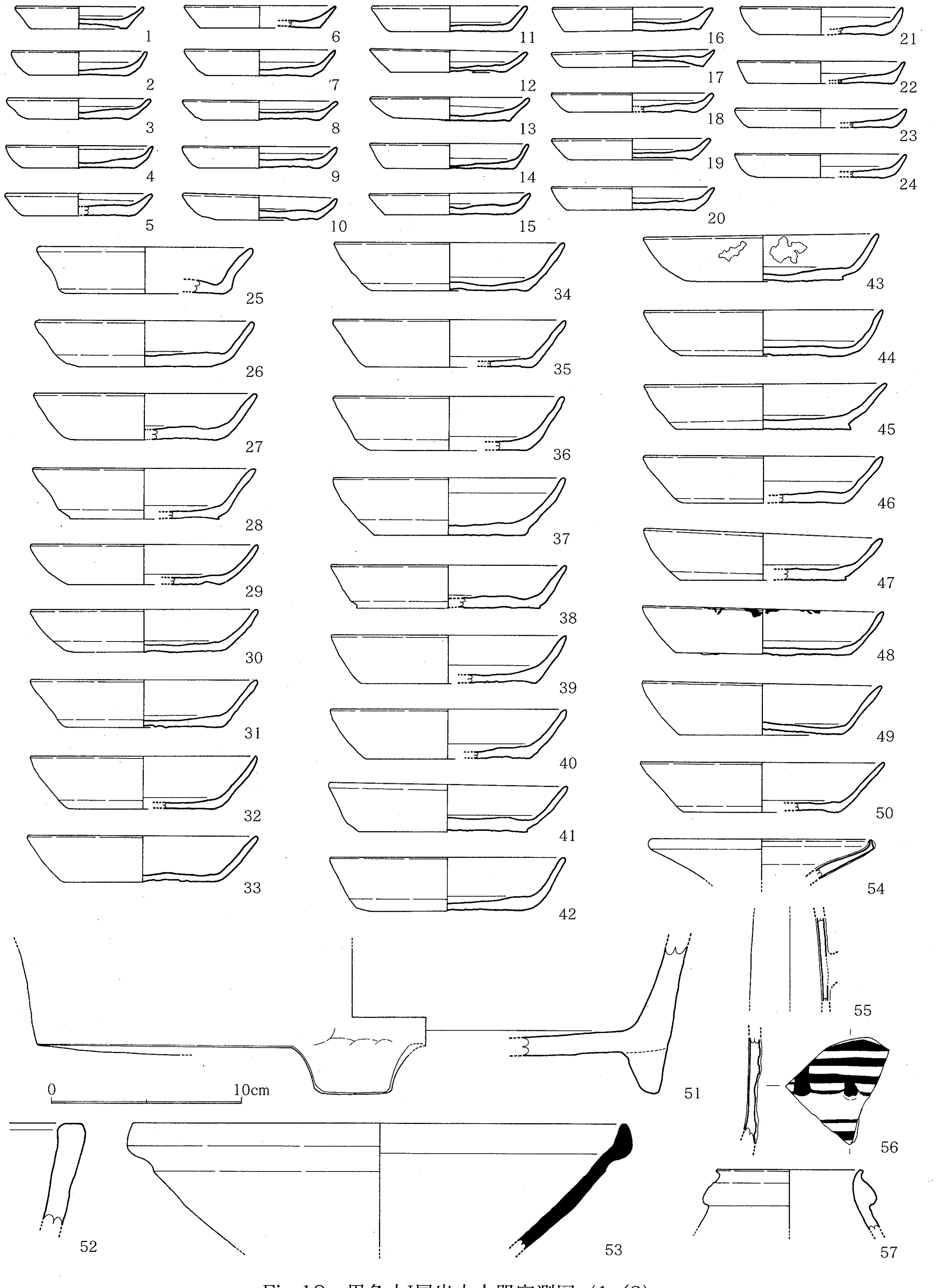



Fig.18　黒色土I層出土土器実測図（1／3）

**淡灰茶色土層出土土器**（Fig.19、CD-0175～0178）

**土師器**

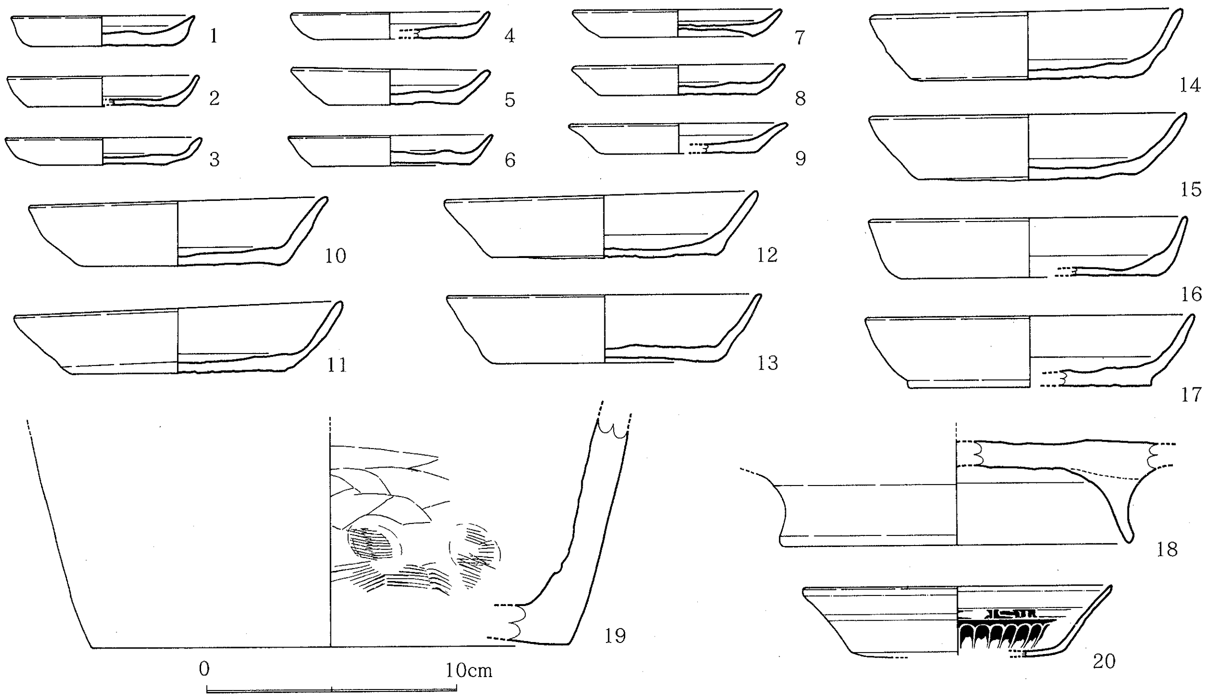



Fig.19　淡灰茶色土層出土土器実測図（1／3）

小皿a（1～9）　口径7.4～8.8cm、器高1.1～1.4cm、底径5.2～6.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（10～17）　口径12.0～13.2cm、器高2.45～2.8cm、底径8.2～10.3cm。底部は糸切りされ、13以外には板状圧痕が残る。

大皿c（18）　高台径14.2cm、高台高約3.0cmという大きなもので、皿部底部の調整は内外面ともにナデである。高台はヨコナデにより貼り付ける。

**瓦質土器**

火舎（19）　底径19.0cm。外面は平滑な面を作り出し、内面は指圧で成形した後、横方向のハケ目を施す。さらにそれを消すように強めのナデを行う。最後のナデは内面全体に観察できる。

**青白磁**

坏（20）　口径12.4cm、器高2.8cm、底径8.5cmで、底部はわずかに膨らみ、体部外面中程に上下方向からケズリ込まれて幅2mmほどの浅い突帯状をなしている部分がある。体部内面には文様があり、中程が雷文帯、下半が蓮弁文風で上半部は無文である。見込みにも文様があるようだが残存部が少なく判然としない。いずれも型によるもので、施文のある内型を用いて成形したものと考えられ、外面はヨコナデのようである。釉は淡緑白色に発色し、ガラス質で光沢があるが、口縁端部のみ意識的に掻き取っている。釉と露胎部との境目は茶褐色に変色している。胎土は暗白色で精良なものである。

**暗灰茶色土層出土土器**（Fig.20、CD-0179～0194）

**土師器**

小皿a（1～20）　口径7.8～9.0cm、器高1.05～1.75cm、底径5.5～7.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。17の口縁部に煤が付着している。

坏a（21～26）　口径11.2～13.6cm、器高2.15～2.6cm、底径6.2～9.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**瓦質土器**

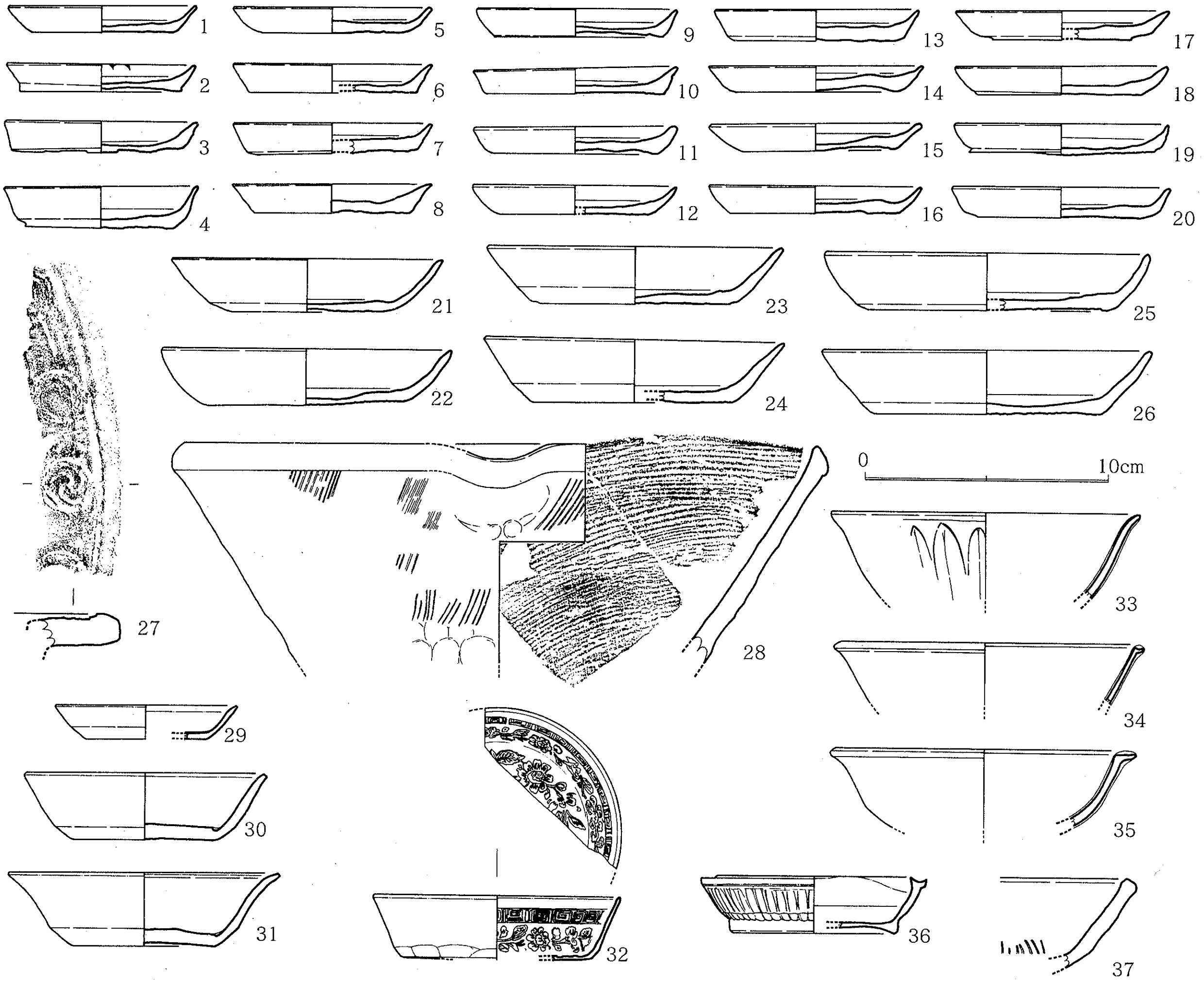



Fig.20 暗灰茶色土層出土土器実測図（1／3）

火舎（27） 外側へ大きく折り曲げられた口縁端部の資料で、ヨコナデ調整された上面の平坦面に三巴文のスタンプを連続して押捺する。スタンプの間隔は1.2～2.0cmと一定しない。

鉢（28） 口径27.0cm。体部は指圧によって成形され、その後外面は斜め方向の粗いハケ目を施し、内面は全面横方向のハケ目である。口縁部外面のみヨコナデ調整が見える。片口部分は指で強く外側に押し出されたようで、片口内側はハケ目が消えている。押し出す作業に伴って片口部外面下端に指先で押された（支持した）ような痕跡が見える。

**白磁**

皿（29～32） 29は口径7.5cm、器高1.4cm、底径4.9cm。口縁端部の釉は掻き取られる。IX-1-a類。30は口径10.0cm、器高2.75cm、底径5.8cm。口縁端部の釉は掻き取られるが、その部分に漆とみられる付着物がある。露胎部分を漆で被覆したようだが、欠損する部分にも同様の付着物がみられることから、破損部分を保護する意味も含まれていたようである。釉は暗緑灰色に発色するもので全面に掛けられ、透明度は高く光沢もある。IX-1-b類。31は口径11.2cm、器高3.0cm、底径5.8cm。口縁部を少し外反させるタイプで、明灰緑色に発色する釉は全面に掛けられるが外面底部はハケで薄く伸ばした程度である。IX-1-c類。32は口径10.2cm、器高2.6cm、底径8.0cmで、内面のほぼ全体にわたって陽刻のスタンプ文がみられる。文様は見込みに数単位の草花文を配置し、体部下位にもほぼ同様の草花文を巡らす。さらにその上位（体部中程）に雷文帯を巡らせている。成形は文様の彫り込まれた型

によるもので、外面のみヨコナデ調整されるが、底部と体部の境目はヘラ状の工具で粗く面取りされる。釉は口縁端部を掻き取る他は全面に安定的に施され、浅い青みを帯びた淡白色に発色する透明度の高いもので、光沢があり貫入は見られない。釉と露胎部との境目は明茶色に変色している。X-b類。

**龍泉窯系青磁**

椀（33）　口径12.8cm。外面にやや細身の蓮弁文をあしらう。釉は緑灰色に発色するものだが厚めにかかり透明度は低い。III-2-c類。

坏（34・35）　34は口径12.8cm。口縁端部を外側へ小さく摘み出すもので、釉は緑灰色に発色するものが厚くかかり、透明度は低めで、大きな貫入がみられる。III-1-a類。35は口径12.8cmで、口縁部を外側へ折り曲げる。釉は暗緑灰色に発色し、かなり厚くかけられる。III-2類。

**青白磁**

合子（36）　口径7.9cm、蓋受端部径9.3cm、器高2.3cm、底径6.9cm。体部外面に細かな蓮弁文を意識した凹凸文が施されるが、型によるものである。調整は体部内面上位から口縁部付近はヨコナデ、底部は内外面ともにナデである。釉は体部中程に帯状にかかるほか、内面全体に薄くみられる以外は露胎である。外面の釉は灰色味を帯びた淡青白色で随所に濁りがあり、不透明である。内面は淡白灰色に発色するが光沢はやや鈍い。

**陶器**

卸皿（37）　体部下位に粗い卸目があるほかはヨコナデである。釉は残存部の全面に認められ、緑味を帯びた淡灰白色に発色する透明なものだが、口縁端部には暗灰色の砂質分が付着しているため光沢は失われる。硬質に焼成される。瀬戸産。

**黒色土II層出土土器**（Fig.21・22、CD-0195～0217）

**土師器**

小皿a（1～35）　口径7.6～9.2cm、器高0.85～1.5cm、底径5.8～7.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が観察される（11・15・23・29・35は底部残存率狭小のため板状圧痕未確認）。

坏a（36～52）　口径11.3～13.8cm、器高2.15～2.7cm、底径7.2～9.35cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。また36・40・44の口縁端部付近には煤の付着が確認される。ただし40については黒斑部分と重なっていて判別しにくい。

**須恵質土器**

鉢（53～55）　53・54は口縁端部を玉縁状につくり、その外面は54では自然釉が付着し淡灰茶色を呈し鈍い光沢を放つ部分もある。内面は口縁部付近がヨコナデ、下位はナデで、53では使用による摩耗が進行している。55は底部径6.0cmで、糸切り痕が確認できる。内面は砂粒が激しく剥落し、クレーター状を呈している。いずれも東播系とみられる。

**瓦質土器**

火舎（56）　底径35.8cm。平底で3方向に低い脚が取り付く。体部はヨコナデで、底部内面はナデ、外面は離れ砂状に細かな砂粒が付着している。脚部はナデにより貼り付ける。胎土は白色粒子を若干含む程度の精良なものである。焼成は甘く炭素の吸着も顕著ではないため土師質に近い。

鉢（57）　口径30.7cm。口縁部外面はヨコナデ、体部外面は縦方向の細いナデだが大半が剥離し不明な個所が多い（剥離部分の傾斜面は粘土紐の貼り付け痕跡とみられる）。内面は上位が横方向のハケ目、すぐ下位から斜め方向のハケ目である。

**白磁**

皿（58・59）　58は口径10.0cm、器高2.35cm、底径4.7cmで、見込みにヘラによる文様があ

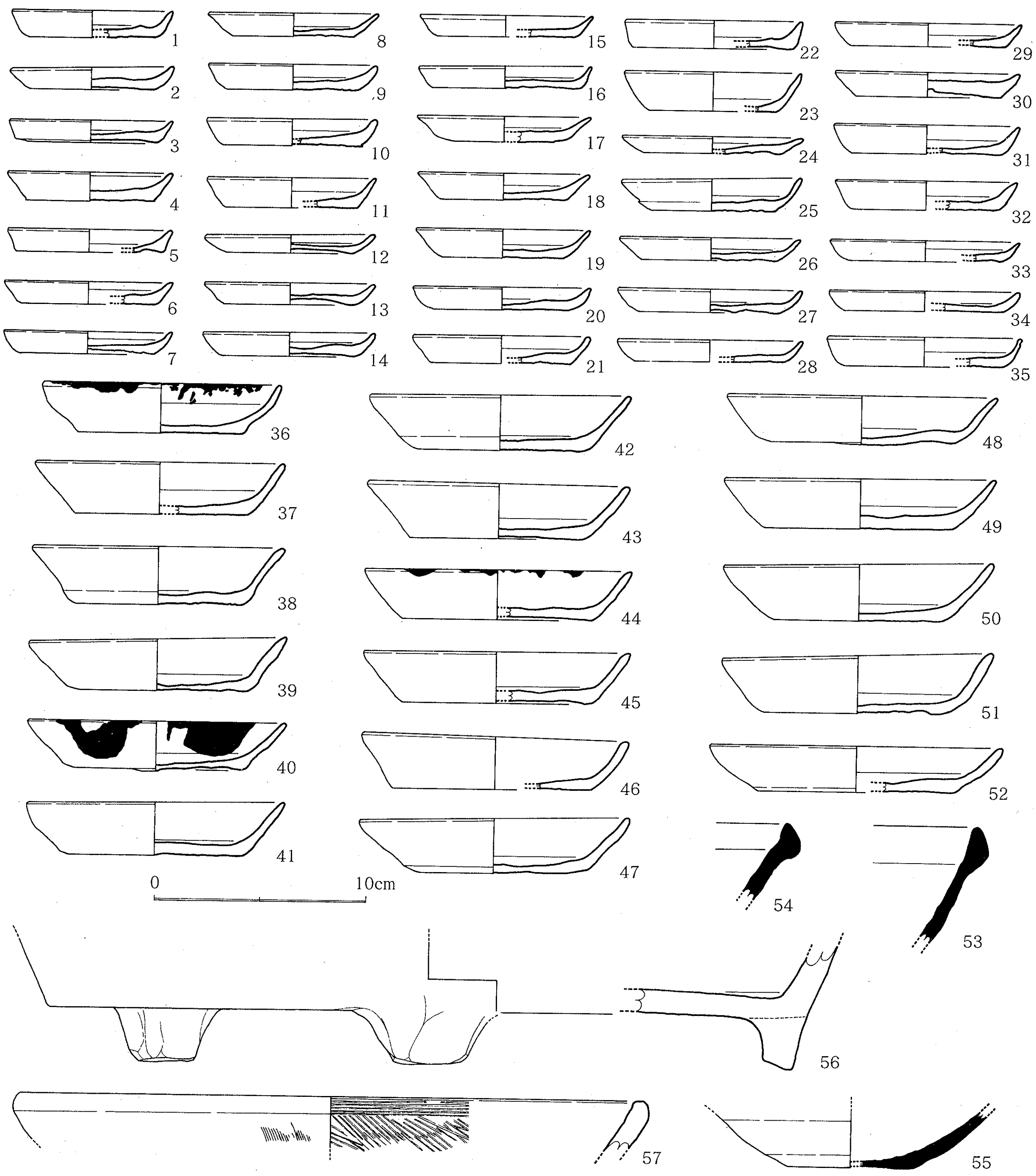



Fig.21　黒色土II層出土土器実測図1（1／3）

る。釉は緑色味を帯びた明灰白色に発色する透明なもので、外面底部中央部分に限って掻き取っている。VIII-1-b類。59は口径11.0cmで、口縁端部の釉を掻き取っており、その部分に漆を巻いている。釉は明灰緑色に発色する透明なもので、ピンホール状の窪みが体部表面で若干観察される。IX-1-c類。

**龍泉窯系青磁**

椀（60・61）　60は口径14.4cm、器高6.3cm、高台径4.4cmで、口縁端部をわずかに外反させ、体部外面にやや細身の蓮弁文をあしらう。釉は高台畳付部分を掻き取るほかは全面でしかも厚めにかけられ、淡緑灰色に発色する透明なもので厚みによりやや透明度が落ちる。胎土は明灰色を呈し肌理細かく精良で、小さな気泡が観察される程度である。III-2-c類。61は高台径4.0cmで、体部外面に

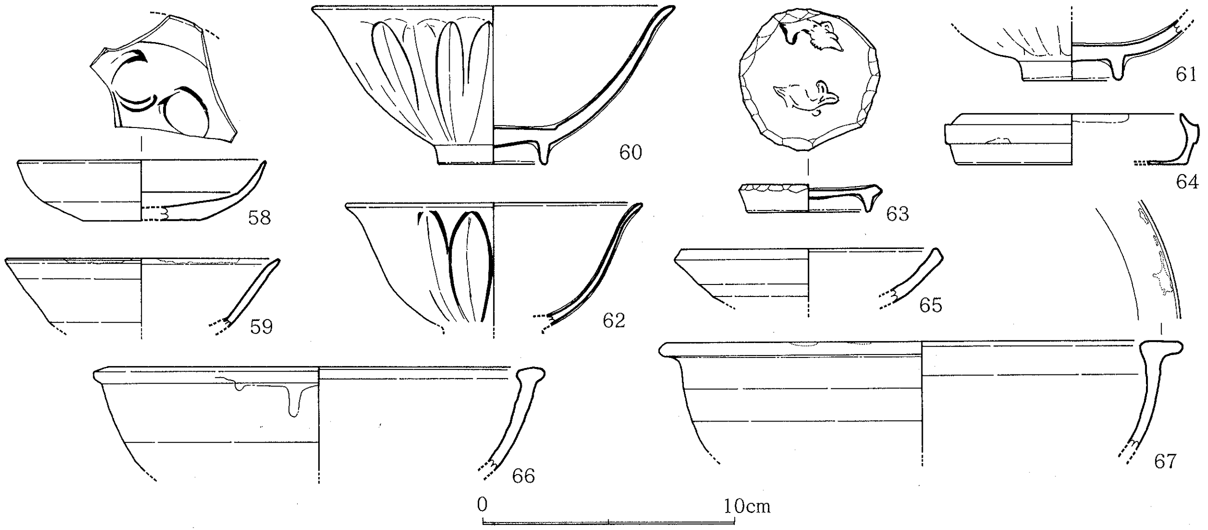



Fig.22　黒色土II層出土土器実測図2（1／3）

は幅広の蓮弁文を配する。釉は明緑灰白色に発色し厚めにかけられ、ガラス質で光沢がある。II類に近い釉である。高台畳付付近の釉は掻き取られ、また使用による摩耗も進んでいる。III-2-c類。

小椀（62）　口径11.8cmで、外面に蓮弁文をあしらう。釉は暗緑色に発色する透明なものだが、厚めにかかるため文様はやや不鮮明である。III-2-c類。

坏a（63）　高台径4.9cmで、見込みに双魚の陽刻文を貼り付ける。釉は高台畳付付近を掻き取るほかは残存部の全面にみられ、淡緑灰色に発色し厚めで、ほぼ全面に貫入が観察される。III-c類。なお当該資料は体部と底部の境目付近で打ち欠き、面を調整してメンコ状に再加工している。

**青白磁**

合子（64）　口径8.8cm、器高2.0cm、底径9.3cmで、釉は明青白色に発色する透明なもので、内面全体と外面では体部上位の突帯状を呈する部分に限られる。内面は二次的に火を受けたためか表面が劣化し気泡が目立つ。口縁部外側はヨコナデが観察できるが、体部下半は露胎ながら調整痕はみえず型による可能性がある。

**陶器**

小皿（65）　口径10.7cmで、釉は内面では暗茶褐色、外面では暗灰茶色に発色し、いずれも薄くかかり光沢はない。外面は一部白濁化している。胎土は明茶灰色で暗褐色粒を若干含んでいる。口縁端部内側にタール状の付着物が観察される。B群。

盤（66・67）　66は口径18.0cmで、口縁端部を肥厚させ、外方向にも引き出す。釉は明緑白色に発色する不透明なもので、口縁端部外面から内面にかかり、外面は露胎だが一部垂下する部分がある。光沢はない。内面体部下半がやや黄白色気味に変色しており、化粧土の影響が考えられる。外面の露胎部分は暗茶褐色で、胎土は暗灰色を呈し、暗褐色粒や白色砂粒を多めに含む粗めのものである。67は口径20.8cmで、口縁端部に目跡がある。釉は明緑白色に発色する不透明なもので、鈍い光沢があり、口縁部外面から内側にかけてかけられるが、口縁端部上面はふき取っている。外面の露胎部分は暗茶褐色で、ヨコナデが観察され、胎土は暗灰茶色、明茶色を呈し、暗褐色粒や白色砂粒を多めに含む粗めのものである。いずれもII-1-a類。

四耳壺（a／CD-0216・0217）　縦方向に耳の付くもので、体部外面には細かな横方向の叩き痕が残るが、内面は丁寧なナデである。無釉で、外面は暗茶色、内面は明茶色を呈し、胎土は白色砂粒を多量に含む粗めのもので、若干褐色粒を含んでいる。51SX100出土資料（Fig.12-79）と同一個

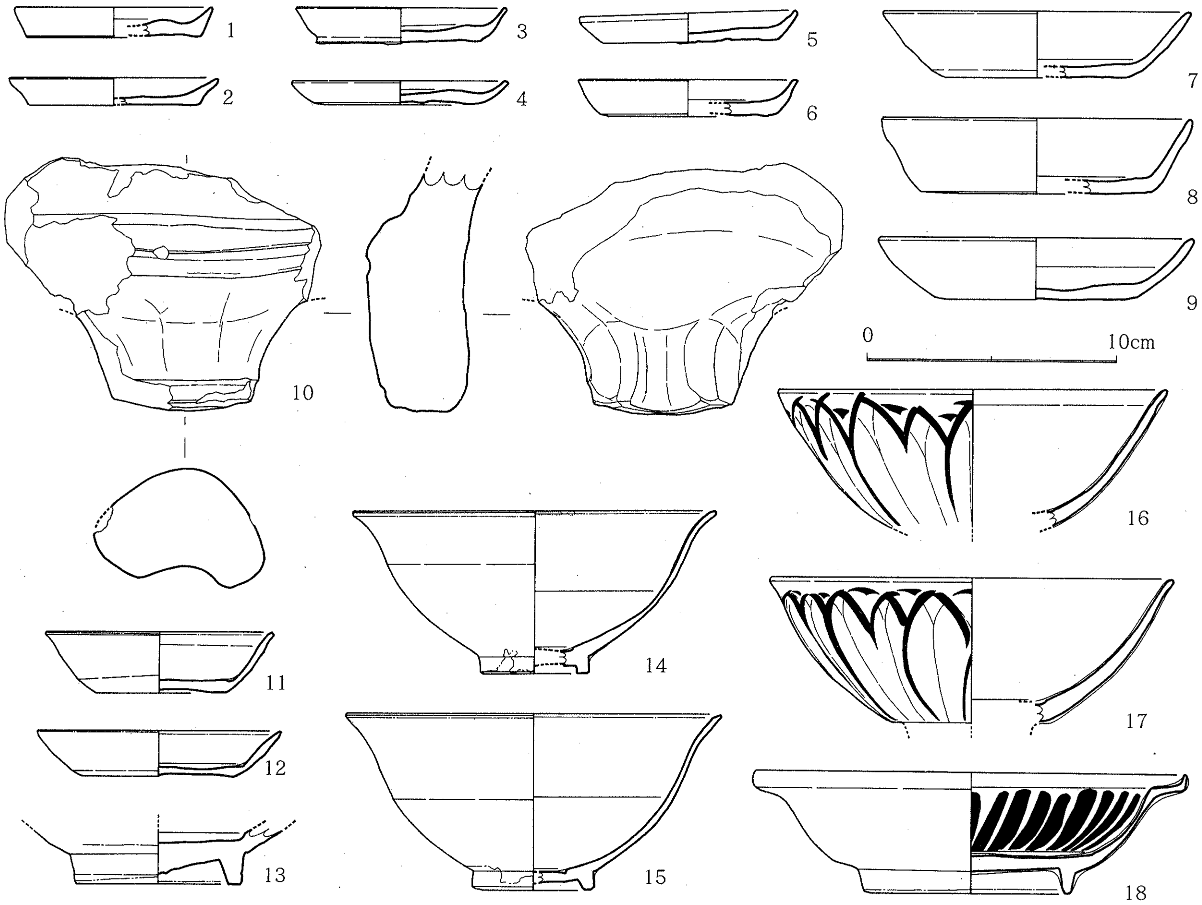



Fig.23　暗灰色砂層出土土器実測図（1／3）

体であろう。XI-2類。

**暗灰色砂層出土土器**（Fig.23、CD-0218～0234）

**土師器**

小皿a（1～6）　口径8.0～8.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が観察される。なお板状圧痕は1では不明で、5では確実には観察できないものの粘土の小粒が押し潰されており、内面底部のナデと合わせると板状圧痕付着と同様の作業行為があったものと理解できる。

坏a（7～9）　口径12.4～12.7cm、器高2.45～3.0cm、底径7.5～9.2cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が観察される。

**瓦質土器**

火舎（10）　大型の火舎の脚部の資料とみられる。脚は低い円筒状の粘土円柱を半裁したような形状を呈し、体部から少しはみ出すように接合されたようである。外面の下位と上位に各1条の横方向の沈線が存在し装飾とする。表面は黒灰色、内面は淡赤茶色で、内面はナデ調整である。胎土は粗く、砂粒を多量に含んでいる。

**白磁**

皿（11・12）　11は口径9.2ｃｍ、器高2.4cm、底径5.2cm。口縁端部の釉を掻き取るほかは全面に施釉され、淡灰白色に発色し、厚めにかかる。ただし外面底部のみハケで撫でたような痕跡がありかなり薄めで素地が見えている。口径はやや小さめだが深さがあるためIX-1-b類とした。12は口径9.8cm、器高1.8cm、底径6.0cm。口縁端部の釉を掻き取る。外面底部の釉はハケで撫でたような痕跡があり、やや薄めにかかる。深さがやや浅めだがIX-1-b類とした。

椀（13～15）　13は高台径6.6cm。見込みに段があるもので、その内側の釉を輪状に掻き取りそこに目跡状の砂粒が付着する。外面は体部下位まで施釉されるが、高台周辺にはかからず露胎となる。ただし畳付周辺はわずかに灰白色に変色しており、焼成にあたって化粧土のようなものを塗布した形跡がある。釉は淡灰緑色に発色するが透明度は低く光沢も鈍い。VIII-2または3類。14・15は口径14.6・15.1cm、器高6.45・7.0cm、高台径4.4・4.9cmを測り、体部中程に軽い段があり沈線状に見え、見込みには小さな段をつくる。釉は14が淡白灰色、15がわずかに茶色味を帯びた暗白灰色に発色し、いずれも光沢はあるが貫入も目立つ。貫入は15で顕著である。釉は高台外面以下にはかからず、口縁端部の釉も掻き取る。15は体部外面でも釉のかからない部分があり、掛かり方はやや粗めである。また14の口縁端部先端で稜をなす部分に1～3mmほどの小さな剥離痕が複数あり、目跡状の付着物とともに重ね焼きに伴う痕跡と思われる。両者ともIX-2類。

**龍泉窯系青磁**

椀（16・17）　口径15.6・16.2cmで、体部外面に鎬蓮弁文を配する。釉は残存部の全面に厚めにかかり、淡緑灰色に発色し、ガラス質で光沢がある。いずれもII-b類。

大坏（18）　口径17.4cm、器高4.8cm、高台径8.3cm。口縁部は体部上位で大きく外側へ折り曲げ、さらに端部を上方に摘み上げる。釉は深味のある淡緑色に発色するもので全体に厚めにかかり、貫入はなく、ガラス質で光沢がある。高台端部の釉は掻き取られ、露胎部は使用による摩耗がみられる。体部内面には幅5～7mm程度のヘラで縦方向に陰刻する文様が施され、釉の発色の濃淡により蓮弁文風にみえる。III-3-b類。

**茶色粘土層出土土器**（Fig.24、CD-0235～0262）

**土師器**

小皿a（1～6）　口径8.2～9.6cm、器高0.9～1.2cm、底径5.9～6.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（7～15）　口径11.8～13.0cm、器高2.1～2.8cm、底径7.0～9.7cm。底部は糸切りされ、12以外に板状圧痕が残る。

**白磁**

皿（16～20）　16は口径8.1cm、器高1.65cm、底径4.7cmで、口縁端部の釉を掻き取るほかは全面に施され、外面底部の釉も安定的に施される。釉は灰白色に発色する半透明なもので、やや厚めにかかり光沢がある。IX-1-a類。17は口径8.0cm、器高1.6cm、底径4.9cmで、口縁端部の釉を掻き取るほかは全面に施されるが、外面底部はハケで撫でつけたような斑がある。釉はやや灰白色に発色する半透明なもので、やや厚めにかかり光沢がある。IX-1-a類。18は口径9.6cm、器高2.85cm、底径4.8cmで、口縁端部の釉を掻き取り、その部分に漆が巻かれている。他の部位は全面に施され、外面底部は粗くハケで撫でたようで斑があり、露胎になる部分も見える。釉はやや濁った灰白色に発色する半透明なもので、やや厚めにかかり細かな貫入が多数観察される。IX-1-b類。19は口径10.6cm、器高2.9cm、底径6.0cmで、口縁端部の釉を掻き取る。外面底部の釉はハケで撫でたあとが顕著に見え薄くかかる。釉は灰白色に発色する半透明なものがやや厚めにかかり、貫入はなく光沢がある。IX-1-c類。20は口径11.6cm、器高2.95cm、底径6.05cmで、口縁端部の釉を掻き取り、その部分に漆が巻かれている(残存状態は今次の資料中18とともに最も良好)。釉は口縁端部を除くと全面に施されるが、外面底部ではハケで撫でたままの粗いもので、その部分はかなり薄めにかかる。灰白色に発色する半透明なもので、やや厚めにかかり、口縁部近くに貫入が多く見られる。口縁部が外反しており、IX-1-d類。

椀（21・22）　21は口径14.0cm。口縁端部の釉を掻き取る。釉は淡灰白色で半透明、光沢があ

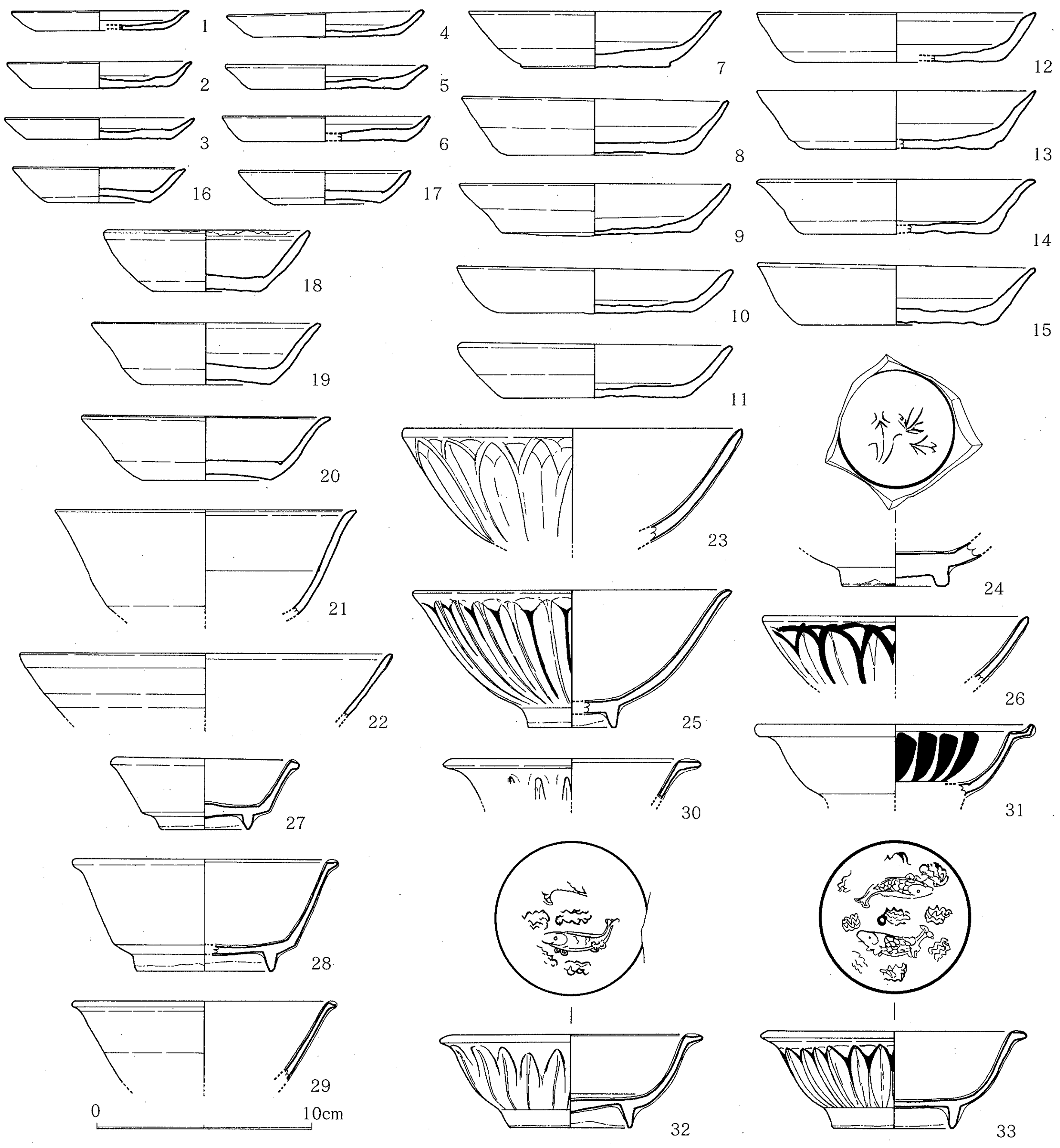



Fig.24　茶色粘土層出土土器実測図（1／3）

る。内面中程に細沈線が巡っている。IX類。22は口径17.2cmで、釉は残存部の全面に施され、淡緑灰色に発色する。きわめて透明度は高く、ガラス質で光沢がある。体部はヘラケズリで成形され、口縁端部をわずかに肥圧化し、ケズリによって軽い稜線を作り出す。端部の調整はヨコナデのようである。胎土は明灰色で黒色小粒子を若干含んでいる程度の精良なものである。白磁椀で報告したが、同安窯系青磁に属する資料かも知れない。類例を待ちたい。

**龍泉窯系青磁**

椀（23～25）　23は口径15.8cmで、外面に蓮弁文を配する。文様は彫り込みが浅めでしかも釉がかなり厚めにかかるため不鮮明である。釉は淡緑灰色に発色し、ガラス質で光沢がある。II-b類。24は高台径4.7cmで、体部外面の残存状況が悪い（図に表現するのが困難な程度）ものの蓮弁文を

配するものと判断できる。見込みにはスタンプによる陰刻の草花文が押捺される。釉は明緑灰色に発色するもので、かなり厚めにかかるため文様は不鮮明である。高台畳付から内側には施釉されない。また畳付は使用による摩耗が進んでいる。II-c類。25は口径14.8cm、器高6.3cm、高台径4.0cmで、体部外面に細身の蓮弁文をあしらう。釉は茶色味を帯びた暗緑灰色に発色するもので、透明度が低いうえに厚めにかけられるため文様が不鮮明である。高台畳付付近は釉を掻き取っている。全体に細かな貫入が観察されるが、ガラス質で光沢がある。胎土は明茶白色を呈しやや軟質なイメージを受け、肌理はやや粗めで小気泡が目立つ。III-2-c類。

小椀（26）　口径12.4cm。外面の蓮弁文は鎬が明瞭で弁幅も広い。釉は残存部全面にみられ、淡緑灰色に発色し、ガラス質で光沢がある。III-2-c類で記録したが、II-b類の可能性も残される。

小坏（27）　口径8.8cm、器高3.35cm、高台径4.0cm。口縁端部を外側へ太めに折り曲げ、底部と体部の境目は明瞭な稜をなす。釉は明緑青色に発色し、透明度は低く厚めにかかり、全体に貫入が観察される。口縁部周辺には特に厚めにかかり、口縁端部外面には多数の気泡が弾けた痕跡がある。高台畳付及びその周辺の釉は掻き取られ、明茶白色を呈する露胎となっている。III-1-a類。

坏（28～33）　28は口径12.4cm、器高5.2cm、高台径6.4cm。口縁端部を外側へ太めに折り曲げ、底部と体部の境目は明瞭な稜をなす。釉は明緑青色に発色し、透明度は低く厚めにかかり、全体に貫入が観察される。高台畳付の釉は掻き取られ、赤茶色を呈する露胎となっている。III-1-a類。29は口径12.3cmで、口縁端部を外側でわずかに折り曲げ、上面を若干くぼませる。釉は残存部の全面にかかり、明緑青色に発色する光沢あるもので、厚めにかかり全体に貫入が認められる。胎土は灰白色で精良なものである。III-1類。30は口径12.0cmで、口縁端部を外側へ大きく屈曲させ、体部外面に細身の蓮弁文をあしらう。釉は残存部の全面に厚くかかり、淡緑灰色に発色し、ガラス質で光沢がある。蓮弁の表面部分は釉が薄く、白色気味にみえる。III-2類。31は口径13.0cm。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は大きく外側で屈曲させ、さらにその端部を上方へつまみ上げる。体部内面はヘラによる幅広で縦方向の彫り込みを並べ、蓮弁文風にする。釉は残存部の全面で厚めにかかり、明緑灰色に発色し、光沢がある。III-3-b類。32は口径12.2cm、器高4.3cm、高台径5.6cmで、体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は大きく外側へ屈曲させ、上端はわずかに窪んでいる。体部外面に細身の蓮弁文をあしらい、見込みにスタンプによる双魚文を押捺する。蓮弁文は高さが不揃いなうえに不鮮明で、鎬の稜線部分は蛇行しておりやや稚拙な感じを受ける。見込みの文様は片方の魚が不鮮明で判別しにくく、周囲にある波状風の文様も全容がわからない。釉は緑灰色に発色し、かなり厚めにかかり、このことも文様を不鮮明にしている要因である。また高台畳付の釉を掻き取り、その露胎部分は明茶褐色を呈しているが使用による摩耗で素地が露出し、明灰色を呈する部分もある。III-4-c類。33は口径12.4cm、器高4.5cm、高台径5.6cm。32の資料とほぼ同様であり、見込みの文様はこちらが鮮明に観察でき、外面の蓮弁文も同様である。III-4-c類。

**黒色炭層出土土器**（Fig.25、CD-0263～0265）

**土師器**

小皿a（1～4）　口径8.0～8.9cm、器高1.0～1.25cm、底径6.5～7.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。4は板状圧痕はわずかしか観察できないが、切り離し時に発生したとみられる粘土粒が押し潰されており、平滑な板の上で作業がなされたものと理解できる。

坏a（5）　口径12.4cm、器高2.8cm、底径7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**磁器**

合子蓋（6）　口径6.0cm、器高2.1cm、天井部径6.6cmを測る。天井部外面に草花文、体部外面

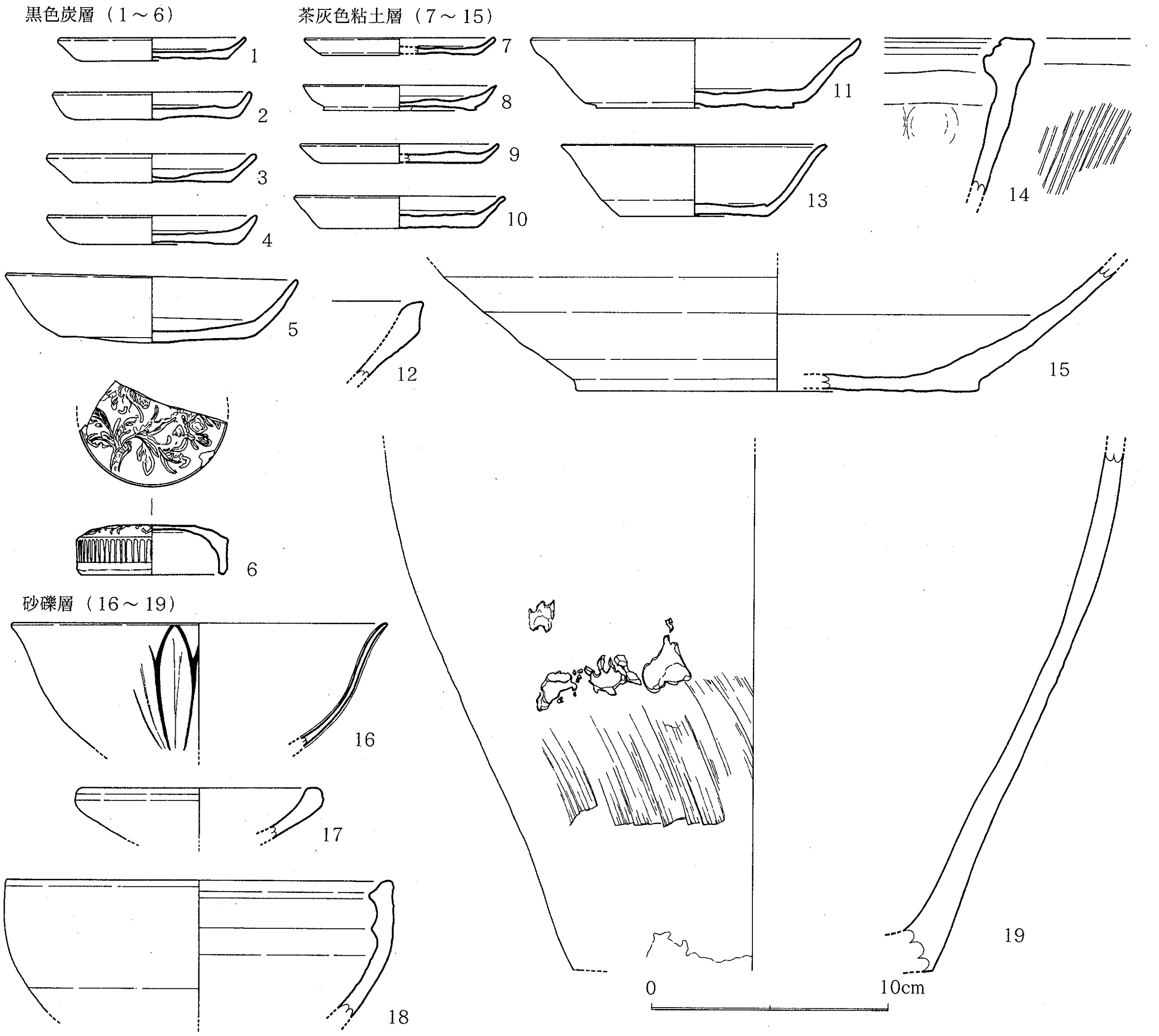



Fig.25　黒色炭層・茶灰色粘土層・砂礫層出土土器実測図（1／3）

（側面）には縦線帯が巡っている。いずれも型によるものとみられ、外型の存在が想定できる、内面はそれに伴ってヨコナデで仕上げられ、口縁端部を削って面取りする。釉は暗茶色に発色する透明度の低いもので、随所で釉溜まりができその部分は黒茶色を呈している。鈍い光沢があり、細かな貫入がみられ、外面の全面（口縁端部付近は掻き取り）と内面の天井部に施される。胎土は淡灰白色で硬質に焼成され、混入物も少なく精良である。

**茶灰色粘土層出土土器**（Fig.25、CD-0266～0271）

**土師器**

小皿a（7～10）　口径8.1～9.0cm、器高0.75～1.4cm、底径6.5～6.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（11）　口径14.0cm、器高2.95cm、底径8.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**白磁**

皿（13）　口径11.3cm、器高3.0cm、底径6.3cm。釉は口縁端部を掻き取り、外面底部では軽くハケで撫でたような形跡がある。暗白灰色に発色し、貫入があり、光沢がある。IX-1-c類。

**陶器**

鉢（14・15）　14は無釉だが外面は暗茶褐色で鈍い光沢がある。内面は淡茶灰色で口縁部付近の

み鈍い光沢が部分的に見られる。口縁部付近はヨコナデ、体部外面はクシ目状の調整が見え、内面は口縁部の突帯下に指圧痕が見え、粗いナデで仕上げる。胎土中に白色砂粒を多量に含んでいる。IX-1-c類。15は底径17.8cmで、底部外面は未調整で砂粒の圧痕が一部に見える。体部の外面はヨコナデだが上位にわずかながらハケ目調整が見える部分がある。色調は下半部が暗茶色、上半部が暗灰茶色を呈する。内面はナデが主体で、暗灰色を呈している。胎土中には砂粒を多量に含んでいる。IX-1-c類。

**砂礫層出土土器**（Fig.25、CD-0272～0277）

**龍泉窯系青磁**

椀（16）　口径16.0cm。口縁部をわずかに外反させるタイプで、外面にはやや細身の蓮弁文を配する。釉は淡緑灰色に発色し、かなり厚めにかかるため透明度は落ちる。III-2-c類。

**陶器**

小皿（17）　口径10.6cmで、釉は内面では暗茶褐色、暗黄茶色、外面では暗茶褐色に発色し、いずれも薄くかかり光沢はない。外面は一部白濁化し暗灰色を呈している。胎土は暗灰色で白色粒を若干含んでいる。B群。

鉢（18）　口径16.4cm。無釉で、外面は暗紫褐色、内面は明茶灰色を呈し、胎土中には砂粒を多く含んでいる。体部内面は使用により平滑化される。I-1-b類。暗灰茶色土層出土資料と接合したが、古い土層に帰属させて報告した。

甕（19）　底径15.2cm、残存高21.5cm。外面の底部と体部の境目付近のみ施釉されず、暗褐色の素地が見えている。釉は暗緑色に発色し、細かな貫入があり、不透明で鈍い光沢を放つ。外面下位にハケでナデ上げたような痕跡がある。また体部側面に別個体もしくは窯道具の胎土が付着している。白色、黄白色の砂粒を多量に含む粗い胎土である。F群。

**黒褐色土層出土土器**（Fig.26、CD-0278～0285）

**土師器**

小皿a（1～10）　1～8は底部を糸切りするもので、口径7.6～9.8cm、器高0.95～1.4cm、底径6.0～8.2cm。いずれも板状圧痕が観察できる。9・10は底部をヘラ切りするもので、口径9.0・9.5cm、器高0.9・1.5cm、底径7.0・7.4cm。いずれも板状圧痕が観察される。色調は1～8に比べると白茶色を呈する傾向にある。

丸底坏a（11）　口径14.8cm、器高2.8cm。底部は押し出しにより丸底を呈するが、ヘラ切り痕と板状圧痕が観察され、内面はミガキbがみられる。色調は小皿aの9・10に近い。

**同安窯系青磁**

皿（12）　口径10.6cm、器高2.7cm、底径5.0cm。見込みにヘラとクシによる文様がある。釉は淡緑灰色に発色し光沢があるが、一部黄灰色に発色し斑がある。これは胎土の色調に左右されており、基本的には透明釉で、その透明度が高いことに起因する。なお底部外面にはかからず、露胎である。I-1-b類。

**青白磁**

合子蓋（13）　かなり小さな破片で口径8.8cmとする復原値には不安が残る。返り部分の外面は釉を掻き取るが他は施され、青味を帯びた明灰白色に発色するが、白濁化し透明度は落ちる。身の可能性もある。

**陶器**

盤（14～16）　14は底部の資料とみられ、内面（見込み）には沈線による葉状の文様を施す。釉は緑釉で暗緑色に発色し、沈線部分には釉が溜まり暗緑黒色を呈している。一部銀化する部分があり、

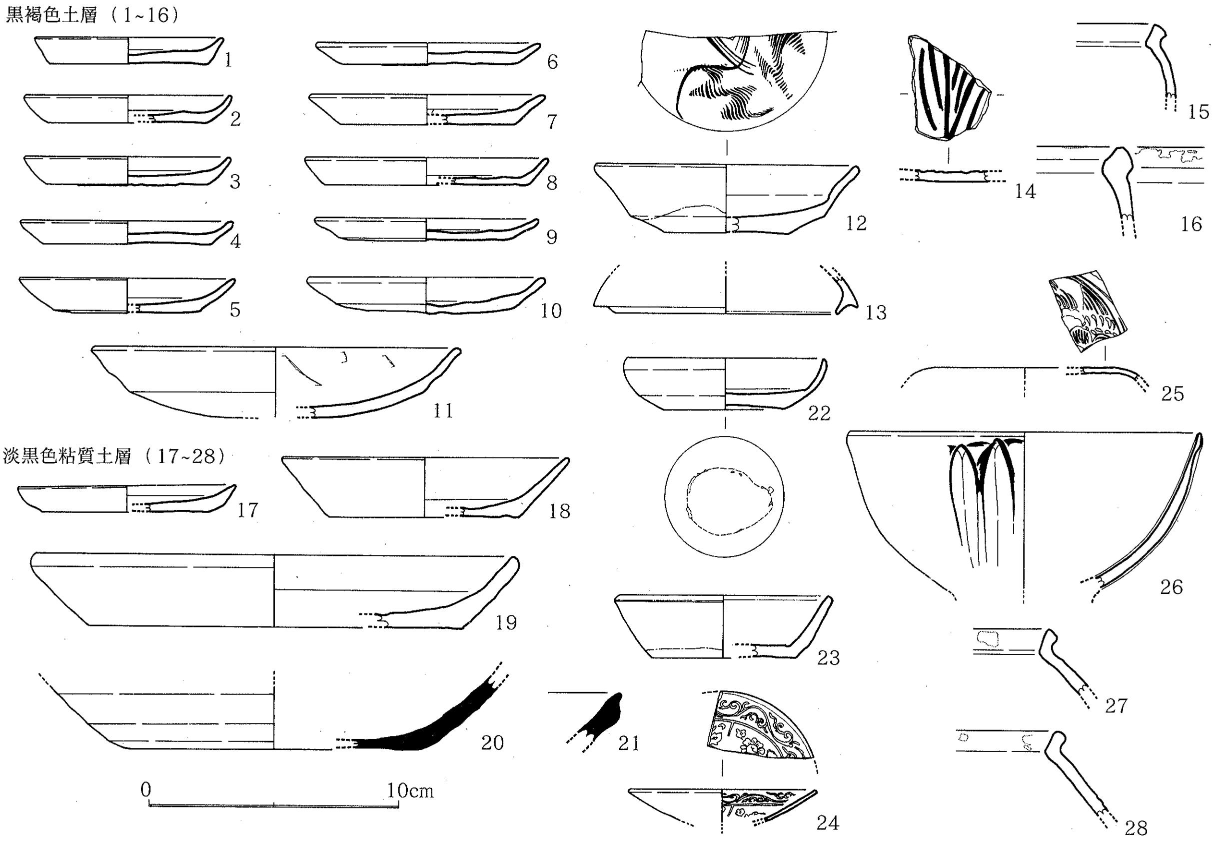



Fig.26　黒褐色土層・淡黒色粘質土層出土土器実測図（1／3）

表面には細かな貫入が観察される。胎土は表面部分が淡茶白色、内側が暗灰色で砂粒を若干含む粗めのもので、焼成はやや軟質気味である。15は黄灰色に発色する釉を内面と外面上位に施し、体部外面は飛散する釉が見えるが基本的には無釉らしく、その部分は暗褐色を呈している。胎土中には白色粒子を多く含んでいる。I-2類。小盤に含めるのが妥当かも知れない。16は残存部の全面に施釉され、明黄緑色に発色し、一部白濁化することもあって透明度は低い。胎土は粗めで、白色及び黒褐色の粒子を多量に含んでいる。口縁端部外面に目跡が観察される。I-2類。

**淡黒色粘質土層出土土器**（Fig.26、CD-0286～0298）

**土師器**

小皿a（17）　口径8.8cm、器高1.1cm、底径6.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（18）　口径11.6cm、器高2.4cm、底径7.6cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

大坏a（19）　口径19.6cm、器高2.85cm、底径15.2cm。底部は糸切りされるが、板状圧痕の有無は小片のため不明。

**須恵質土器**

鉢（20・21）　20は底径11.8cmで、外面底部には煤が付着している。内面見込みから体部にかけては使用による摩滅で平滑化し、砂粒の剥離が目立つ部分もある。21は口縁部片。同一個体の可能性もある。

**白磁**

皿（22・23）　22は口径8.15cm、器高2.05cm、底径4.8cm。湾曲する体部を有するもので、外面底部のみ釉を掻き取る。釉はわずかに緑味を帯びた明灰白色で、やや厚めに掛かり、不透明である。外面底部の中央が暗灰色に変色し、その周囲に目跡の付着及び胎土の小剥離が観察される。VIII-

1'類。23は口径8.8cm、器高2.45cm、底径5.8cm。口縁端部の釉を掻き取るほか、外面底部にも施釉されない。底部の露胎部分は明茶黄色を呈し、回転ヘラケズリされる。IX-2類。

小皿（24）　口径7.6cm。浅めの小皿で、内面にスタンプによる陽刻文様がある。文様は口縁部近くに左から右に流れる偏行唐草文をあしらい、細突線を経て見込み部分には草花文を配する。草花文は縦方向の細突線で区分されるがその単位は不明である。釉は残存部の全面に掛かり、明白色で透明度も高く、口縁端部も釉を掻き取らない。X-b類。

**青白磁**

合子蓋（25）　天井部径7.4cm程度に復原できるもので、陽刻のスタンプ文が天井部外面全体にみられる。破片のため文様の構成は不明である。外面にかかる釉は浅い緑色味を帯びた透明釉で、内面では撫でた程度にしか付着しない。

**龍泉窯系青磁**

椀（26）　口径14.2cmに復原できるが細片のため不安な要素も残る。外面に細身の蓮弁文を配し、釉は暗緑色に発色し、透明なものだがかなり厚めにかかるため透明度は落ちている。ガラス質で光沢があり、大きな貫入がみられる。III-2-c類。

**陶器**

四耳壺（27・28）　両者ともVI類に属するもので、口縁部内面に目跡が付着している。釉は27が緑白色、28では暗緑色に発色する。いずれも鈍い光沢を放ち、透明度は低い。胎土は暗茶色（27）、暗灰色で暗褐色粒子を多く含んでいる。

**暗灰色粘土層出土土器**（Fig.27、CD-0299～0306）

**土師器**

小皿a（1・2）　口径8.5・9.0cm、器高1.35・1.2cm、底径7.5・6.6cm。底部は糸切りされ、2には板状圧痕が観察される。

丸底坏a（3）　口径16.4cm。底部はヘラ切り後粗いナデがみられ、内面はミガキbである。

**須恵質土器**

鉢（4）　口径30.8cm、器高10.3cm、底径11.0cm。口縁部付近はヨコナデで、端部の外面は暗灰色に変色している。体部内面はナデで、使用により表面は平滑になっているが、砂粒が剥落して凹凸が目立ちクレーター状を呈している。外面下位には煤の付着が観察される。なお片口部分は同一地点から出土したものを合成作図したもので、内面からの押圧により成形されている。

**白磁**

椀（5）　高台径6.6cm。見込みの釉を1.4cmの幅で輪状に掻き取り、外面は残存部の範囲が露胎である。VIII類。

皿（6）　底径3.4cm。釉は透明で素地が透け、やや緑色味を帯びた明白灰色に発色するもので、外面底部のみ掻き取っている。VI-1-a類。

壺（7）やや高めの高台の径は9.2cm。残存部の範囲では高台畳付以内には施釉されない。釉はわずかに緑色味を帯びた暗白灰色で、光沢がある。II類。

**越州窯系青磁**

椀（8）　上底風の円盤状高台で径6.0cmである。外面は上位にわずかに施釉の痕跡をみるが他は無釉で暗茶褐色を呈し、内面は淡黄緑色に発色するやや透明度の低い釉を掛け、化粧土はみられない。見込みに横長の目跡が観察される。胎土中には黒褐色粒子が多量に含まれ、白色粒子も若干混じるやや粗めのものである。II類。

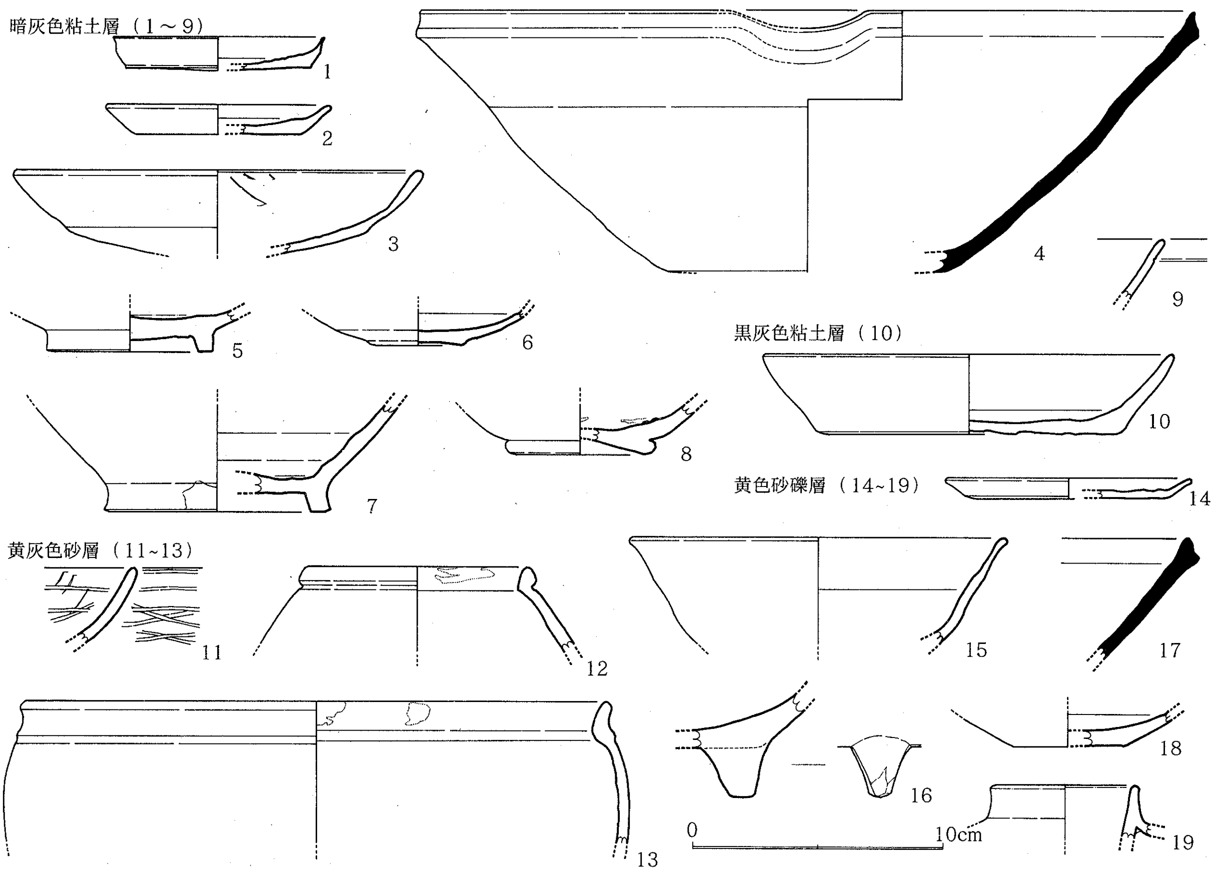



Fig.27　暗灰色粘土層・黒灰色粘土層・黄灰色砂層・黄色砂礫層出土土器実測図（1／3）

**陶器**

山茶碗（9）　残存部の全面に施釉され、透明で素地が透ける。きわめて薄く掛けられるが光沢があり、内面の一部は白濁化している。胎土はやや茶色味を帯びた灰色で、白色粒を若干混在する程度の精良なもので、硬質に焼成される。

**黒灰色粘土層出土土器**（Fig.27）

**土師器**

坏a（10）　口径16.4cm、器高3.2cm、底径12.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**黄灰色砂層出土土器**（Fig.27、CD-0307・0308）

**瓦器**

椀（11）　外面はミガキc、内面はミガキb（コテ状工具の痕跡明瞭）の後ミガキcを施す。硬質に焼成され、明灰茶色を呈している。

**陶器**

耳壷（12）　口径9.5cm。残存部の全面に掛かる釉は明緑灰色に発色し、透明度は高いが部分的に白濁化する。口縁端部内側に目跡が付着している。VI類。

鉢（13）　口径23.6cm。残存部の全面に認められる釉は薄めに掛かり、暗茶緑色に発色し光沢がある。胎土は暗茶色で暗褐色粒を多量に含んでいる。口縁端部内側に目跡が付着している。III-2類。

**黄色砂礫層出土土器**（Fig.27、CD-0309～0314）

**土師器**

小皿a（14）　口径9.9cm、器高0.8cm、底径8.3cm。底部はヘラ切りされる。

坏（15） 口径15.1cm。直立する体部を有するもので、色調は明白黄茶色を呈する。

盤（16） 底部に脚部が貼り付けられた部分の破片で、盤としているが、鉢や大坏等の容器も十分考えられるものである。脚部は平底部分の端部に寄せて貼り付けられ、全体はナデで仕上げられる。脚部高2.0cm。

**須恵質土器**

鉢（17） 口縁部外面は暗灰黒色に変色している。

**白磁**

皿（18） 底部径4.4cmで、底部の釉は掻き取られる。釉は透明感のある黄色味を帯びた明白灰色に発色し、光沢があり貫入もある。形状はVI-1-a類に似るが釉は異なる。XI'-4類または5類。

瓶（19） 口径6.0cmで、口縁端部の釉は掻き取られる。口縁部下約1cmの位置に鍔状の突帯が取り付けられていたようで、突帯の内側にも施釉されている。釉はわずかに薄い緑味を帯びた透明なもので、光沢があり、細かな貫入も多く見受けられる。

**調査区壁土採集土器**（Fig.28、CD-0315・0316）

**龍泉窯系青磁**

坏（1） 高台径4.8cm。体部外面に蓮弁文、見込みに陽刻スタンプによる双魚文を配する。文様は鱗の表現が大振りで、かなり簡略化されたものである。釉は緑灰色に発色するものが厚めにかかり、透明度はやや落ちる。高台畳付の釉はラフに掻き取られ、露胎部分は灰茶色を呈するが、釉との境目は明茶色に変色している。III-4-c類もしくはIII-5類。

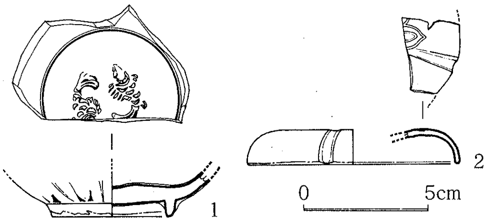



Fig.28 調査区壁土採集土器実測図（1／3）

**青白磁**

合子蓋（2） 平面が花弁状を呈するもので、縦沈線をもって区画する。天井部には蓮弁状の陽刻スタンプがあるが全容は不明である。釉が外面にのみ見られ、薄い青味を帯びた白灰色に発色するもので、透明度は高く光沢もある。内面はヨコナデで釉は掛からず、口縁端部外面は釉を掻き取って内面と連続する。

（B）土製品（Fig.29、CD-0317）

壁土（1・2） 両者とも長さ3～4cm程度の破片で、厚さは2cm前後である。1は図の右側に円筒形の窪みがあり竹（木舞）の痕跡とみられ、平坦な2面はナデによっている。2は図の3面が当初面で、図上面に当たる面には板の圧痕が若干見えたほかはナデである。両者とも4mm程度の砂粒を含む粗めのものである。両者とも黒色土II層出土。

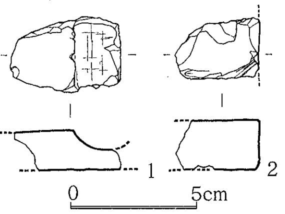



Fig.29 第51次調査出土土製品実測図（1／3）

（C）金属製品

**鉄製品**（Fig.30、CD-0318～0331）

刀子（1～7） 1は現存長22.1cmで刃先の一部と柄の端部を失う。刃部は幅2.4～2.5cmで片刃、柄は幅1.5cm程で刃はないが刃側がやや薄めに作られている。51SX100出土。2は柄部分の資料で現存長7.6cm、幅1.2～1.5cm程度で、全面が鞘とみられる木質に覆われている。破損した時期も古いようで破断面も錆が進み断面形状は不明瞭である。51SX150出土。3は現存長23.6cm、刃部幅1.9～2.5cm、柄部の幅1.5cm前後である。柄部の断面形状は縦長の逆台形状で、刃部の側が狭くなる。51SX100出土。4は刃部の破片で、現存長6.6cm、幅1.6cm前後である。図の下側が刃部と思われ、資料中程に木質が残存している。51SX088出土。5は刃部の破片で、現存長12.4cm、幅2.3cm前後であ

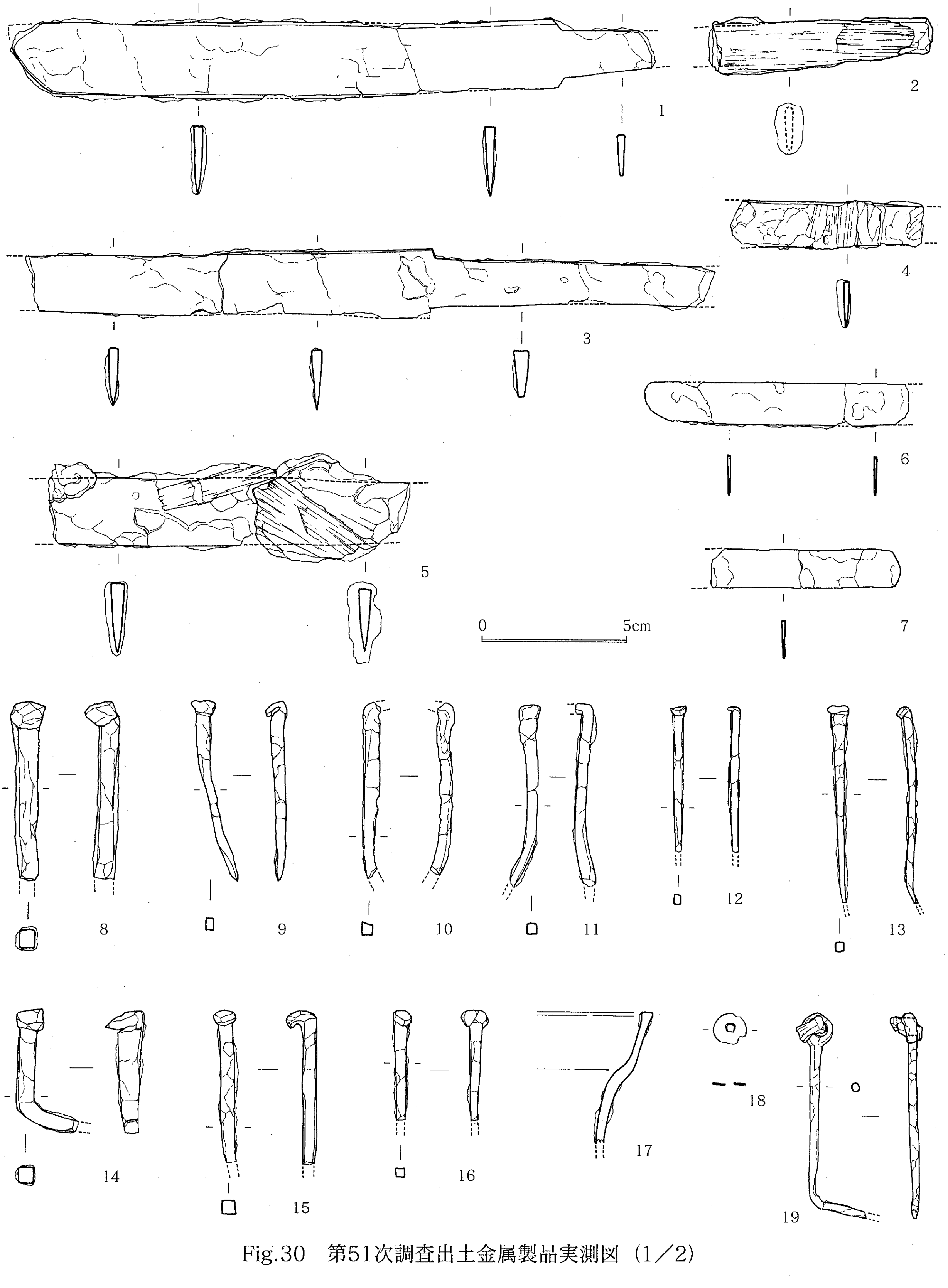



Fig.30　第51次調査出土金属製品実測図（1／2）

る。資料中程に木質が厚く残存しているが、木目は一定方向ではなく、埋没過程で鞘以外の木片も巻き込んでいる可能性がある。黒色土II層出土。6は現存長9.1cm、幅1.5cmで、かなり薄手の資料である。7も同様の資料とみられ、両者は接合しないが同一個体と考えられる。いずれも51SX100出土。

釘（8～16）　8は現存長6.1cmで先端を失う。頭部は錆により肥大化する。51SX010出土。9は長さ6.1cmで、頭部は薄く叩き伸ばして折り曲げたものである。51SX089出土。10は現存長6.0cmで、先端を失い、折り曲げた頭部の先端も欠失する。51SX089出土。11は現存長6.3cmで先端を失い、折り曲げた頭部の先端も欠失する。51SX100出土。12は現存長5.0cmで、他の資料より細身である。先端を失う。51SX100暗灰茶色土層出土。13は現存長6.7cmで先端を失う。51SX150出土。14は中程で折り曲げられており、他の資料よりかなり太めである。黒色土II層出土。15は現存長5.2cmで先端部を失う。黒色土II層出土。16は現存長3.7cmで、先端を失う。黒色土II層出土。

鍋（17）　破片自体は3.9×7.1cm程度の小片だが、断面形状から鍋の口縁部と考えた。体部から外側へわずかに屈曲した口縁部はやや外側へ開き気味に立ち上がり、端部は平坦に仕上げる。茶褐色土層出土。

**銅製品**（Fig.30・31、CD-0332～0334）

穿孔小円盤（18）　直径1.2cm、厚さ1mm以下の円盤で、中央に径3mmの穿孔がある。周囲の大半は欠損している。51SX055出土。

頭部環状金具（19）　長さ7.3cm程で先端の1.5cmほどが折れ曲がる。頭部を径1cmほどの環状に作り、中に板状の鉄製品を通し、且つ巻き付けている。芯部分の断面形状は略円形である。黒色土II層出土。

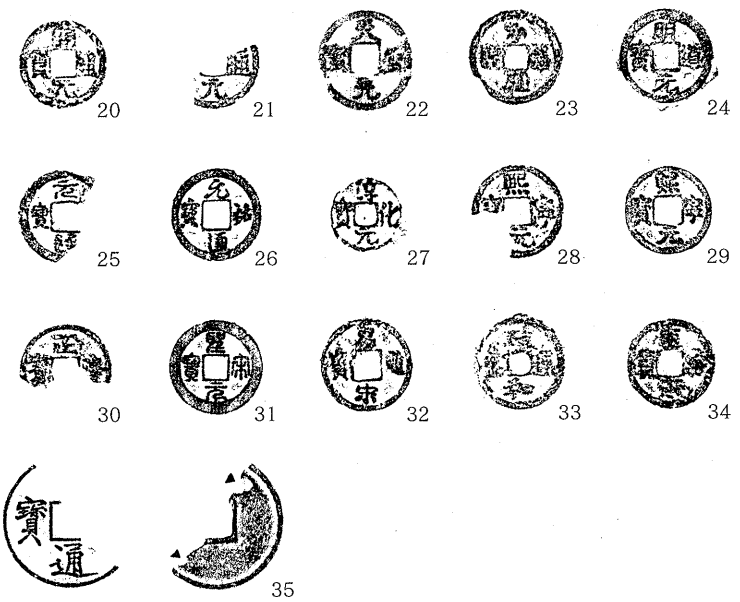


Fig.31　第51次調査出土銅銭拓影（1／2）

銭（20～35）　20は「開元通寶」で、暗灰茶色土層出土。21は「□元通□」で、字体から「開元通寶」とみられる。茶褐色土層出土。22は「天聖元寶」で茶褐色土層出土。23は「□□通寶」。錆が進行し判読できない。51SX005出土。24は「明道元寶」で、側溝掘削中に採集した。25は「元□通寶」で、字体から推定すると「元祐通寶」であろう。土層壁清掃中に採集した。26は「元祐通寶」で、暗灰茶色土層出土。27は「淳化元寶」で、直径は1.9cmと小さく外縁部分がほとんど存在せず、下半部でわずかに確認される程度である。しかし側縁部分は面として存在しており、何らかの要因で周囲を削除したものと思われる。暗灰茶色土層出土。28は「熙寧元寶」で、51SX102出土。29は「熙寧元寶」で、51SX052出土。30は「正隆□寶」で、「正隆元寶」である。黒色土II層出土。31は「聖宋元寶」で、黒色土II層出土。32は文字が錆で潰れるものの「皇宋通寶」と判断される。51SX005出土。33は「政和通寶」で、51SX005出土。34は「□□通寶」で、文字は錆に覆われているが「皇宋通寶」の可能性が高い。茶色粘土層出土。35は「□□通寶」で、直径は3.5cmと大型で厚さも2.5mmある。銭のサイズと字体から「崇寧通寶」とみられる。なお当該資料は「寶」字上と「通」字右側に直径3.5mmほどの穿孔がある（拓本に矢印で示した）。51SX005出土。

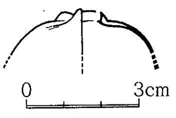


Fig.32　第51次調査出土ガラス製品実測図（1／2）

（D）ガラス製品

小壷（Fig.32、CD-0335・0336）　口径1.0cmで口縁部の立ち上がりは2mmと

低い。残存部での胴部最大径は3.8cmである。口縁部の断面形状は三角形で、端部が尖り気味である。口縁部付近にガラスが捻れて重なったような部分があり、製作時に回転させながら成形されたことを窺わせる。厚さは口縁部付近で2mmほどあるが、胴部付近はかなり薄く0.1mm前後（図では表現できない）しかない。色調は明緑白色で透明であり、小さな気泡が随所に点在している。51SX100出土。

（E）石製品（Fig.33、CD-0337～0354）

滑石製鍋（1・2）　1は口径20.6cm。鍔の断面形状は先端が丸くなった三角形を呈している。鍔下面以下には煤が付着している。暗灰色砂層出土。2は口径31.0cm。全体は丁寧なケズリ調整で、鍔側面及び下面には煤が付着している。淡黒色粘質土層出土。

滑石製鍋加工品（3～10）　3は鍔部分周辺の破片を利用した加工品で、鍔の先端を若干削り取るほか、破断面の多く（図の上下面と左側面）を二次加工する。図の右側面は未加工であり、未完成品であろう。なお図の鍔以上に煤が付着しており、鍋時は図の下が口縁部に該当したとみられる。暗灰色砂層出土。4は鍋の胴部の破片だが、図の下面を除いてすべて何らかの加工痕がある。まず図の上面は切り込み痕が多数ありさらにそれを削っている。左右の側面は破断面に近いがわずかに面を加工した形跡が認められる。正面と背面は鍋の一次面である。黒色土I層出土。5は長さ5.75cm、幅2.6cmと小片化した鍋の鍔部分で、鍔端部はかなり削られ低くなっている。鍔下面は当初面で鍋使用時における煤の付着がみられる。また側面の多くも削り加工が施されている。黒色土II層出土。6は鍋の体部の破片で、周囲は全面破断面である。表面や背面も二次加工の痕跡はない。ただ体部に貫通する穿孔が2箇所あり、いずれも径5mm余りで図左のものは鉄芯が残っている。黒褐色土層出土。7は鍋の底部を加工したもので、下図は鍋の底部外面に該当し煤の付着が顕著である。図右側の傾斜面は当初の体部面で、その内側を段状に加工し1箇所（径0.6cm）の穿孔を行う。その穿孔内には鉄芯が残っている。上図は鍋の内底部で特別な2次加工はない。暗灰色粘土層出土。8は鍔部分をすべて削り落とし、さらに破片の周囲すべてに加工を施している。当初の鍔部分は全く存在せず、一次面としての体部部分には煤が付着することで識別できる。他に鍋の一次面として残存するのは口縁部と内面のみである。温石として使用されたと考えられる。茶褐色土層出土。9は長さ12.2cm、幅6.5cmで、図の下面は破断面だが、鍋の当初面は図の正面のみで他はすべて二次加工の手が及んでいる。残る3側面はすべて二次的な削り加工で、丁寧に磨かれている。図の背面は幅8cmほどを若干窪ませている。この窪み部分は周囲と色調が明らかに異なっており、鍋使用後に加工されたことを窺わせる。また図の左下で破断面にかかって径3mmの穿孔がある。穿孔は2方向から穿たれるもので、切り込み面での径は約1.2cmにも及ぶ。温石か。暗灰茶色土層出土。10は9と同様に背面をわずかに窪ませる資料である、図の右側面と下面は破断面だが、左上面で斜めにカットされたような部分は欠損面を粗く加工した形跡がある。図の正面には細かな傷がありこれも二次的な加工の可能性がある。暗灰茶色土層出土。

砥石（11～16）　11は現存長6.5cm、最大幅4.1cmで、図の上下面は破断面である。ただし図下面は風化しており使用時もすでにこの状態であった可能性が高い。他の4面は使用面で、図の背面部分では自然面も残されている。淡灰茶色土層出土。12は図の周囲及び下面が破断面で当初面は断面図にみえる台形状の3面である。いずれも使用面で、表面は二次的に火を受けたためか黒変している。茶褐色土層出土。13は現存長7.1cm、最大幅4.2cm、最小幅2.9cmで、図の下面は破断面、図の上面は自然面で当初に切断したままの状況を呈しており、使用時の姿を伝えている。他の4面は研磨痕があり使用面であったことがわかる。淡黒色粘質土層出土。14は現存長3.9cm、幅3.5cm、厚さ0.9cm前後の薄いもので、図の上面は破断面、図の左右面は工具を使用した切断面のままで特別な加工は施さない。残る正面と背面に2面が使用面で細かな傷が観察される。51SX150出土。15は図の

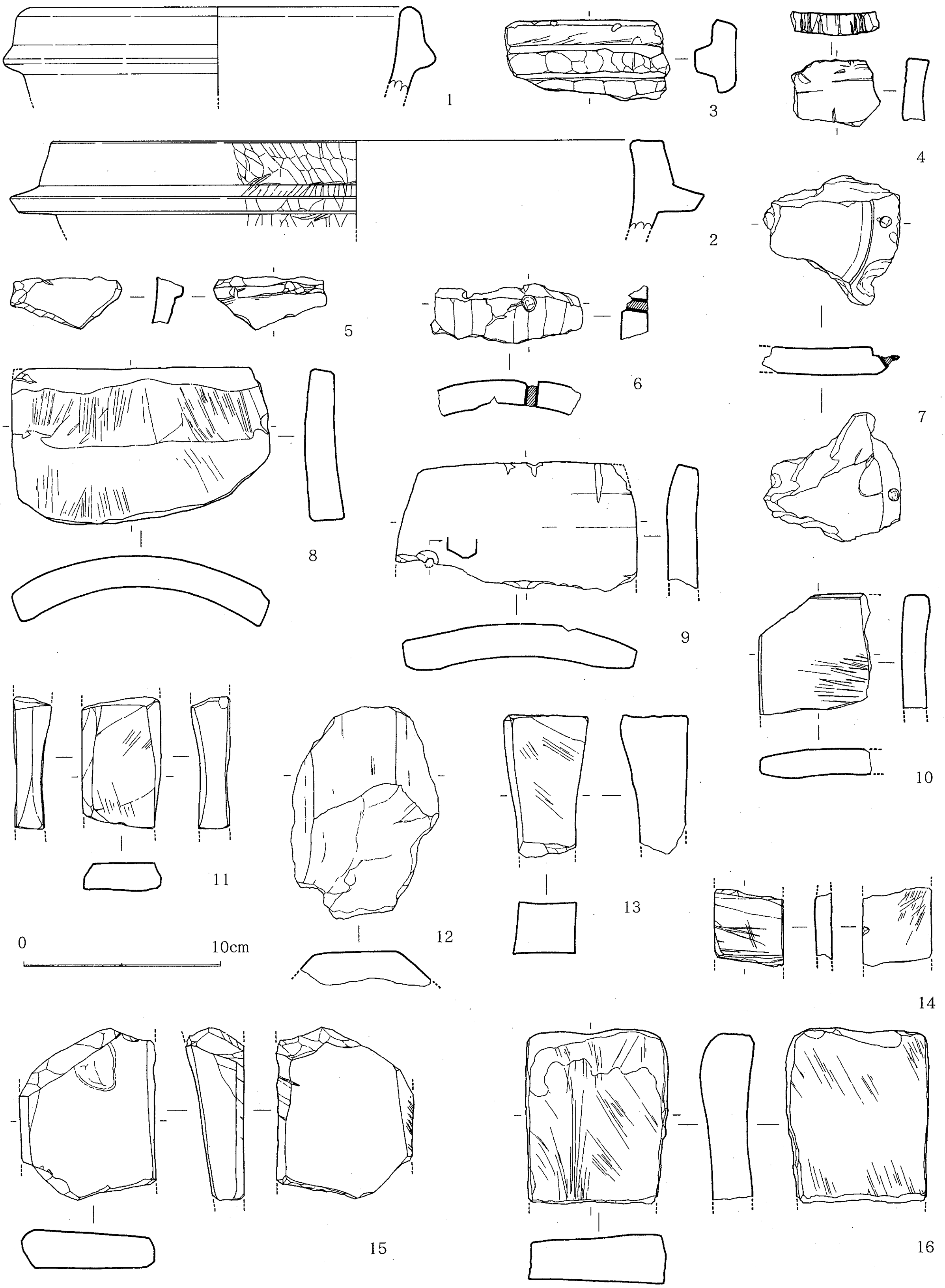



Fig.33　第51次調査出土石製品実測図（1／3）

上下面ともに破断面。幅の狭い部分（図の左右面）は研磨されているが工具の痕跡を思わせる傷があり使用面と断定できない。残る正面と背面はいずれも使用面である。なお図の下面にあたる破断面は風化しており、使用当時の面かも知れない。黒色土I層出土。16は現存長8.8cm、幅7.2cm、厚さ

2.6cmで、図の下面は破断面、上面は自然面で未使用、図の左右側面は自然面を若干加工した程度の面、残る2面（正面と背面）には使用痕がある。暗灰色砂層出土。

(5) 小　結

ここでは各堆積層の出土遺物の傾向を概観し、各々の年代について検討することでまとめとしたい。遺構については総括で簡単に触れることとする。なお報告に用いる各時期は『大宰府条坊跡XV』掲載のものによる。

**・淡茶色土層**　龍泉窯系青磁IV類の可能性があるものはこの層に限られる。G期以降。

**・茶褐色土層**　出土遺物のうち七輪とみられる資料はかなり新しいものと考えられる。陶磁器は主としてF期のものが多いが、明代とみられる染付も混じっており新しいものの混入が目立つ。具体的に特定はできないが、14世紀後半以降に形成されたものとみたい。

**・黒色土I層**　土師器坏aの平均口径は12.25cmで、統計値で比較すると大宰府史跡第78次調査黒灰色土下層出土資料のデータに似ており、XIX期頃を考えたい。ただし小皿aのデータは平均口径8.2cmで、統計値を比較するとこれよりもやや古い傾向を示している。陶磁器は龍泉窯系青磁III類が主流をなし、白磁ではIX類が目立っており、F期に該当する。これらを総合するとXVIII期～XIX期の範囲で捉えることができよう。

**・淡灰茶色土層**　土師器は数量が少ないが、坏aの平均口径は12.59cmでXVIII期に近いが、小皿aでは8.13cmでほぼXVIII期とみて良さそうである。陶磁器はF期に該当しよう。調査所見から黒色土I層とほぼ同一層位と認識すると、やはりXVIII～XIX期頃とみるのが妥当であろう。

調査時の所見では、黒色土I層と淡灰茶色土層はほぼ同時に形成されたと考えられ、遺物の傾向もそれを否定していない。したがって両者の形成時期は13世紀中頃～後半と考えたい。

**・暗灰茶色土層**　土師器小皿aの平均口径は8.41cm、坏aの平均口径は12.47cmで、統計値を踏まえてもXVII～XVIII期の間くらいの数値を示すと言える。陶磁器は龍泉窯系青磁椀、坏にIII類が多く含まれるほか、白磁では皿のIX類が目立つ。もちろん古い要素を持つものも見いだされるが、F期の典型的な様相と判断したい。

**・黒色土II層**　土師器小皿aの平均口径は8.33cm、坏aの平均口径は12.48cmで、先の暗灰茶色土層出土資料ときわめて近しい数値を得ることから、同様にXVII～XVIII期の間頃に位置づけるのが妥当であろう。陶磁器の出土傾向もきわめて類似するが出土量では暗灰茶色土層を上回っており、当該土層もやはりF期の典型的な様相を伝えていると言える。

**・暗灰色砂層**　土師器は量的に少ないが上記2層と同じような傾向を示している。また陶磁器も典型的なF期のあり方と言って差し支えなかろう。

調査時の所見では、暗灰茶色土層、黒色土II層、暗灰色砂層はほぼ同時に形成されたと考えられ、遺物の傾向もほぼそれを裏付けている。したがってこの一連の層位の形成時期は13世紀中頃と考えたい。

**・茶色粘土層**　土師器は資料数があまり多くないものの、坏aの平均口径は12.71cm、小皿aでは8.97cmで、これまでの土層出土資料よりやや大きい数値となる。そのままデータを当てはめれば小皿aではXVI～XVII期、坏aではXVII～XVIII期の中間くらいの数値となる。陶磁器の様相は、龍泉窯系青磁III類と白磁IX類が目立つ点でF期と考えられる。したがって層位的な観点を含めるとXVII期（13世紀第II四半期）を前後するあたりを考えておきたい。

**・茶灰色粘土層／黒色炭層／砂礫層**　全体的に出土量は少ないが、龍泉窯系青磁III類、白磁IX類を含み、龍泉窯系青磁II-bが目立つ傾向にあるためE期と捉えるべきであろうか。土師器は小皿aの平均

口径は茶灰色粘土層で8.63cm、黒色炭層で8.58cmとなり、資料数は少ないもののXVII期（13世紀第II四半期）に充てておきたい。

**・黒褐色土／淡黒色粘質土層**　土師器小皿a（糸切りのみ）の平均口径は8.76cmで、XVII期（13世紀第II四半期）頃に考えるのが妥当であろう。ただし外面底部の切り離しでヘラ切りが混じる点が指摘できる（ヘラ切りがこの層に安定的に含まれるとは考えないが、下位の層の資料を作業中に含み込んでしまっている可能性がある。しかし古い様相を持つ層位に近づいていることを示唆するものとして肯定的に捉えておきたい）。陶磁器は淡黒色粘質土層に龍泉窯系青磁坏III類1個体片を含み、また白磁IX類もあるが、それ以前の時期の白磁がかなり多めに入っている。これより上層の白磁の傾向と比較すると明らかに古い要素が強くなっている。これも土師器の傾向と同様に捉え、古い様相が見えているものと判断したい。ただし層位の形成は陶磁器E期とするのが妥当と考える。

**・黒灰色粘土層／暗灰色粘土層**　土師器の出土量は少ないが、小皿aの口径がやや大きくなる傾向にある。特にヘラ切りの資料が目立つようになり、まだまだ底部の切り離しは糸切りが主流だがこれ以上の層位にくらべると丸底坏aが目立っていると言える。陶磁器では、龍泉窯系青磁III類はみられず、I類とII類が主体を占めている。白磁ではIX類が見えず、II～V類の椀、皿が目立っている。D期後半の様相と言えるだろう。13世紀前半頃と考えておく。

**・黄灰色砂層**　土師器の出土数は少ないがまだ糸切りが主流である。陶磁器も量的には少ないが龍泉窯系青磁椀II類や白磁IX類は見えず、陶器も鉢III-2、VI類程度であり、D期でも前の範囲に収まりそうである。12世紀中頃から後半頃と言えようか。

**・暗黒灰色粘土層／黄色砂礫層**　暗黒灰色粘土層では土師器に糸切りがみえるが、黄色砂礫層ではヘラ切りが主体を占める（もちろん小片資料には糸は混じっている）。陶磁器の傾向は白磁のV類やXI類が目立ち、青磁の出土はほとんどなく、暗黒灰色粘土層で同安窯系青磁椀が入る程度である。トレンチ作業で不安な要素の多い土層だが、少なくとも黄色砂礫層は青磁が入らず、C期の白磁を主体としているため12世紀中頃あたりには位置付けられるのではなかろうか。また黄色砂礫層出土の土師器坏片はより古い様相（9世紀後半～10世紀前半）を示すものも含まれている。

これらを総合してみると上層遺構は黒色土I層、淡灰茶色土層の上面から切り込んでいるため少なくとも13世紀中頃～後半以降に形成されたものと捉えておく必要がある。また上層に被る茶褐色土層は14世紀後半以降に形成されたとみられるため、上層遺構の主体はこの時期の範囲内ということになる。しかし遺構から出土する遺物の主体は黒色土I層等と似た傾向にあり、そのほとんどは13世紀中頃～後半に近い時期に形成されたと見て差し支えなかろう。ただし層位の解説でも示したように、より上層の遺構が切り込んでいる可能性も指摘でき、例えば龍泉窯系青磁IV類を出土する51SK015はその代表的な遺構であり、一部に14世紀代に下るものがあることは否定できない。

下層遺構は先の黒色土I層等が上限となり、次の暗灰茶色土層や黒色土II層等が下限となる。前者は再三述べるように13世紀中頃～後半とみられ、後者は13世紀中頃に位置づけられる。下層遺構はこれに挟まれた時期ということになり、柱筋を揃えた掘立柱建物及び礎石建物はこの範疇で捉えられることになる。

なお下層遺構を形成する土層中からまとまって土器が出土した51SX100だが、土師器の傾向をみると、坏aでは平均口径が12.55cm、小皿aでは8.21cmであり、XVII～XVIII期と捉えられる。陶磁器も龍泉窯系青磁III類や白磁IX類が多く含まれており、F期の範囲で捉えるべきであろう。具体的な年代は13世紀中頃とみて差し支えなかろう。

# 第55次調査

（1）調査経過

調査地は太宰府市大字観世音寺字御所ノ内38-1（現在は観世音寺五丁目2-27）に所在し、鏡山条坊復原案では左郭三条八坊にあたり、現在の史跡指定地（「観世音寺及び子院跡」）に近接した位置にある（Fig.1・2）。

前年度の後半に当該地に個人住宅建設の計画があるという情報が社会教育課（当時）にもたらされ、

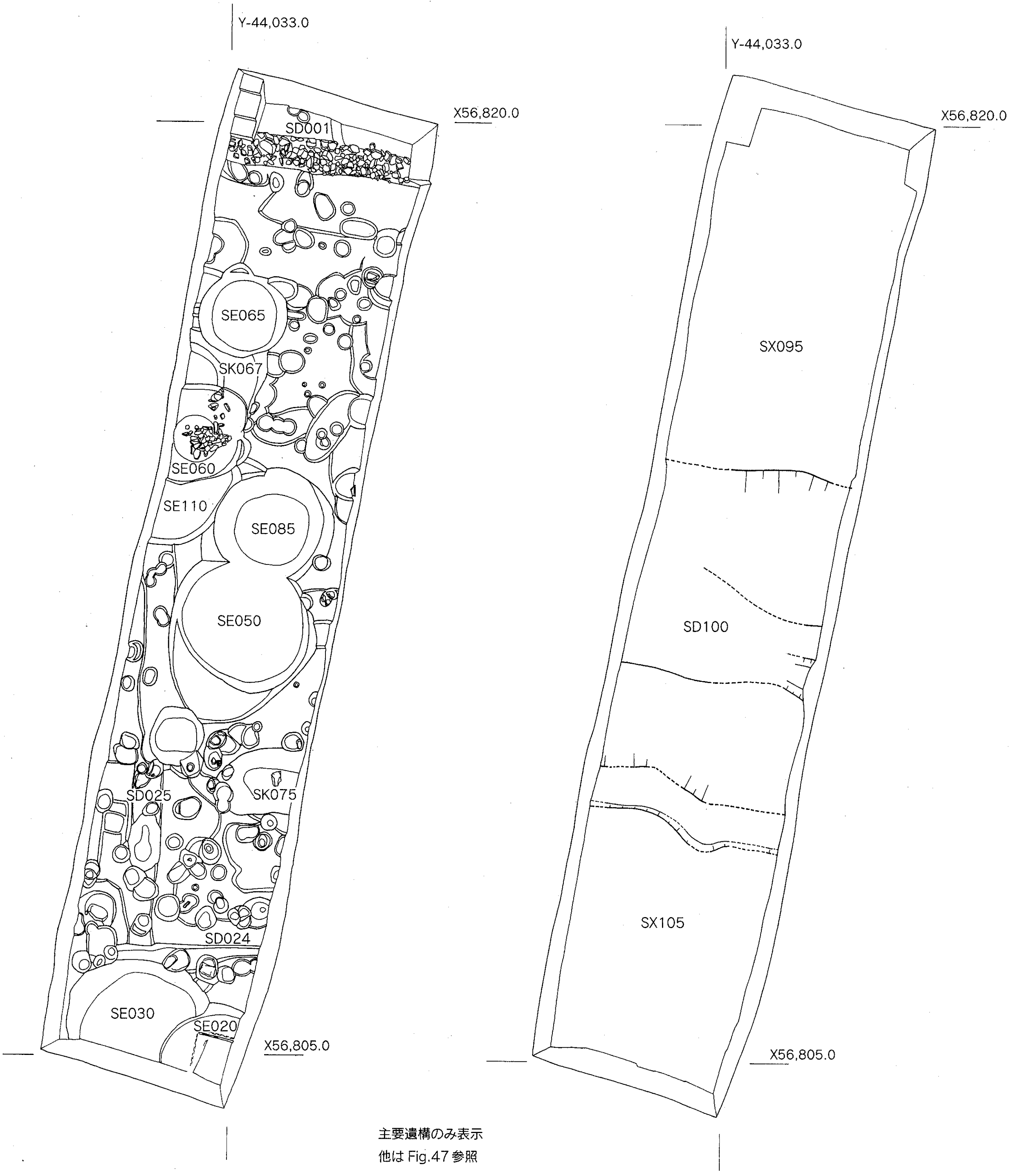



Fig.34　第55次調査遺構配置図（1／100）

その位置が字御所ノ内として早くから重要地点として注目されていたことと、南側近接地が九州歴史資料館によって昭和53年度に調査（大宰府史跡第47次調査）され、当市の調査でも既に同字内を調査し重要な所見を得ていたこと等から試掘調査は実施せず、すぐ地権者と協議を行い、年度が開けてはやい段階で調査に入ることで合意を得た。

調査は昭和60年7月31日から9月5日まで実施し、狭川真一が担当した。調査対象面積は336m²、調査面積は47m²（一部だが上下2面を調査しているため、実質はこの数値より若干大きい）である。ただし一般木造住宅であったことや時間的、経済的制約、さらには調査地が狭小であるということも手伝って、特に深いと判断された遺構（主として井戸）は完掘せず、周囲の遺構の切り合い関係で遺物の混じる可能性が低くなるまで掘り下げるに留まっている。

（2）層序

地表面から約0.5mは宅地にするために行われた現代の盛り土で、その直下にはそれ以前の水田面が残存していた。その耕作土と床土を除くと茶褐色土層がありこれが包含層となっている。それを除去すると最初の遺構面が表れるが、そこからは55SD001、55SE060等の一部の遺構が切り込んでいる。この面は黒灰色土層の上面にあたるが、調査区の南半分ほどはさらにこの上に暗茶褐色土層があり、55SD024はこの暗茶褐色土層上面から切り込んでいる。この黒灰色土層を除去すると地山の黄色砂質土があらわれ、多くの遺構が切り込んでいる。最古となる55SD100もこの面から切り込むが、他の多くの遺構はこの55SD100埋土上面から切り込み、55SD100の規模が大きいことから、その埋土が一見整地のような状況を呈している（Fig.35、CD-0374～0377）。

以上のように詳細には3面に分層が可能となるが、実際は茶褐色土層（遺物取上は茶色土層）と黒灰色土層（遺物取上は暗灰色土層）の一部で遺物を採集したほかは、詳細な調査は行えていない。

（3）検出遺構

**井戸**

**55SE020**　南北1.3m、東西1.1m分を検出したが他は調査区外にある。埋土を0.5mほど掘り下げた段階で方形を呈する木製の井戸枠が検出された。枠板は0.2m前後の幅の板材を並べ、それを横

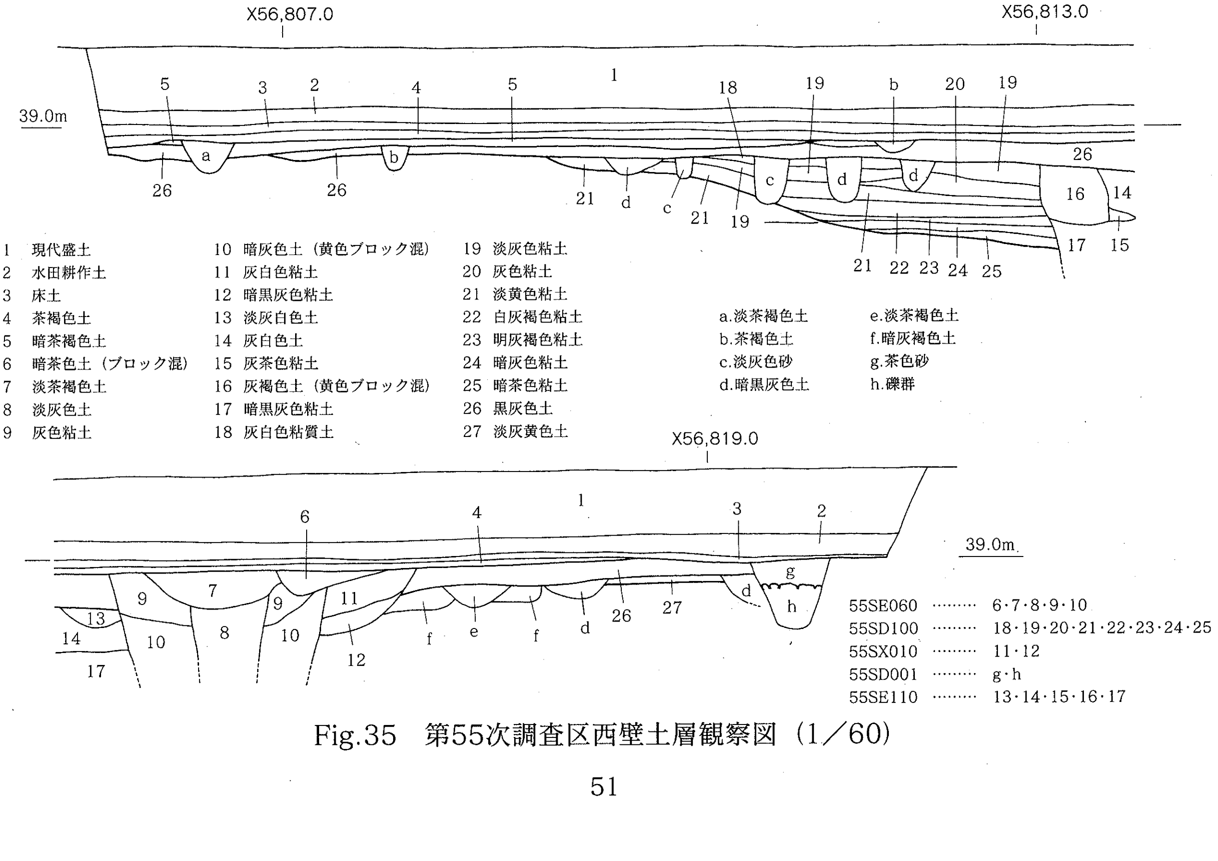



Fig.35　第55次調査区西壁土層観察図（1／60）

桟が支えるものである。一部崩落が始まっておりこれ以上の掘り下げは断念した。なお枠の検出長は東西0.6m、南北0.7mでいずれも調査区外に延びている。55SE030を切っている。

**55SE030** 55SE020に切られるもので、南北1.5m、東西2.2m分が確認できたが、東側は55SE020で破壊され、南側は調査区外に延びるため全容は明らかでない。埋土は黒色土で、深さ約1mまで下げたが危険なため完掘は断念した。遺物は検出面から約50cmまでを便宜上黒色土上層とし、以下を黒色土とし、報告も分けているが実質上の分層は難しい。

**55SE050** 調査区の中央部で検出したもので、平面形は略円形を呈し径2.5m前後である。埋土は上位から淡灰色土、黒灰色土となりこれ以下は未調査である。55SE085を切っている。

**55SE060** (CD-0358～0362) 隅丸方形状を呈する堀方は南北1.5m、東西1.1m以上を測り、中程に径0.78mの桶を据え井戸側とする。桶内の埋土は淡灰色土で、その埋土の窪み（埋土上面で桶中心よりやや東に寄っている）に0.1～0.2m大の礫を約0.3mの厚さ（高さ）まで投入し、かつその周囲を茶白色粘土で覆っている。その結果、礫同士の隙間には土の侵入はほとんどなく、厳重に密封した様子が窺える。桶内は深さ約0.5mほど掘り下げたが完掘していない。なお土層観察の結果、他の遺構の上面にかぶる黒灰色土層の上面から切り込んでいることがわかった。

**55SE065** 径1.4mの略円形を呈するもので、深さ約0.7mまで掘り下げたが完掘していない。埋土中に竹製のタガとみられる破片を見いだしたこととその形状から、井戸側に桶を使用したものとみられる。55SK067を切っている。

**55SE085** 径2.0mの略円形を呈するもので、最大で0.9mほど掘り下げたが完掘はしていない。この段階で枠の痕跡は見いだせなかった。55SE050に切られ、55SE110を切る。

**55SE110** 北側を55SE065、東側の一部を55SE085に切られ、西側は調査区外に延びていて全体は不明。埋土は暗黒灰色粘土を基調とするもので、深さ約0.7mまで掘り下げたが完掘はしていない。

**溝**

**55SD001** (CD-0363・0364) 調査区北端で検出した東西方向の溝である。検出長3.1mで両端とも調査区の外に延びている。幅は0.45～0.55m、深さ約0.25mで、埋土は礫（5～30cm程度）で埋め尽くされ、その隙間に土が入り込む。一部のピット（S-4）を除いて最も新しい遺構である。暗渠排水施設の可能性がある。なお土層観察の結果、他の遺構の上面にかぶる黒灰色土層の上面から切り込んでいることがわかった。

**55SD024** 調査区南端で検出された東西方向の溝である。検出長4.0m、幅0.2～0.45m、深さ5～10cm程度である。周囲の遺構との関係はこの遺構が最も新しい。

**55SD025** 検出長3.0m、幅0.4～0.5m、深さ5cm程度の南北溝で、南側を55SD024に切られるが、その直下で終息しており、南側に近接する55SE030との前後関係は明らかでない。なお遺構の北側は堆積層（S-70）が被るが、その下位から検出された南北方向の溝状遺構（S-84）はほぼこの溝に連続しており、当初は同一のものと判断される。したがって検出全長は6.95mとなり、ここにほぼ南北方向の溝が存在したことを確認できる。溝の任意中点は北側で（X＝56,814.55　Y＝-44,034.10）、南側で（X＝56,806.78　Y＝-44,034.40）となり、短い距離だがN-2°13′-Eほどの振れを有する（小結参照）。

**55SD100** (CD-0365～0373) 調査区中程で検出された東西方向の大溝である。溝幅は5.5～6.2mで、最深部の深さは0.8mである。55SE050・110等をはじめとする多数の遺構で大半を失っており詳細は明らかでない。埋土は複数層認められるが、中程に淡黄色粘土が厚く堆積するほかは淡灰色粘土系のものが主体を占め、一部最下層に黒灰色粘土が堆積する。砂土を含む堆積はほとんどなく、最下部付近が常に澱んでいたような状況ではなかったかと推定される。溝の最下部で小溝状を呈

する部分があり、そこがほぼ溝の中心を示すことからそれを任意の中点としたときの座標は（X=56,811.20　Y=-44,031.08）である（小結参照）。

**土抗**

**55SK067**　北側を55SE065、南側を55SE060、西側は土抗（S-10）があって全体の形状はわかりにくい。深さは0.15～0.25mである。

**55SK075**　東西1.35m以上、南北1.0m、深さ約0.35mの不整長円形土抗である。東側は調査区の外に延びている。55SX040埋土除去後に検出され、埋土はその大半が黒褐色土で構成されるが、西側の一部に茶褐色土の堆積が確認できた。堆積順は茶褐色土層が古いが遺物は出土しておらず、時期差は確認できない。

**その他の遺構**

**55SX007**　55SD001の南側に近接して検出されたピットで、径約0.25m、深さ約0.2mを測る。

**55SX029**　0.75×0.4mの浅いピットで、55SE020・030を切っている。

**55SX035**　東西0.55m、南北0.45mのピットで、深さは0.55mほどである。ピットは階段状に徐々に径が小さくなっており、最下部での径は0.2m以下である。周囲の遺構との切り合い関係は複雑で難解であったが、出土土器からこの付近では新期に属する遺構と判明した。

**55SX040**　55SE050の南西側に広がっていた浅い窪み状遺構で、この付近の多くの遺構はこの埋土を除去した段階で検出されている。

**55SX059**　径0.6m前後のピットで、55SE085埋土上面から切り込んでいる。

**55SX068**　略円形を呈する径0.3m、深さ0.1m内外の浅いピットで、55SD025より新しい。埋土は淡茶色粘土である。

**55SX095**　溝55SD100の北側で検出された堆積層（もしくは窪み状遺構の一部）で、周囲のすべての遺構はこの堆積層の上面から切り込んでいる。検出範囲は南北4.5～5.5m、東西4.0m前後で、55SD100との関係は明確にできなかったが、55SE065中程以北には延びておらず、55SD100の北肩が浅く北側に広がっていた可能性もある。

**55SX098**　55SE050と085の間で、調査区東壁に近接した位置にある径0.2m、深さ0.25m程度のピットで、わずかながら柱痕が残存していた。

**55SX105**　55SD100の南側に約3～5mの範囲に確認された堆積層である。遺構の切り合いが激しいことと、残存状況が悪いことが重なってこれ以上の詳細は不明である。55SX095とほぼ同じ性格のものとみられる。

**55SX106**　55SE050の西側で検出された径0.35m、深さ0.2mのピットである。

(4) 出土遺物

(A) 土器・陶磁器

**井戸出土土器**

**55SE020上面埋土出土土器**（Fig.36、CD-0379～0381）

**土師器**

坏a（1）　口径14.2cm、器高2.6cm、底径10.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。見込みには漆とみられる皮膜が付着するが、その表面は刷毛でナデたような擦痕があるほか、折り重なった部分ではそのナデの方向が異なっている。

羽釜（2）　幅約2cmの鍔が外側へつきだしている。調整はヨコナデである。

**55SE020裏込土出土土器**（Fig.36）

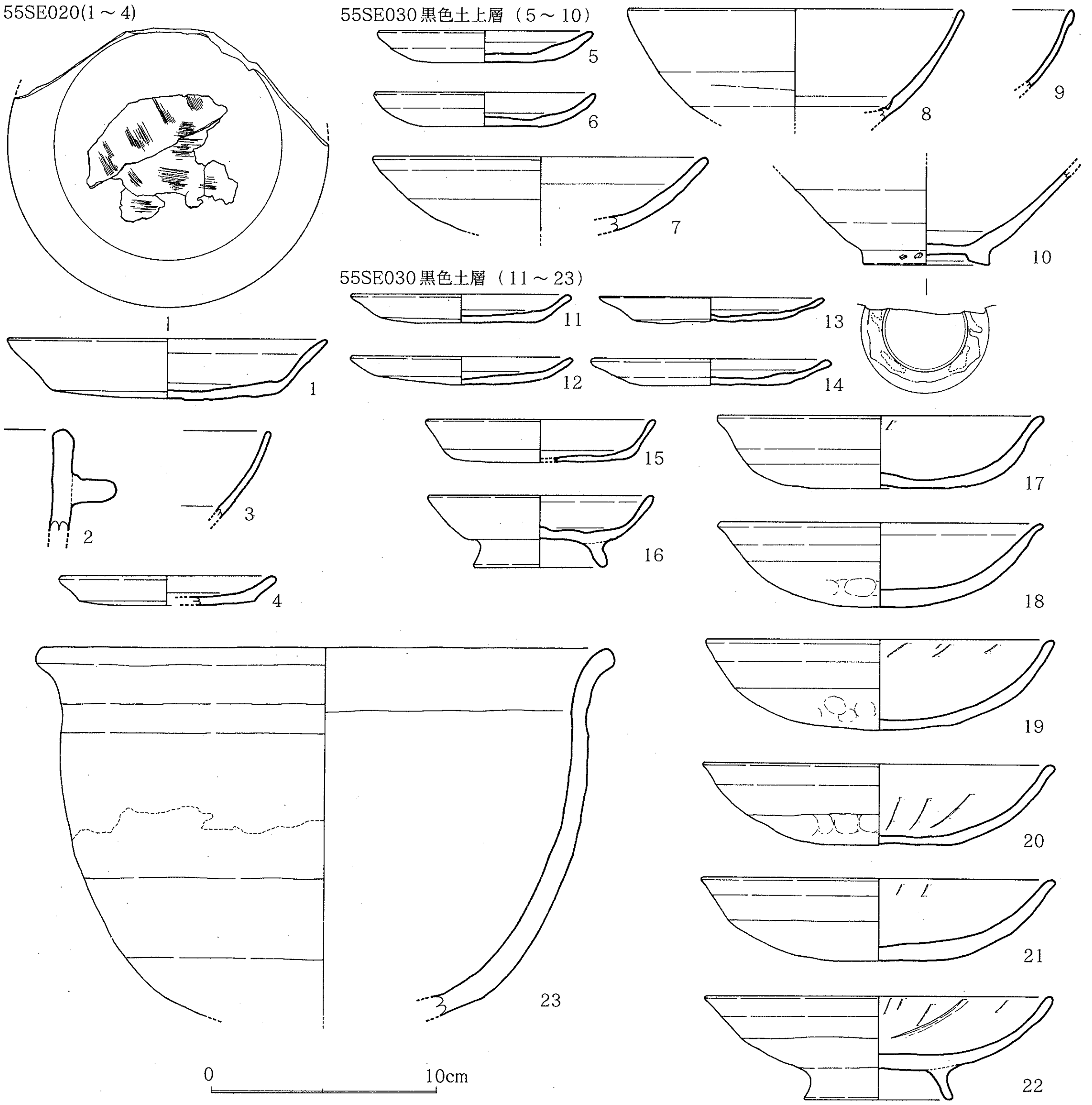



Fig.36　55SE020・030出土土器実測図（1／3）

**土師器**

小皿a（4）　口径9.6cm、器高1.3cm、底径7.0cm。底部はヘラ切りとみられ、板状圧痕が残る。

**白磁**

椀（3）　見込みに段を有する。V-1類。

**55SE030黒色土上層出土土器**（Fig.36、CD-0382・0383）

**土師器**

小皿a（5・6）　口径9.6・9.8cm、器高1.4・1.5cm、底径5.6・5.8cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

丸底坏a（7）　口径14.8cm。底部は押し出しによる丸味を有し、ヘラ切りの後粗いナデが施される。内面はミガキbが施される。

**白磁**

椀（8・9）　8は口径14.9cm。見込みに段を有する。緑色味を帯びた灰白色の透明釉は、外面の

体部下半部にはかからない。V-1-a類。9は口縁端部を玉縁状にするもので、残存部の全面にかかる釉は透明なもので、素地が透け明白色に発色している。一部に細かな貫入があるが、ガラス質で光沢がある。胎土は精良だが、黒色粒子が若干混在している。XI-2類。

**高麗青磁**

椀（10） 径5.6cm、幅1.0cmの蛇の目高台で、高さは0.7cmとやや高めである。畳付には白砂土による目跡があり、高台の外面にも小塊が付着している。釉は畳付の一部を除いて全面に施され、淡緑灰色に発色する透明度の低いもので、表面の一部にピンホール状の窪みが若干量観察される。見込みは径4cmほどの大きさで一段窪ませている。初期高麗青磁椀I-1類。

**55SE030黒色土層出土土器**（Fig.36、CD-0384～0392）

**土師器**

小皿a（11～14） 口径9.8～10.6cm、器高1.1～1.3cm、底径6.7～9.0cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

小坏a（15） 口径10.2cm、器高1.9cm、底径7.8cmを測るやや深めのもので、小皿aとは区別し小坏として報告した。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

小坏c（16） 口径10.0cm、器高3.2cm、高台径6.0cm。高台貼り付けに伴うヨコナデで、底部の切り離しは不明だが、板状圧痕は観察できる。

丸底坏a（17～21） 口径14.4～15.6cm、器高3.2～4.0cm。内面はミガキbでコテ当て痕がよく観察でき、体部外面下半部には指圧痕が観察される。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。17は平底気味だが、体部外面下位に押し出しの後の指圧痕が観察できるため同類と判断しここで報告した。

丸底坏c（22） 口径15.4cm、器高4.5cm、高台径6.5cm。内面はミガキbでコテ当て痕がよく観察でき、体部外面下半部には指圧痕が観察される。底部は高台貼り付けに伴うヨコナデによって、切り離しの手法は不明。

甕（23） 口径25.6cm。表面は風化が進行し、残念ながら調整は観察できない。外面の体部中程以上には煤が付着しており、使用の跡を窺わせる。

**55SE050淡灰色土層出土土器**（Fig.37、CD-0393～0398）

**土師器**

小皿a（1～3） 1は口径9.4cm、器高1.3cm、底径5.2cm。底部はヘラ切りとみられ、板状圧痕が残る。2・3は口径8.8・9.2cm、器高1.0・1.1cm、底径6.6・6.3cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（4） 口径14.3cm、器高2.55cm、底径9.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

丸底坏a（5） 口径15.8cm、器高3.05cm。体部内面はミガキbで、底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

**須恵質土器**

鉢（6） 底径7.4cmで糸切りされる。体部内面はヨコナデの痕跡が明瞭に見えることから捏ね鉢としては未使用、あるいは別の用途で使用された可能性がある。東播系か。

**白磁**

椀（7・8） 7は口径15.4cmで、口縁端部を外側へ摘み出す。体部内面上位に細沈線が巡る。V-4類あるいはVIII-3類。8は高台径6.4cm。見込みは高台とほぼ同径で0.9cmほどの幅の範囲の釉を掻き取っている。その部分の内側のラインに沿うように小さな目跡が付着し、掻き取った範囲は薄い白濁色の化粧土状のものが付着している。同様のものは高台畳付部分にも観察され、重ね焼き時の措置によるものと考えられる。釉は外面体部下位にはかからない。VIII類。

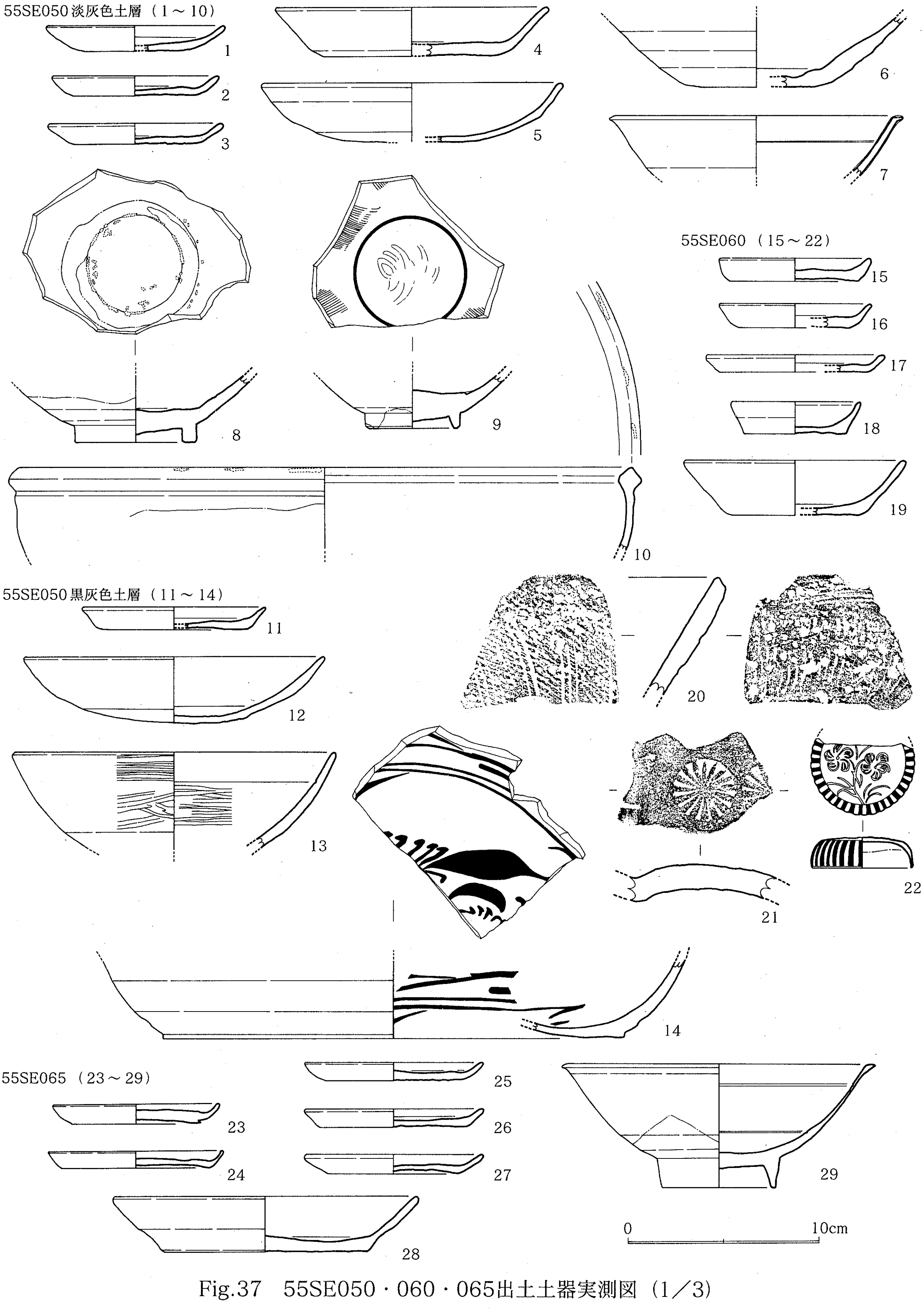



Fig.37　55SE050・060・065出土土器実測図（1／3）

**青磁**

椀（9）　径5.0cm、幅0.5～0.6cm、高さ0.8cmの輪状高台で、回転ヘラケズリによって削り出

される。体部の厚さは1.7cmと著しく厚い。体部内面にクシによる施文があり、見込みに陽刻のスタンプ文を押しているとみられるがきわめて不明瞭である。釉は暗緑茶色に発色し、透明度は高く素地が透けており、光沢がある。体部外面下半にはかからない。胎土は明茶白色の精良なもので、白色粒を微量含む程度で不純物はほとんどなく、小気泡がわずかに観察できる程度である。高台の形状は龍泉窯系青磁I類に近いものを感じるが、内面の施文や釉調は同安窯系青磁に近い。現状ではいずれとも決め難い。

**陶器**

盤（10）　口径33.1cm。体部外面上位と内面に施釉されるが、口縁端部内側はふき取られ、部分的に濁黄茶白色の化粧土が観察できる。釉は黄色味を帯びた明茶色に発色する不透明なもので、光沢はほとんどない。口縁端部の外面に目跡が連続して付着する。I-2類。

**55SE050黒灰色土層出土土器**（Fig.37、CD-0399・0400）

**土師器**

小皿a（11）　口径9.6cm、器高1.2cm、底径7.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

丸底坏a（12）　口径15.8cm、器高3.4cmで、体部内面はミガキbが施される。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

**瓦器**

椀（13）　口径17.0cmに復原できる。内外面ともに体部にはミガキcがみられ、口縁部付近は燻しにより黒変している。

**陶器**

盤（14）　底部径24.2cm。外面は底部が未調整、体部がナデとみられ、釉はなく淡茶白色を呈している。内面は施文後施釉され、釉は茶灰色に発色する透明度のやや低いもので、文様は暗灰色、暗茶黄色、淡茶白色等に発色する。二つの破片が接合するが、埋没環境が異なったためか色調がかなり違っており、釉の光沢の度合いも異なっている。I類。

**55SE060出土土器**（Fig.37、CD-0401～0405）

**土師器**

小皿a（15～17）　口径8.0～9.4cm、器高0.9～1.25cm、底径5.9～6.9cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

小皿b（18）　口径6.8cm、器高1.7cm、底径5.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（19）　口径11.6cm、器高2.85cm、底径6.6cm。底部は糸切りされるが、板状圧痕の存在は不明。埋土上面の石を詰めた部分から出土した。

**瓦質土器**

鉢（20）　外面は上位がヨコナデだが下位は指圧のあと縦方向の粗いクシ目、内面は斜め方向の粗いクシ目の後に4～5本を1単位とした縦方向のクシ目（擂目）を入れる。表面はかなり風化している。胎土は砂粒が多めに混じり粗めで、気泡も目立つ。

火舎（21）　小片のため全体の形状は明らかでないが、体部は波打つように縦方向の押圧気味のナデが入り、おそらく瓜割型を呈していたとみられる。体部側面に16弁の菊花文のスタンプを連続して押捺し、その周囲にヘラミガキを加える。内面は粗いナデの後、部分的に縦方向のミガキを入れる。埋土上面の石を詰めた部分から出土した。

**白磁**

合子蓋（22）　口径5.4cm、器高1.6cm。外形は型による成形で、体部側面には縦方向の凹凸を

並べて蓮弁を意識した施文を行い、天井部には草花文を陽刻する。口縁端部から体部内面は露胎でヨコナデが観察され、他の部位は水色味を帯びた明灰白色に発色する透明度の高い釉を施す。光沢あり。

**55SE065出土土器**（Fig.37、CD-0406）

**土師器**

小皿a（23～27）　口径8.8～9.4cm、器高0.9～1.0cm、底径6.8～7.8cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（28）　口径16.0cm、器高2.9cm、底径10.5cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**白磁**

椀（29）　口径16.4cm、器高6.4cm、高台径6.0cm。口縁端部を外側へ摘み出すタイプで、体部内面上位と下位に細沈線が各1条巡っている。釉は薄い緑色味を帯びた明白灰色に発色し、体部外面下位から底部にはかからない。V-4-a類。

**55SE085出土土器**（Fig.38、CD-0407～0422）

**土師器**

小皿a（1～5）　口径10.2～10.8cm、器高0.9～1.2cm、底径6.5～8.5cm。底部はすべてヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

小皿a2（6・7）　口径10.4・11.0cm、器高1.5・1.0cm、底径6.6･7.7cm。口縁端部内面を上方に小さく摘み上げるもので、底部はヘラ切りされ、7には板状圧痕が観察できる。

丸底坏a（8～10）　口径13.8～16.5cm、器高3.7～4.4cm。体部外面は押し出しにより丸く仕上げ、下半部は指圧の後粗いナデで仕上げる。ただし10は一般的な丸底坏aと同様にミガキbが施され、コテ当て痕跡も明瞭に観察できるが、8・9は内面にミガキbが見えず、見込み部分は斜放射状に施される丁寧なナデで終わっており、通常の資料とは異なっている。

椀c（11～13）　11は口径15.8cmで、口縁端部をわずかに外反させ、内面はミガキbが施されたようで平滑である。12・13は高台径6.6・7.5cm。内面はミガキbとみられるが、判別しにくい。

大椀c（14）　高台径12.8cm、高台高2.1cmと大きな資料である。体部外面は一部に回転ヘラケズリとみられる部分があり、内面は粗いナデで仕上げられる。

坏a（15）　底径5.9cmの平底で糸切りされる。体部はヨコナデされ、開き気味に作られる。見込みは平滑でミガキが施されたようである。豊前からの搬入品とみられる。

小鉢（16）　口径3.8cm、器高2.4cm、底径3.4cm。体部外面は押圧痕、底部はナデ、内面は粗く強めのナデで仕上げる。

**黒色土器**

坏a（17）　口径11.8cm、器高2.35cm、底径9.9cmだが底部は緩やかに丸みを帯びている。体部は内外面ともに丁寧なミガキcを施し、燻しも両面に行っており、黒色で光沢がある。底部はヘラ切りの後丁寧なナデで仕上げる。B類。

**越州窯系青磁**

椀（18・19）　18は幅1cm余り、高さ0.3cmほどとかなり低めの蛇ノ目高台を有し、その径は10.2cmで、畳付に目跡が並び、それと対応して見込みにも目跡が連続して巡っている。釉は畳付を除いて施され、暗緑灰色に発色し、鈍い光沢を放つ。I-2類。19は口径16.0cmに復原でき、釉は残存部の全面に施され、緑色味を帯びた茶灰色に発色する透明度の高いものである。胎土は灰茶色を呈して粗めで、黒褐色斑を多めに含んでおり、白色粒も目立つ。II類。

坏（20）　小片だが口縁端部を花弁状に切り込むもので、弁の窪んだ部分に対応して縦方向の沈

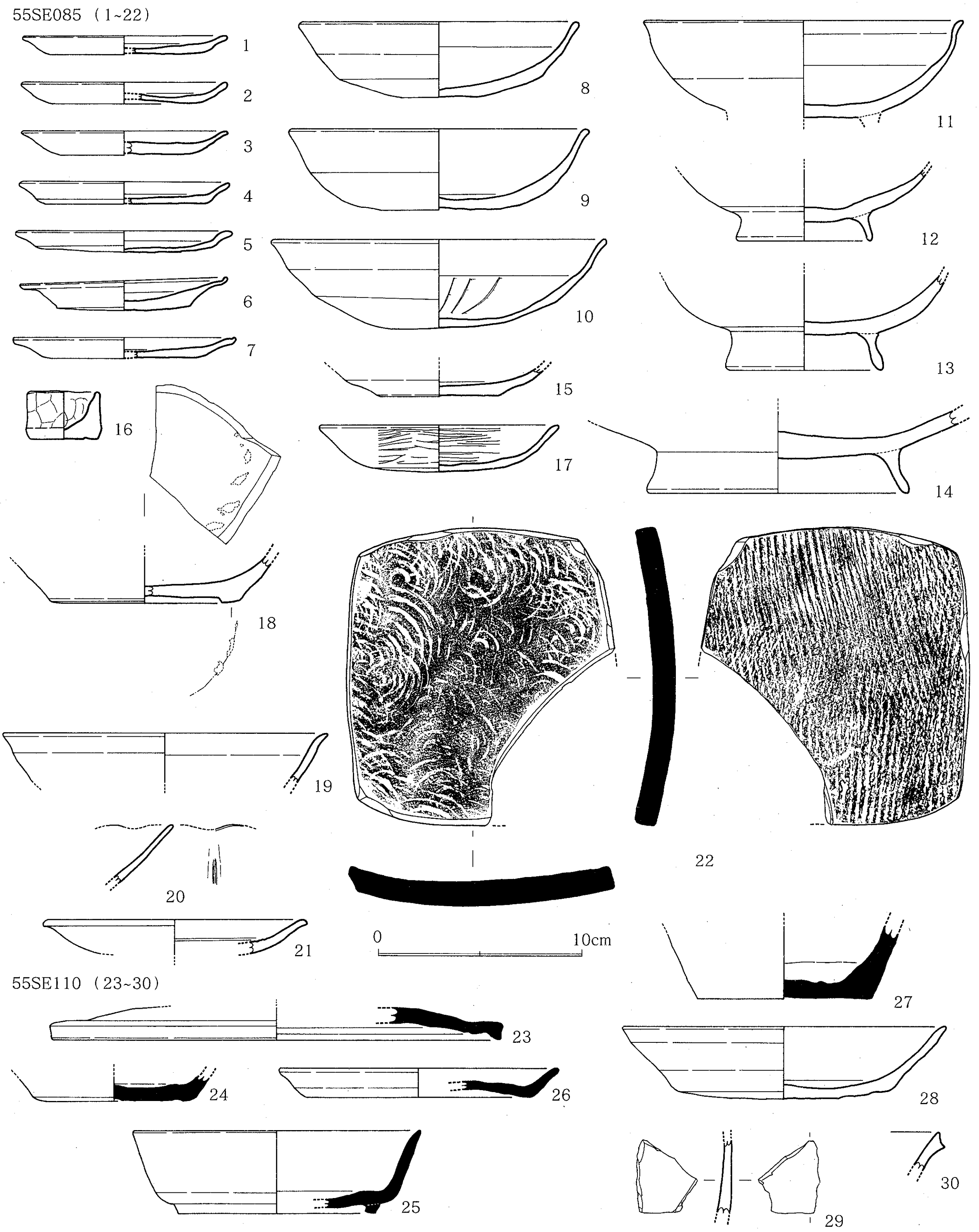



Fig.38　55SE085・110出土土器実測図（1／3）

線（押圧気味で内面までわずかながら影響がある）を入れる。残存部全面に施釉され、暗緑灰色に発色し、光沢がある。I-2類。

**緑釉陶器**

皿（21）　口径13.0cm。見込みに沈線状の軽い段がある。釉は残存部の全面に観察され、深緑色に発色し、柔らかな光沢がある。胎土は土師質で黄茶色を呈する精良なものだが、かなり大粒（5mm大前後）の砂礫が若干量混じっている。防長産。

**須恵器**

猿面硯（22）　一部欠損するが、長さ14.4cm、幅13.2cm、厚さ1.2cm前後を測る。須恵器甕の胴部の破片を利用したもので、周囲をかなり丁寧に研磨加工し、形を隅丸方形に整えている。内面は同心円の当て具痕が密集しているが、見事に研磨され凹凸が少なくなって平滑になっている。さらに内面全体にわたって墨が付着しており、よく使用されたものであることが知られる。また外面は平行叩き目が明瞭に観察できるが、硯としての使用時に底部となる部分（最も張り出した部分）は叩き目が磨り減っている。

**55SE110出土土器**（Fig.38、CD-0423～0428）

**須恵器**

蓋3（23）　口径22.2cmに復原できる大型のもので、天井部は回転ヘラケズリされる。

坏a（24）　底径8.0cm。底部はヘラ切りの後粗いナデ、他はヨコナデである。

坏c（25）　口径14.2cm、器高4.05cm、高台径9.8cm。

皿a（26）　口径13.8cm、器高1.4cm、底径11.2cm。底部はヘラ切り後粗いナデを施して面を調整している。

壺（27）　底径8.5cm。底部は製作時に粘土塊（円盤かも知れない）を台上に置いたままの状態で、未調整である。体部外面は回転ヘラケズリ、底部内面は径0.8cmほどで円形の刺突痕状のものが連続して観察される。

**土師器**

坏a（28）　口径16.0cm、器高3.55cm、底径10.4cm。ヘラ切りの後粗いナデによる面調整を施す。体部はヨコナデで終わる。全体の色調は淡橙色及び明茶灰色を呈する。

**青磁**

29は体部の破片で器形は不明である。内外面ともに施釉され、釉は暗緑灰色に発色し、不透明で鈍い光沢がある。胎土は淡灰色で硬質、小気泡を微量観察するが、不純物の混入はほとんどない。新期の資料が混入した可能性は否定できないが、時期や産地を特定できる資料ではなく、あるいは古期に位置する青磁の可能性もあるのでここで取り上げた。今後の資料の検討を待ちたい。

**灰釉陶器**

壺（30）　明灰緑色に発色する釉が全面にみられ、外面ではかなり薄めにかかる。胎土は明灰色で硬質だが、小気泡が目立ちやや粗めの質感を受ける。

**溝出土土器**

**55SD001出土土器**（Fig.39、CD-0429・0430）

**土師器**

小皿a（1）　口径10.0cm、器高1.35cm、底径7.1cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**陶器**

鉢（2）　底径16.8cm。内外面ともに無釉で、赤橙色を基調とする。胎土は2mm程度の砂粒を多く含んでおり粗い。内面は使用による摩耗で平滑化するとともに砂粒が剥落し、クレーター状を呈している。

**55SD100上層出土土器**（Fig.39、CD-0431～0442）

**須恵器**

蓋3（3）　口径15.0cm。天井部は丸みがあり、回転ヘラケズリされる。

坏c（4・5）　口径11.4・11.8cm、器高3.65・3.5cm、高台径8.0・8.8cm。底部はヘラ切りさ

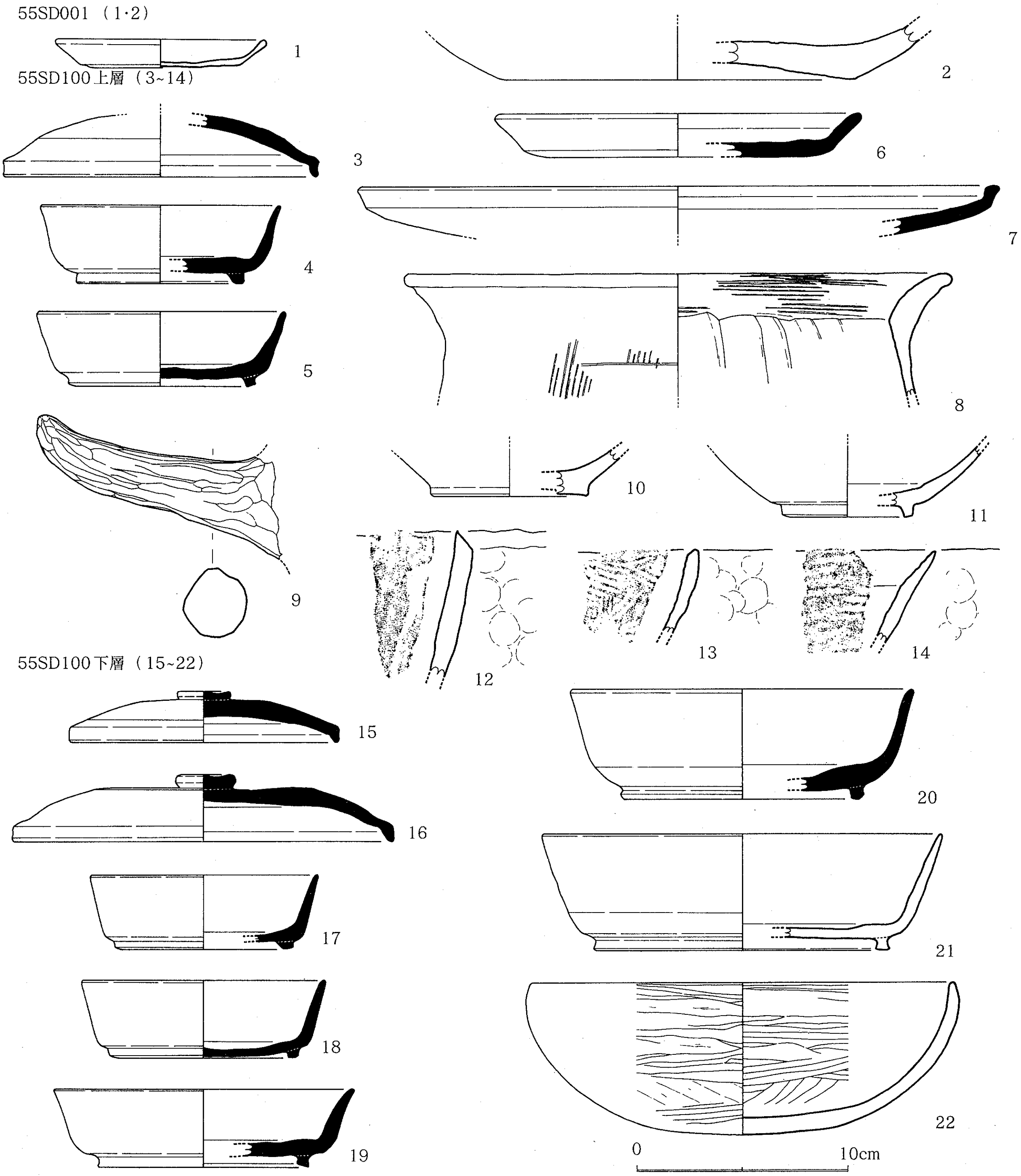



Fig.39　55SD001・100出土土器実測図（1／3）

れたままで粗いナデを施す程度でおわる。5の見込み部分に漆とみられる付着物がある。

皿a（6）　口径17.4cm、器高2.05cm、底径14.7cm。底部はヘラ切り後、ナデ調整される。

高坏（7）　口径30.4cmに復原できるが小片のため数値にはやや不安な要素が残る。底部は回転ヘラケズリで調整される。

**土師器**

甕（8）　口径26.0cm。体部外面は縦方向のハケ目、口縁部は外面がヨコナデだが内面は横方向のハケ目、体部内面はヘラケズリである。いずれも風化が進行し、判別しにくい。

**黒色土器**

把手（9）　長さ12.5cm、最大径約5.0cm。表面はヘラミガキが丁寧に施され、全体に燻しが行われ黒色を呈している。また体部の一部も残存し、内面はヘラミガキと燻しである。B類。

**製塩土器**

壺（12〜14）　12は内面が細かな布目、外面は指圧痕が明瞭に観察される。口縁端部は斜めに傾斜し、体部は直立気味である。長胴の壺型を呈する。13・14は内面に横方向の叩き目が残存し、外面は指圧痕が明瞭である。体部は外側へ開き気味に傾斜し、14の端部は尖り気味におさめる。浅い鉢状を呈する。

**越州窯系青磁**

椀（10・11）　10は高台径7.5cmで幅1.6cm内外の蛇ノ目高台である。畳付は釉をふき取っており茶褐色を呈し、暗白灰色の目跡が付着している。他は施釉され、淡緑灰色に発色する釉の透明度は低めで、光沢もやや鈍い。I-1-a類。11は高台径6.2cmで輪状高台を有し、畳付には目跡とみられる砂粒が付着する。釉は畳付を除く全面に施され、暗緑灰色に発色し、透明度は低めで細かな貫入が入る。見込みに目跡の暗白色砂粒が付着する。胎土は淡茶灰色の精良なものだが、細かな気泡が目立つ。I-2-ア類。

**55SD100下層出土土器**（Fig.39、CD-0443〜0451）

**須恵器**

蓋c3（15・16）　口径12.8・18.2cm、器高2.4・3.15cm。いずれもボタン状の摘みを貼り付ける。15の天井部外面はヘラ切りの後ヨコナデだが、16は回転ヘラケズリである。

坏c（17〜20）　口径10.8〜16.3cm、器高3.5〜5.15cm、高台径8.5〜11.6cm。底部はヘラ切りの後ナデが施される程度である。また17・18では、高台は低くなり底部と体部の境目が明瞭で、体部は丸みを失う。

**土師器**

大坏c（21）　口径19.0cm、器高5.45cm、高台径14.0cm。底部外面（高台内側）は回転ヘラケズリされる。全体の色調は赤茶色を呈する。

**黒色土器**

鉢（22）　口径20.2cm、器高7.2cm。丸底を呈し、体部も内湾しながら立ち上がり、口縁端部もわずかに内傾する。口縁部付近はヨコナデされ、体部や底部は内外面ともにヘラミガキを施すが、内面で特に顕著である。燻しは内面全体と外面の口縁部付近の一部にみられ、A類に分類され、燻し部分は黒色を呈し、鈍い光沢を放つ。外面のミガキの間からは体部をヘラケズリで成形した形跡が窺える。

**土抗出土土器**

**55SK067出土土器**（Fig.40、CD-0452・0453）

**土師器**

小皿a（1・2）　口径9.0・9.8cm、器高1.35・1.25cm、底径6.9・7.8cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

**陶器**

鉢（3）　底径12.4cm。残存する範囲には釉はなく、表面は暗茶灰色を呈している。体部外面はヨコナデとみられるが不明瞭、底部は粘土板を台上に置いたまま整形し特に調整は加えていないようである。内面は使用により平滑に変化するが砂粒が剥落しクレーター状を呈している。I類。

**55SK075出土土器**（Fig.40、CD-0454〜0456）

**土師器**

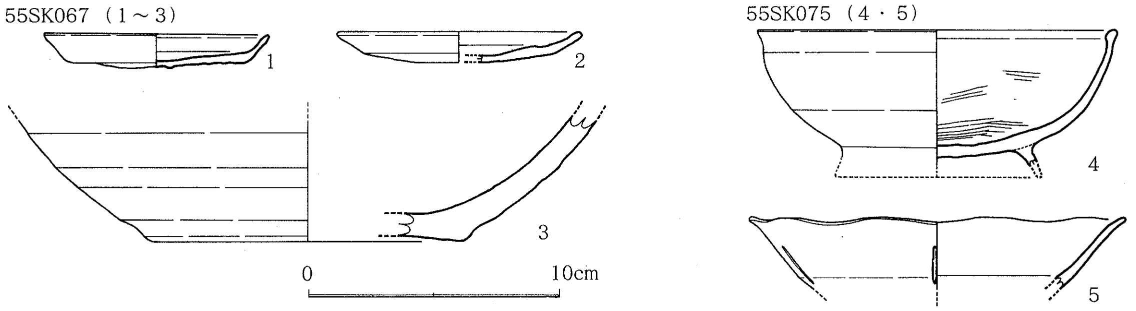



Fig.40　55SK067・075出土土器実測図（1／3）

椀c（4）　口径14.4cm、器高5.5cm、高台は端部を失うが径8.5cm前後に推定できよう。口縁端部は内側に膨らみを持たせており、玉縁状に見える。体部外面下半は回転ヘラケズリが施された可能性があり、砂粒の一定方向への動きが顕著である。内面には不明瞭ながらミガキcが観察され、口縁端部外面から内面の一部にかけて燻しがかかっており、本来は黒色土器A類の範疇で考えるべき資料かも知れない。

**越州窯系青磁**

坏（5）　口径15.0cmに復原できる。わずかに外反する口縁端部は花弁状を呈し、弁の窪んだ部分の一つおきに沈線状で縦方向のヘラ彫りが施される。見込みには小さな段があったとみられる。釉は残存部の全面にみられ、暗緑灰色に発色する透明感のあるもので、光沢がある。I-2-A類。

**その他の遺構出土土器**

**55SX007出土土器**（Fig.41、CD-0457）

**白磁**

皿（1）　口径9.4cm、器高1.9cm、底径3.8cmで、底部は露胎である。体部にかかる釉は透明度の高いもので、素地が透けて淡灰白色を呈する。IV-2-a類。

**55SX035出土土器**（Fig.41、CD-0458～0464）

**土師器**

坏b（2～9）　口径11.3～12.2cm、器高2.3～2.8cm、底径4.7～5.5cmを測る。大きく開く体部は回転ナデで仕上げられ、見込み部分にも回転ナデが及びナデは観察できない。底部は糸切りだが、板状圧痕を観察できる資料はない。いずれも小砂粒を含むが精良な胎土である。

**55SX059出土土器**（Fig.41、CD-0465～0469）

**土師器**

小皿a（10・11）　口径8.6・9.4cm、器高0.65・1.0cm、底径6.8・7.8cmで、10の底部はヘラ切りされ、板状圧痕は観察できない。11は糸切りされ、板状圧痕が残る。

**白磁**

椀（12）　口径14.4cmで復原でき、口縁端部に輪花がみられる。また輪花に対応して体部内面には縦方向の白堆線を入れる。釉は緑色味を帯びた透明なもので、明茶灰色に発色する。VII-c類もしくはVIII-4類とみられる。

小壺（13）　胴部最大径6.6cmで、かなり下位に位置するため下膨れの形状を呈する。体部外面過半は露胎で、ケズリ出しによって低い円盤状の高台を作り出す。釉は緑色味を帯びた透明なもので、明灰白色に発色する。

**陶器**

壺（14）　口径11.8cm。口縁端部を玉縁状に作り、体部外面には叩きによるとみられる段差が部

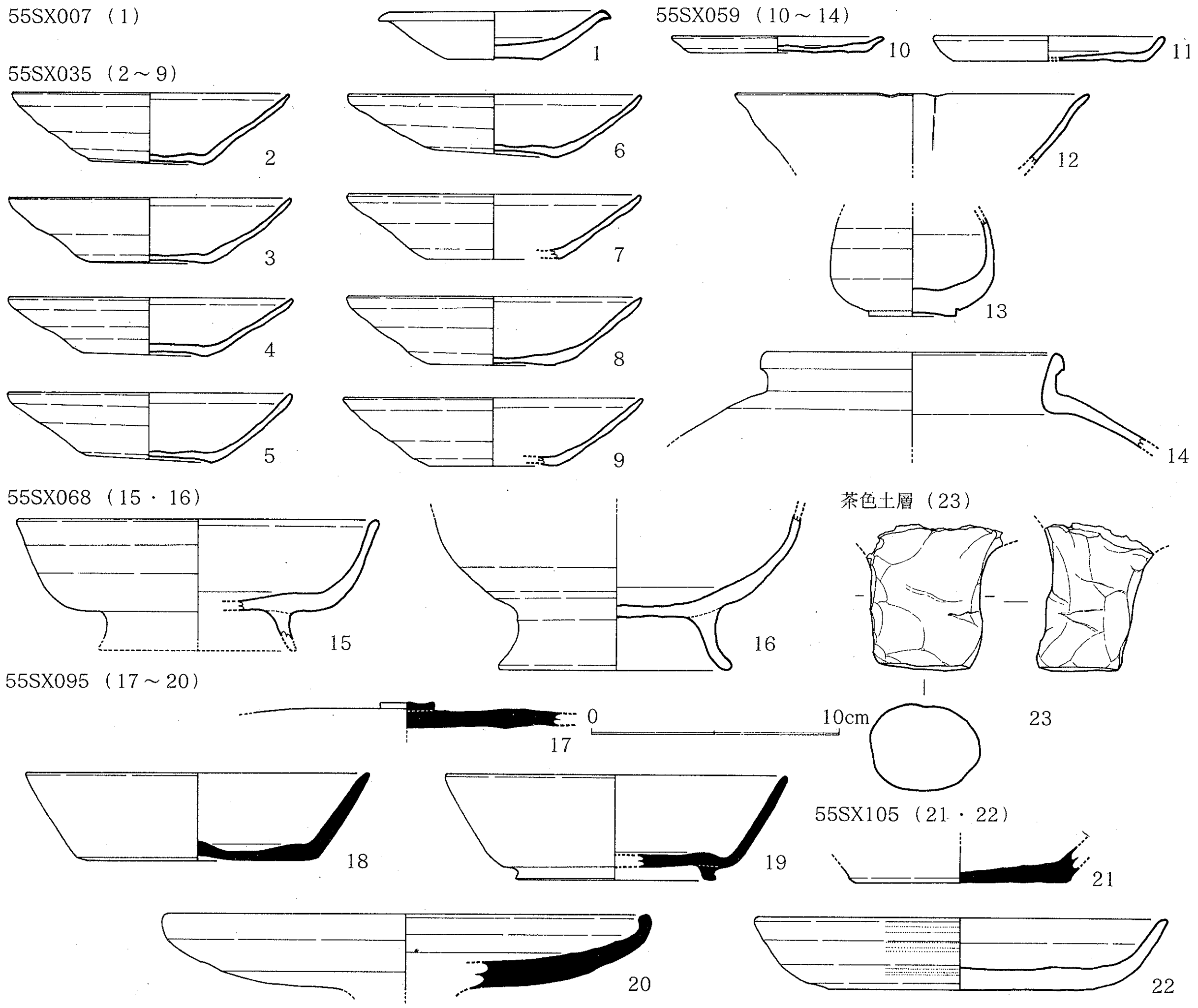



Fig.41　その他の遺構・層位出土土器実測図（1／3）

分的に残る。無釉で、橙色味を帯びた茶灰色を呈する。胎土は明茶色で、白色小粒子、赤褐色小斑粒を多めに含むほか、黒灰色粒子を若干含むやや粗めのものである。

**55SX068出土土器**（Fig.41）

**土師器**

椀c（15・16）　15は口径14.8cm、高台端部を失うがやや高めのものと推定でき、高台径も8cm程度に復原できる。16は高さ2.5cm、口径9.5cmの高台を有するもので、底部はヘラ切りされる。色調は橙色を帯びた明茶灰色を呈する。

**55SX095出土土器**（Fig.41）

**須恵器**

蓋c（17）　ボタン状の扁平な摘みの径は2.2cmで、天井部は回転ヘラケズリされる。

坏a（18）　口径14.0cm、器高3.55cm、底径9.9cm。底部はヘラ切りの後粗いナデを施す程度で終わる。焼成不良でやや軟質である。

坏c（19）　口径14.0cm、器高4.25cm、高台径8.2cm。ヘラ切りされた底部にやや低めの高台がつく。

高坏（20）　口径20.0cmに復原でき、底部外面は回転ヘラケズリされる。

**55SX105出土土器**（Fig.41）

**須恵器**

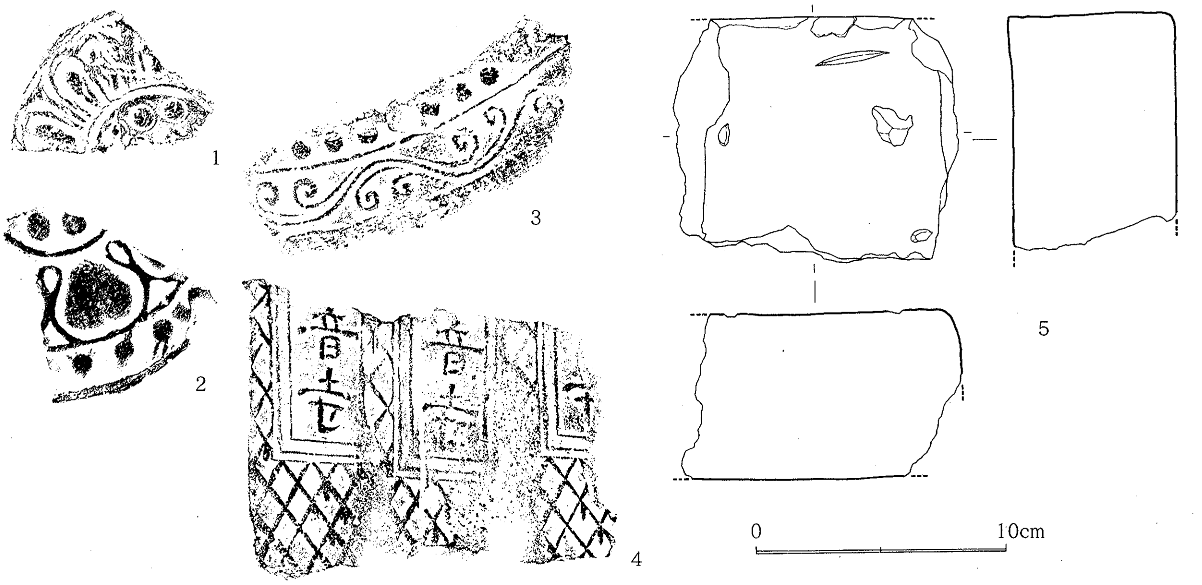



Fig.42　第55次調査出土瓦類実測図（1／3）

坏a（21）　底径9.6cm。底部はヘラ切りされたのちナデにより平滑にされる。

**土師器**

皿a（22）　口径16.8cm、器高2.9cm、底径10.7cm。内面は風化が進み調整は不明だが、外面の体部には回転ヘラミガキが観察できる。底部はヘラ切りされ、ヘラミガキによって平滑にされているが、ここも風化が進んでおり詳細な観察は困難である。

**茶色土層出土土器**（Fig.41）

**土師器**

脚（23）　大型品の脚部とみられる。高さ5.7cm、幅4.7cm、厚さ3.5～4.0cm前後で、断面は略楕円形を呈し、脚端部は平坦に仕上げる。胎土は大粒の白色砂を多量に含む粗いものである。

（B）瓦類（Fig.42）

軒丸瓦（1・2）　1は複弁八葉蓮華文で、老司式である。55SE110出土。2は形式化した単弁八葉蓮華文である。55SX040出土。

軒平瓦（3）　ゆったりとした偏行唐草文を配するもので、老司I式である。55SX098出土。

平瓦／文字瓦（4）　斜格子文内に切り込む三重枠内に「観世音寺」の左字を記した叩き板を丁寧に連続して並べる。55SE030黒色土上層出土。

無文専（5）　長さ9.6cm、幅11.4cmの破片で周囲のうち一辺のみ当初面を残す。厚さは6.5cmを測る。残存する3面のうち側面と正面は板材の当たり痕跡とみられ未調整であるが、残る1面はヘラケズリ調整される。大粒の砂粒を多量に含み軟質である。55SX095出土。

（C）石製品（Fig.43、CD-0470～0477）

磨製石斧（1）　基部は失われるが、現存長10.1cm、最大幅8.1cm、厚さ4.7cmを測る。表面中程に塙打痕が集中的にみられる。55SX029出土。

温石（2）　長さ5.2cm、幅7.3cmの破片で、厚さは1.5cmを測る。火熱により黒変する部分が残るため石鍋の加工品とみられる。図の上面及び右側面は平坦なケズリによる加工面だが、他は破断面である。側辺に寄った位置に径1.3cm（中程では径1.0cm）の穿孔があり、両面から穿たれたようである。調査区北寄りの茶色土層出土。

石鍋加工品（3）　石鍋の底部片を加工したもので、現存長13.0cm、幅10.0cm、厚さ1.4～

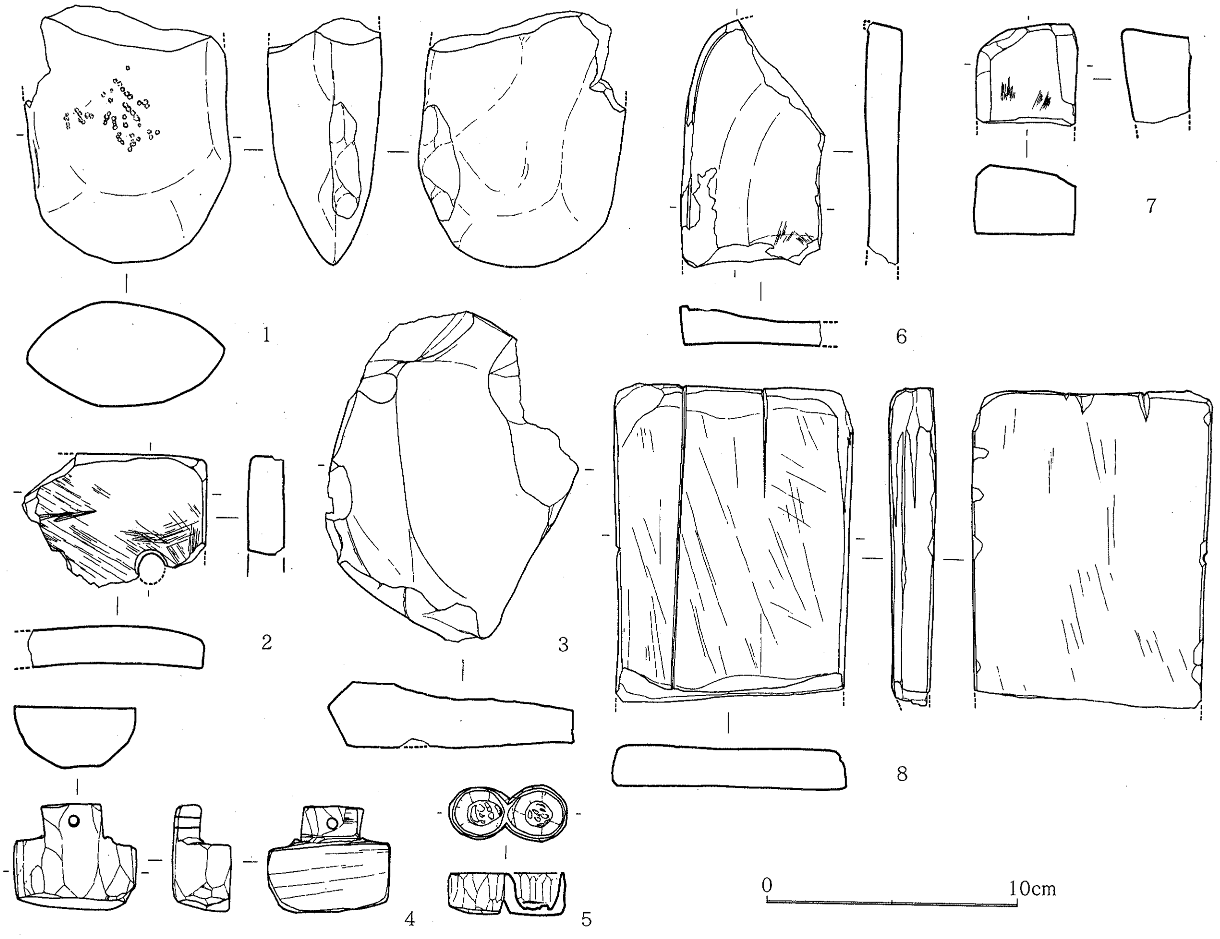



Fig.43　第55次調査出土石器・石製品実測図（1／3）

2.6cmを測る。底部部分は鍋当初の面をそのまま残しており、煤が全面に付着している。他は破断面をケズリ加工するほか、体部の破断面もケズリ加工している。未加工部分をかなり残しており、未完成の二次加工品であろう。55SE050淡灰色土層出土。

分銅型製品（4）　略半円筒形を呈する体部に、幅2.5cm、高さ1.4cm、厚さ1.0cmの突起を削り出し、そこに径4mmの穿孔を行うものである。各面は丁寧にケズリ加工され、とくに平坦部分は丁寧なケズリによってきれいな平坦面を作り出している。55SX040出土。

容器状製品（5）　ほぼ同型の容器が二つ並んだもので、長さ4.7cm、幅2.35cm、高さ1.7cmを測る。一材から削りだしており、全面ケズリ痕が明瞭である。片方の容器は内面調整時にケズリ過ぎたためか一部貫通する部分がある。55SX106出土。

硯（6）　長さ9.7cm、幅5.7cmで、側面の一部を残すのみで全体の形状は知り得ない。厚さは縁部で1.6cm、擦り込みの著しい部分で1.0cmである。周囲及び底部はケズリにより整形されている。肌理細かな砂岩製で、暗灰色を呈する。55SD001の礫が詰まった埋土中から出土した。

砥石（7・8）　7は破断面を除く5面が使用面で、研磨による擦痕が観察される部分がある。長さ4.0cm、幅4.1cm、厚さ2.8cmを測り、砂岩製で、55SE085出土。8は長さ12.5cm以上、最大幅9.5cm、厚さ1.5～1.7cmで、大きな平坦部分2面とその両側2面が使用面とみられ、細かな擦痕が観察される。また1面に幅1mm前後で直線のタテ沈線があり、浅いV字状を呈しており、これも何らかの研ぎ行為に関わるものとみられる。暗灰色を呈する砂岩製で、調査区南端の茶色土層出土。

（5）小結

（A）主要遺構の年代

**井戸**

**55SE020**　資料数は少ないが土師器では糸切りが大半を占め、陶磁器では龍泉窯系青磁I類の存在が認められる。この点を踏まえると12世紀中頃から後半に捉えておくのが妥当であろう。

**55SE030**　土師器はすべてヘラ切りで、陶磁器はC期の傾向とみてよく、大宰府編年XIIB期とみられ、12世紀前半頃と考えられる。

**55SE050**　土師器ではヘラ切りと糸切りが混在し、白磁では椀VIII類がみられ、龍泉窯系青磁I類も微量だが出土しており、陶磁器D期の傾向がみえている。従って土師器の要素はやや古くみえるものの、12世紀中頃から後半と捉えておいて問題なかろう。

**55SE060**　土師器はすべて糸切りで、小皿bの出現が指摘でき、陶磁器では龍泉窯系青磁II-b類、白磁皿IX-1類が含まれている。これらは土師器ではXIX期以降、陶磁器ではE期の傾向が顕著であり、13世紀後半と捉えられるもので、井戸の中では最も新しい時期となる。

**55SE065**　土師器はすべて糸切りで、法量からXV期頃とみられ、陶磁器ではD期に該当する。12世紀後半から13世紀初頭とみておきたい。

**55SE085**　図示したのはすべてヘラ切りだが、破片中に糸切りのものが若干混じっている。ただ主体はやはりXIIB期とみられ、これにわずかながら次期の傾向が入るとみていいだろう。12世紀前半から中頃に考えたい。

**55SE110**　須恵器は8世紀後半の傾向を示し、土師器坏aもその範疇で問題ない。ただ小片のなかに9世紀中頃かと思われる資料も若干入っており、あるいはこうした資料に引っ張られて新しく考える必要があるかもしれない、ただ遺構の切り合いが激しいことを考慮するとやはりここでは絶対量の飛び抜けて多い、8世紀末から９世紀前半頃と考えておきたい。

**溝**

**55SD100**　須恵器の傾向を見ると8世紀内の幅広い範囲で含まれているようだが、基本的には後半の傾向が強そうである。黒色土器や越州窯系青磁の存在に遺構の切り合い関係（55SE110／8世紀末から9世紀前半頃はこの遺構より新しい）も考慮するとやはり8世紀後半には埋没したとみるのが妥当であろう。

**その他の遺構**

**55SX035**　坏bが集中して出土したもので、当該調査中最も新しい遺構の一つとして捉えられよう。ただ坏bの研究は乏しく、大宰府史跡70次調査のSD1805が知られる程度（もちろん他にもあるが未報告のものが多い）で、その傾向は掴みきれていない。いまSD1805と比較すると、資料の口径の平均値はSD1805で11.2cm、当該資料で11.8cmとやや大きめである。これまでの大宰府における土師器の流れをみると口径は時期とともに小さくなるのが一般的傾向であり、これをそのまま援用するとSD1805よりはやや古く位置づけることができよう。ただ具体的な時期の提示は困難であり、概ね15世紀代であろうというにとどめたい。

**55SX095・105**　いずれも55SD100の南北肩につづいて検出された堆積土層だが、ほぼ8世紀後半の傾向を示しており、55SD100の埋没時期と併せて注意しておくべき遺構である。調査では55SD100との切り合いを明確にできなかったが、溝肩付近の低い部分が溝の最終埋没時に同時に埋没した可能性も推測し得る範囲である。とにかくこの時期には、調査地付近で一端平坦な地面が蘇ったと考えていいだろう。

(B) 溝について

奈良時代の東西方向と推定される大溝55SD100は、検出長が短く溝の主軸方位を知るには至ってないものの、任意中点から得られた座標値は政庁南門中点から北へ110.42mとなり、小尺では370尺（0.298m／尺）、大尺では310尺（0.356m／尺）という数値が得られる。今これと比較する東西方向の溝資料がないため、大宰府における位置づけを比較検討することはできないが、政庁前面域で検出された基幹排水路で且つ官衙域を区切る重要な溝SD2340と規模や時期が近似していることには注意する必要があり、観世音寺の東側にも何らかの区画が存在した可能性を示唆するものである。

また南北溝55SD025は出土遺物から12世紀以降の所産とみられる（図は提示していない。出土遺物一覧表のS-25・S-84参照）が、55SE050より新しく12世紀中頃から後半よりは古くなるとみられる。この切り合い関係と遺構の時期の検討に問題がなければ、55SD025は12世紀前半から後半の間に存在した可能性が考えられ、その規模や方向性を考慮すると（やや不安な要素を残すものの）平安期の大宰府条坊を考える資料として浮上してくる。

そこで溝の具体的な位置を計算すると、溝の中心は政庁南門中点から東へ785.3～785.5m付近に位置している。近在する関連遺構の数値をみると観世音寺講堂中心が政庁南門から東へ594.74m（小尺2000尺）であることから、そこから190.76m東に位置していることになる。平安期の大宰府条坊の道路幅は約3m（側溝心々間）ですべてほぼ近似したものであり、その数値を援用して今回検出の溝55SD025を道路の東側溝と捉えた場合、推定される道路の中心は観世音寺中心から189.3m前後の位置と捉えられる。

さて条坊の各道路間の距離の多くも解明が進行しているが、地点によってばらつきがあり単純な計算はできない。しかしこれまで整理されている道路間の距離をみると概ね90～100mの範囲内に収まっており、今回導き出した189.3mという数値を半分にすると94.65mという数値が得られ、平安期条坊を区画するこれまでの遺構の情報に近い数値が得られる。

しかしながら難点もあり、きわめて近接した時期とみられる55SE030が切り合い関係にはないもののここで推定した道路面の半分以上と重なっており、問題点も残っている。近辺での条坊痕跡の検出と過去の調査情報の整理に期待し、その可能性を示唆するにとどめたい。

# III. 総　括

本書の冒頭にも記したように字御所ノ内の範囲内ではこれまでに8件の調査が実施され、既報告分としては九州歴史資料館が調査した大宰府史跡第47次調査[1]（以下大47次と略す。同様に条坊跡調査関係のものは条51次、条55次と略す）があるだけで、今回の報告分を除いてもまだかなりの情報が眠ったままであり、詳細な検討はこれらの報告を踏まえた後に行うのが望ましいだろう。そこで今回は各地点での特徴を明記してこの報告書の総括としておきたい。

まず大47次（FIg.44）では柱筋を揃えた掘立柱建物2棟（SB1350・1355）が南北に並んで建ち、その北側に東西方向の柱列（SA1352・1353）が走っている。この柱列を境に北側は井戸等の大きな遺構が目立つ空間となり、柱列の南側は建物のほか土抗やピットが目立つ。

さて、この遺構のあり方は条51次の状況と近似しており、その関係を整理すると、大47次調査の建物の時期は柱穴の一つが13世紀後半の土抗（SK1359）に切られることから、その頃には廃絶していたと考えられている。当該地点は整地土が見えず地山上に遺構が点在しているため、直接的な層位関係で条51次の調査成果と比較することはできない。しかし、やや方位は異なるが柱筋を揃える南北方向の建物が並立する点は近似した建て方と指摘でき、時期的にも13世紀後半以前に位置づけることが可能である点から、条51次調査の下層遺構に関連するものと考えられよう。

そうすると下層遺構が形成された時期には、このエリアには複数の南北方向に制約を受けた建物群があったことになる。字名が御所ノ内であること、さらには多量の陶磁器が出土したこと等を踏まえると、一般集落とするよりも当時の大宰府における上位階層の居住区域と見るのが妥当であろう。さらに形成された時期が13世紀中頃から後半と捉えると、少弐氏の活躍した時期と重複する。ただ大宰府には金光寺跡とされる一角に当該時期を含む居館及び宗教施設が見いだされており、単純に結論づけることは難しい。しかし立地を考えるとわずかに南に傾斜した平地に位置し、周辺に観世音寺や鉾ノ浦等の生産集団を抱えることを踏まえると、御所ノ内地区は、当該期の大宰府における中枢部と見るのが妥当ではなかろうか。

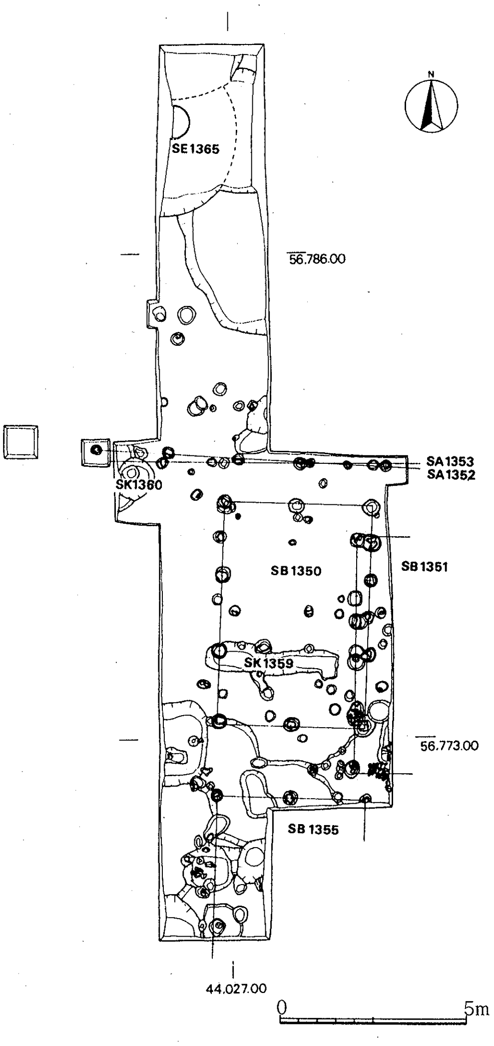



Fig.44　大宰府史跡第47次調査遺構配置図（1／200、同概報より）

次に条55次では奈良時代（8世紀後半）、12世紀前半から13世紀初頭、13世紀後半、15世紀代等の遺構が重なっているが、上記した大47次や条51次に関連する時期のものは少ない。しかし大47次では12世紀後半の土抗も検出されており、条51次では最下層に丸底坏を含む時期のものが推定されるなど、この地区の土地利用が活発になるのは平安時代後期から鎌倉時代、つまり12世紀を中心とした時期に求めることができるだろう。

ただし条51次の最下層は他の地点と異なり粘土質の地山が検出されておらず、調査し得た深さの

範囲では深層部は砂の堆積で形成されている。これに関連して思いつくのは、条51次の北側付近で浅い開折谷に関わる一連の小崖（Fig.45）とみられる、小さな段丘崖の存在が金田章裕氏によって指摘されていることであり[2]、さらに高橋学氏の分析[3]を援用すると10世紀末頃にはこの付近までが御笠川の河川敷であった可能性が指摘されている[4]。条51次の成果はこれを否定するものではなく、しかも条55次や大47次の遺構形成面の様相を踏まえると、妥当な指摘であると認識したい。ただ時期については確証を得るほどの調査はできておらず、条51次の出土遺物の範囲では遺構の形成を可能とする地盤の形成が、10世紀末以降であることは否定しないという程度にとどまる。この問題については、試掘調査も含めた周辺の成果が蓄積されており、将来の報告時にはより具体的に提示できるものと思う。

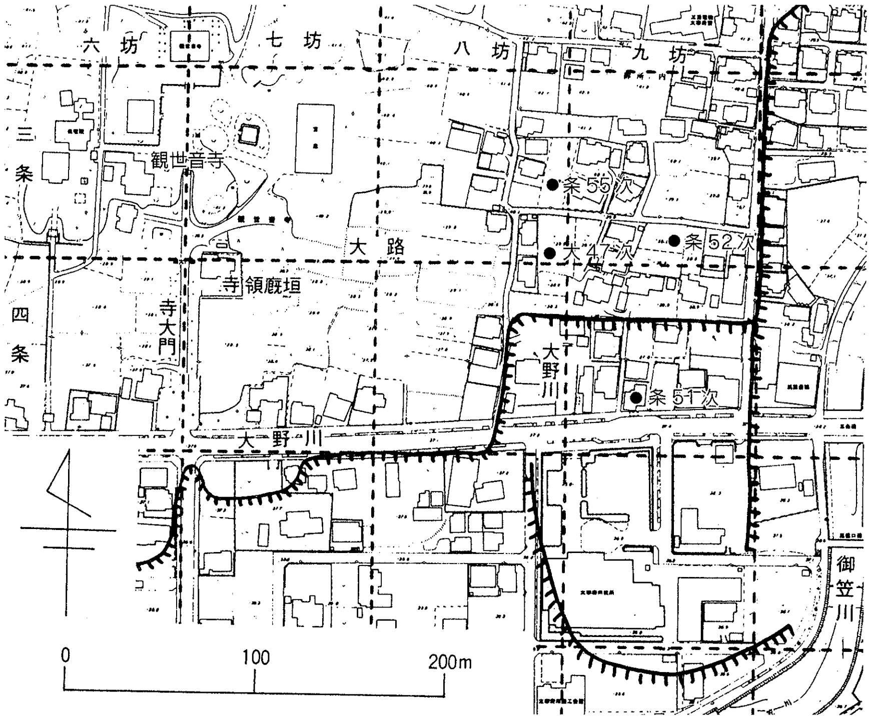



Fig.45　御所ノ内周辺にみえる小崖（註2　第4図に加筆）

このように字御所ノ内の範囲は、中世大宰府を考察するうえできわめて重要な地点であることが明らかとなった。さらにその出土遺物には目を見張るものが多く、陶磁器研究にも大きな成果をもたらすものと考えたい。これからのより緻密な調査が期待される。

註

1）石松好雄ほか『大宰府史跡－昭和52年度発掘調査概報－』1978年　九州歴史資料館

2）金田章裕「大宰府条坊プランについて」『人文地理』第41巻第5号

3）高橋学「微地形・超微地形分析からみた古代の水田開発」『条理制研究』第2号　1986年　条里制研究会

4）註2）前掲書。なおすぐ北側で調査した条52次調査（未報告）でも条55次のような安定した地山面は未確認であり、金田氏の示す範囲より御笠川（大野川）の旧河川敷の範囲は若干広がる可能性がある。

Fig.46　第51次調査遺構略測図（1／100）

Tab.1-1　大宰府条坊跡第51次調査遺構番号台帳

| S-番号 | 遺構番号 | 種　別 | | 地区 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 51SX001 | 窪み | 1←30、1←36・37・38、1←34←33、1←88 | E1 |
| 欠番 | | | | ／ |
| 3 | | 窪み | | E2 |
| 4 | | 窪み | | E2 |
| 5 | 51SX005 | 窪み | 3・4とともに堆積土の一部と見なされる | E2 |
| 6 | | ピット | | E2 |
| 7 | | ピット | | E2 |
| 8 | | 窪み | | E2 |
| 9 | | 窪み | | E2 |
| 10 | 51SX010 | 窪み | 10←78、10←11・12……堆積土の一部 | E2 |
| 11 | 51SX011 | ピット | | E2 |
| 12 | 51SX012 | ピット | | E2 |
| 13 | | ピット | | D2 |
| 14 | | 窪み | | D2 |
| 15 | 51SK015 | 土抗／浅い | 15←43、15←20 | D1 |
| 16 | | 窪み／浅い | | D2 |
| 17 | | ピット | | D2 |
| 18 | | 窪み | | D2 |
| 19 | | ピット | | D2 |
| 20 | 51SK020 | 土抗／浅い | 15←20 | D1 |
| 21 | 51SK021 | ピット | | D1 |
| 22 | 51SX022 | ピット | 22←23←24 | E1 |
| 23 | | ピット | | E1 |
| 24 | | ピット | | E1 |
| 25 | 51SK025 | 土抗／浅い | 25←41・42 | DE1 |
| 26 | | ピット | | E1 |
| 27 | | ピット | | D2 |
| 28 | | ピット | | D2 |
| 29 | 51SX029 | ピット | | E2 |
| 30 | 51SX030 | 窪み | | E1 |
| 31 | | ピット | | E1 |
| 32 | | ピット | | E1 |
| 33 | 51SX033 | ピット | | E1 |
| 34 | | ピット | | E1 |
| 35 | | ピット | | D1 |
| 36 | 51SX036 | ピット | 36←23、36←26 | E1 |
| 37 | 51SX037 | ピット | | E1 |
| 38 | | ピット | | E1 |
| 39 | | ピット | | E1 |
| 40 | | 窪み | 40←48←51←53 | C2 |
| 41 | | ピット | | D1 |

Tab.1-2　大宰府条坊跡第51次調査遺構番号台帳

| S-番号 | 遺構番号 | 種　別 | | 地区 |
|---|---|---|---|---|
| 42 | | ピット | | D1 |
| 43 | 51SX043 | 窪み | | D1 |
| 44 | | ピット | | D1 |
| 45 | 51SX045 | 窪み | 45←79ほか | E2 |
| 46 | | ピット群 | | D1 |
| 47 | | ピット | | D2 |
| 48 | | ピット | | D2 |
| 49 | | ピット | | D2 |
| 50 | 51SK050 | 土抗 | 59←50 | BC2 |
| 51 | | ピット | | C2 |
| 52 | 51SX052 | ピット | | C2 |
| 53 | | 窪み | | C2 |
| 54 | | ピット | | D2 |
| 55 | 51SX055 | ピット | | C2 |
| 56 | | ピット | | C2 |
| 57 | | ピット | | C2 |
| 58 | | ピット | | C2 |
| 59 | | 窪み | | C2 |
| 60 | | 窪み | 60←50・72・73・74・77 | B2 |
| 61 | | 窪み | | C2 |
| 62 | | ピット | | C2 |
| 63 | | ピット | | B2 |
| 64 | | ピット | | E1 |
| 65 | 51SX065 | 土抗? | 65←70 | C2 |
| 66 | | ピット | | D2 |
| 67 | | ピット | | D1 |
| 68 | | ピット | | C2 |
| 69 | | ピット | | D2 |
| 70 | | 窪み | | C2 |
| 71 | | ピット | | E2 |
| 72 | | 窪み | | B2 |
| 73 | | ピット | | B2 |
| 74 | 51SX074 | ピット | 60←74 | B2 |
| 75 | 51SX075 | ピット | 73←75 | B2 |
| 76 | 51SX076 | ピット | | B2 |
| 77 | | 窪み | 76←87 | B2 |
| 78 | | ピット | | E2 |
| 79 | | ピット | | E2 |
| 欠番 | | | | ／ |
| 81 | 51SX081 | ピット | | E1 |
| 82 | | ピット | | E1 |

Tab.1-3　大宰府条坊跡第51次調査遺構番号台帳

| S-番号 | 遺構番号 | 種　別 | | 地区 |
|---|---|---|---|---|
| 83 | | ピット | | E1 |
| 84 | | ピット | | E1 |
| 欠番 | | | | ／ |
| 86 | | ピット | | D1 |
| 87 | | ピット | | A2 |
| 88 | 51SX088 | 窪み | | E1 |
| 89 | 51SX089 | 窪み | | A2 |
| 90～99欠番 | | | | ／ |
| 100 | 51SX100 | 暗灰茶色土中の土器群一括 | | F1・2 |
| 101 | | ピット | 下層 | D1 |
| 102 | 51SX102 | ピット　柱穴 | 下層 | D1 |
| 103～109欠番 | | | | ／ |
| 110 | 51SB110 | 堀立柱建物　黄色土埋土、柱穴a～e | 下層 | D1ほか |
| 111～119欠番 | | | | ／ |
| 120 | 51SB120 | 礎石建物　1間分のみ確認 | 下層 | BC2 |
| 121～149欠番 | | | | ／ |
| 150 | 51SX150 | 暗灰茶色土・黒色土II・暗灰色砂を同時に取り上げ | | 東北隅部 |

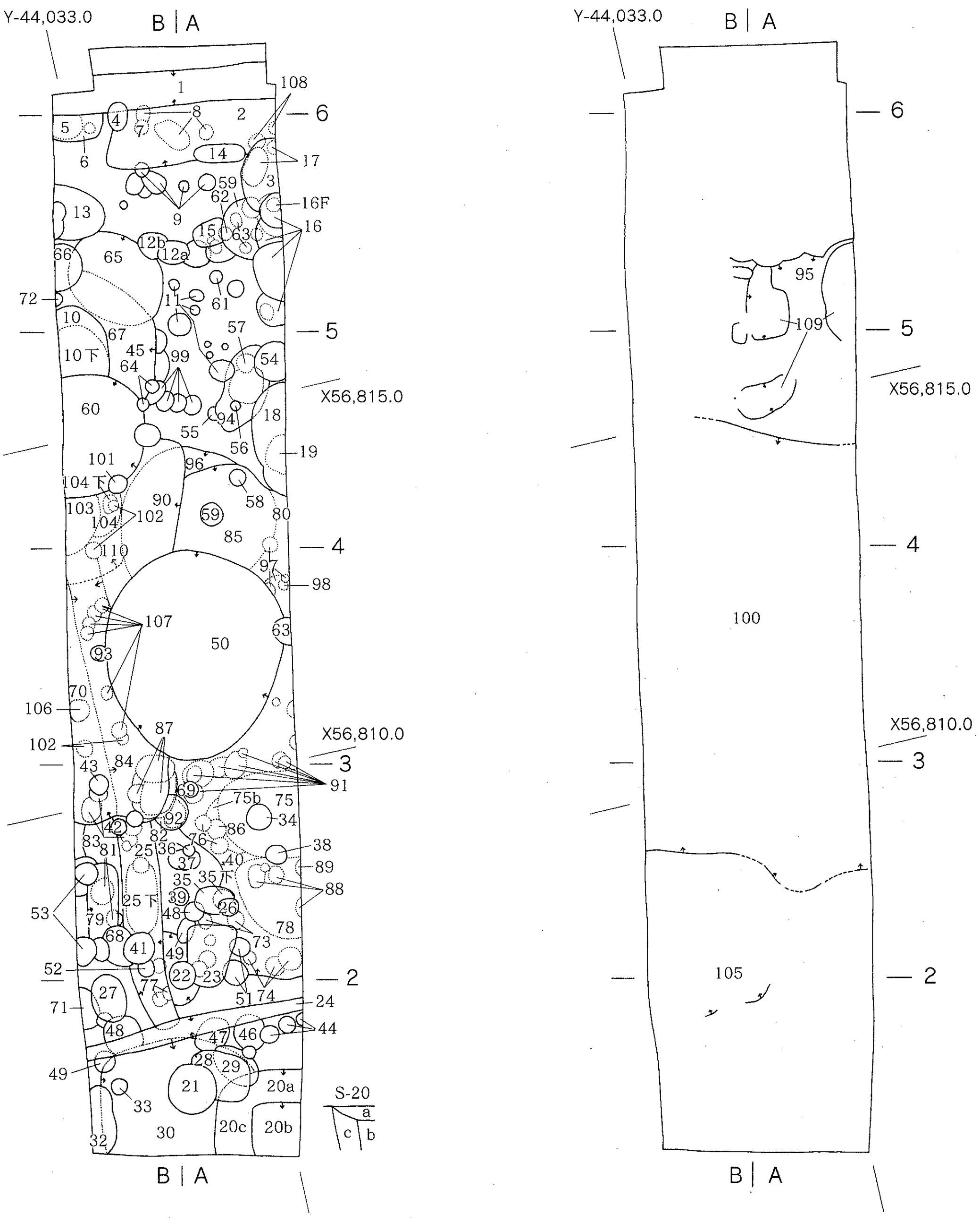



Fig.47　第55次調査遺構略測図（1／100）

Tab.2-1　大宰府条坊跡第55次調査遺構番号台帳

| S-番号 | 遺構番号 | 種　別 | | 地区 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 55SD001 | 溝 | 礫が詰まる。黄茶色砂埋土　1←2 | AB6 |
| 2 | | 窪み | 黒色埋土 | AB5 |
| 3 | | 窪み | | A5 |
| 4 | | ピット | 4←1 | B5 |
| 5 | | ピット | S-6下層検出 | B5 |
| 6 | | ピット | 1←6←5 | B5 |
| 7 | 55SX007 | ピット | 2←7 | B5 |
| 8 | | ピット群 | 2←8 | AB5 |
| 9 | | ピット群 | | AB5 |
| 10 | | 土抗 | 上下に分けて遺物取り上げ　　10→60 | B4 |
| 11 | | ピット群 | | A4・5 |
| 12a | | ピット | | B5 |
| 12b | | ピット | | B5 |
| 13 | | 窪み | | B5 |
| 14 | | ピット | 14←2 | A5 |
| 15 | | ピット | 15→59 | A5 |
| 16 | | ピット群 | 黒色埋土 | A5 |
| 16下 | | ピット | | A5 |
| 17 | | ピット群 | 3←17 | A5 |
| 18 | | 窪み | | A4 |
| 19 | | ピット | 18←19 | A4 |
| 20a | 55SE020 | 井戸 | 上面埋土　20←30 | A1 |
| 20b | 55SE020 | 井戸枠内埋土 | | A1 |
| 20c | 55SE020 | 井戸裏込土 | | A1 |
| 21 | | ピット | 上層から切り込む遺構　茶色埋土 | A1 |
| 22 | | ピット | 上層から切り込む遺構　茶色埋土 | A1他 |
| 23 | | ピット | 上層から切り込む遺構　茶色埋土　22←23 | A2 |
| 24 | 55SD024 | 溝 | 上層から切り込む遺構　最新?　24←25・30・46～49 | AB1 |
| 25 | 55SD025 | 溝 | 黒色埋土 | B1・2 |
| 25下 | | ピット | 25下層検出ピット | B2 |
| 26 | | ピット | | A2 |
| 27 | | ピット | 石あり　27←48 | B1 |
| 28 | | ピット | 21←28←29←47←30 | A1 |
| 29 | 55SX029 | ピット | | A1 |
| 30 | 55SE030 | 井戸 | 黒色埋土／遺物ラベルS-30の表記は黒色埋土上層を意味する | A1・2 |
| 31 | 欠番 | | | ／ |
| 32 | | ピット | 32←30 | B1 |
| 33 | | ピット | 33←30 | B1 |
| 34 | | ピット | 34←40 | A2 |
| 35 | 55SX035 | ピット | 26←35←35下 | A2 |
| 35下 | | ピット | 35下層検出 | A2 |

Tab.2-2　大宰府条坊跡第55次調査遺構番号台帳

| S-番号 | 遺構番号 | 種　別 | | 地区 |
|---|---|---|---|---|
| 36 | | ピット | 36←37 | A2 |
| 37 | | ピット | | A2 |
| 38 | | ピット | 38←40 | A2 |
| 39 | | ピット | | A2 |
| 40 | 55SX040 | 窪み | 黒色埋土　これを除去すると遺構が見える | A2・3 |
| 41 | | ピット | 41←52←25 | B2 |
| 42 | | ピット群 | 42←25 | B2 |
| 43 | | ピット | 43←70 | B2 |
| 44 | | ピット群 | | A1 |
| 45 | | 堆積土 | S-65・67の上面に被る堆積土 | B4・5 |
| 46 | | ピット | 24←46←44 | A1 |
| 47 | | ピット | 24←47←30 | A1 |
| 48 | | ピット | 24←48←30 | B1 |
| 49 | | ピット | 24←49←30 | B1 |
| 50 | 55SE050 | 井戸 | 茶白色土（白色ブロック混） | AB3 |
| 51 | | ピット群 | 23←51←40 | A2 |
| 52 | | ピット | 41←52←25 | B2 |
| 53 | | ピット群 | | B2 |
| 54 | | ピット | | A4 |
| 55 | | ピット | | A4 |
| 56 | | ピット | 56←55 | A4 |
| 57 | | ピット | 54←57←18←19 | A4 |
| 58 | | ピット | 礎盤あり　12a←58 | A5 |
| 59 | 55SX059 | ピット | | A4 |
| 60 | 55SE060 | 井戸 | 枠埋土上面に礫詰め、周囲を茶白色粘土で密封 | B4 |
| 61 | | ピット | | A5 |
| 62 | | ピット群 | 60←62 | B4 |
| 63 | | ピット群 | 59←63 | A5 |
| 64 | | ピット | 64←66 | B5 |
| 65 | 55SE065 | 井戸 | 45←65←67 | B5 |
| 66 | | ピット | 66←45 | B5 |
| 67 | 55SK067 | 土抗 | 45←65←67 | B4 |
| 68 | 55SX068 | ピット | 淡茶色粘土埋土　41←68←25 | B2 |
| 69 | | ピット | 40→69 | A2 |
| 70 | | 窪み | 40→70 | B2・3 |
| 71 | | ピット | 27←71 | B1 |
| 72 | | ピット | 72←67 | B5 |
| 73 | | ピット群 | 40←73→26・48 | A2 |
| 74 | | ピット群 | 40←74 | A2 |
| 75 | 55SK075 | 土抗 | 40←75 | A2 |
| 75b | 55SK075 | 土抗 | 75の埋土の違い……75＝黒褐色土、75b＝茶褐色土 | A2 |

Tab.2-3　大宰府条坊跡第55次調査遺構番号台帳

| S-番号 | 遺構番号 | 種　別 | | 地区 |
|---|---|---|---|---|
| 76 | | ピット群 | 40←76 | A2 |
| 77 | | ピット群 | 77→25 | B1・2 |
| 78 | | 窪み | 40←78　ただし75との関係は不明瞭で判断つかず | A2 |
| 79 | | 窪み | 79→53・68 | B2 |
| 80 | | 窪み | 40と同一か | A3・4 |
| 81 | | ピット群 | 79←81 | B2 |
| 82 | | ピット | 淡白灰色土埋土　82→70 | B2 |
| 83 | | ピット群 | 70←83←25 | B2 |
| 84 | | 溝状 | 70←84 | B3 |
| 85 | (55SD025) | 井戸 | 80←85←50 | A3・4 |
| 86 | 55SE085 | ピット | | A2 |
| 87 | | 土抗 | 87bも同一遺構の埋土差 | B2 |
| 88 | | ピット群 | 40←78←88 | A2 |
| 89 | | ピット | 40←78←89 | A2 |
| 90 | | 窪み | 黒褐色土埋土　70と同一か | B3・4 |
| 91 | | ピット群 | 40←91 | A2・3 |
| 92 | | ピット | 87←92 | B2 |
| 93 | | ピット | | B3 |
| 94 | | 土抗 | 55←94 | A4 |
| 95 | 55SX095 | 堆積層 | | A4・5 |
| 96 | | 窪み | 淡茶色土　80←96　85の一部が見えているらしい | A4 |
| 97 | | ピット群 | | A4 |
| 98 | 55SX098 | ピット | 柱痕 | A3 |
| 99 | | ピット群 | | AB4 |
| 100 | 55SD100 | 大溝? | 100←95 | 2～4 |
| 101 | | ピット | 60→101 | B4 |
| 102 | | ピット群 | | B3・4 |
| 103 | | ピット | 84→103→60 | B4 |
| 104 | | ピット | | B4 |
| 105 | 55SX105 | 堆積層 | | AB2 |
| 106 | 55SX106 | ピット | 70←106 | B3 |
| 107 | | ピット群 | 84←107 | B3 |
| 108 | | ピット | | A5 |
| 109 | | ピット群 | 95←109 | A4・5 |
| 110 | 55SE110 | 井戸 | 85←110 | B4・5 |

大宰府条坊跡第51次調査遺構番号台帳

| | |
|---|---|
| ふりがな | だざいふじょうぼうあと　19 |
| 書名 | 大宰府条坊跡　XIX |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 太宰府市の文化財 |
| シリーズ番号 | 第 59 集 |
| 編著者名 | 狭川真一 |
| 編集機関 | 太宰府市教育委員会　／　株式会社　海援社 |
| 所在地 | 〒818-0198　福岡県太宰府市観世音寺一丁目1番1号 |
| 発行年月日 | 平成14(2002)年2月28日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| だざいふじょうぼうあと<br>大宰府条坊跡<br>第51次調査 | だざいふし<br>太宰府市<br>かんぜおんじ<br>観世音寺5丁目<br>1-6 | 402214 | 210044 | | | 19850227<br>19850325 | 45m$^2$ | 医院建設 |
| だざいふじょうぼうあと<br>大宰府条坊跡<br>第55次調査 | だざいふし<br>太宰府市<br>かんぜおんじ<br>観世音寺5丁目<br>2-27 | 402214 | 210044 | | | 19850731<br>19850905 | 47m$^2$ | 住宅建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大宰府条坊跡<br>第51次調査 | 都市遺跡<br>(大宰府条坊) | 鎌倉 | 掘立柱建物<br>礎石建物<br>土坑 | 土師器　須恵質土器　瓦質土器<br>輸入陶磁器(多数)<br>ガラス小壺　銅銭 | 層位中から輸入陶磁器が<br>多量に出土。<br>規格性の高い建物配置。 |
| 大宰府条坊跡<br>第55次調査 | 都市遺跡<br>(大宰府条坊) | 奈良<br>平安 | 井戸<br>溝 | 須恵器　土師器　輸入陶磁器<br>緑釉陶器 | 奈良時代の東西溝 |

# 大宰府条坊跡XIX

太宰府市の文化財　第59集

平成14（2002）年2月

発行　太宰府市教育委員会

編集　株式会社　海援社

印刷　福博綜合印刷株式会社